Vol.76通巻863号　平成6年2月25日発行　毎月1回25日発行　昭和62年3月19日第3種郵便物認可　ISSN 0912-8182

建築と社会
Architecture and Society

2 1994

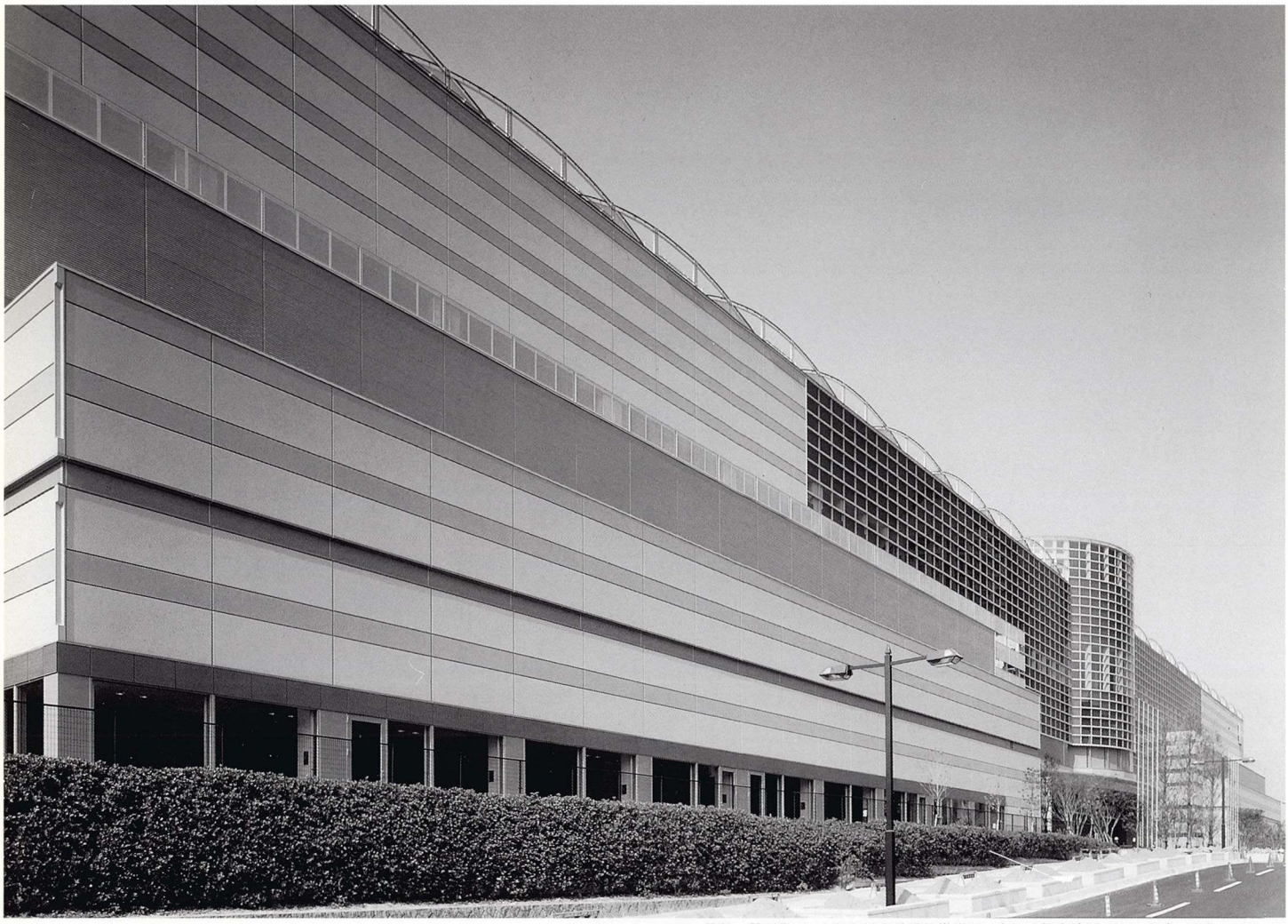
特集

九州のインスタレーションと貌



日本建築協会

日本最大の国際見本市会場に活躍するグランデ



インテックス大阪６号館　設計監理 大阪市都市整備局営繕部・東畑建築事務所 施工 鹿島・東急・松村ＪＶ

１棟での展示面積が４万㎡。国内最大規模の見本市会場「インテックス大阪・新６号館」が、大阪・南港に完成しました。市制百周年記念プロジェクト「テクノポート大阪」のコスモスクウェア地区に位置する本棟は、展示の大型化に対応するため、既設6.7号館を撤去した跡地に建設され、既存1～5号館と合せて総展示面積が７万㎡余となり、この面でも日本一を誇っています。

新６号館は建物の四周が700m 以上にも及ぶ巨大な展示館で、その外壁にグランデのスタンダードパネル１万１,400㎡が横張で用いられています。乾式工法の中でも工期の短縮、材料費や仕上げコストの低廉化、意匠面での活用性など、時代ニーズにマッチしたグランデのメリットが評価されての採用でした。

日本経済の発展、活性化を側面から演出している見本市会場。本年には関西新空港も開港され、21世紀へ向け関西経済圏一層の発展に本会場も大きく貢献してゆくことでしょう。



超軽量コンクリートパネル
（幅900～1,800ミリ）
グランデ
●スタンダードパネル
●ミラーコートパネル
●タイルパネル
●コーナーパネル

北海道・東日本
中日本・西日本
旭化成建材
東京 03(3507)7855　札幌 011(261)5443　仙台 022(223)5155　金沢 0762(31)7188　名古屋 052(212)2233
大阪 06(347)3847　広島 082(247)6131　高松 0878(22)0305　福岡 092(752)3974

「建築と社会」'94/5月号

作品特集号 原稿募集

…「広く会員の作品を紹介」する企画…



「建築と社会」では、毎号テーマを変えて特集号を組んでいますが、５月号ではとくに広く会員の作品をご紹介するため、ここ数年間に設計された会員各位の作品で、誌面に取り上げることができなかったものを掲載し、特集号を組むことにいたしました。

建築に関係のあるものなら種別は問いませんので、ご紹介やご協力頂ける作品がありましたら、下記要項に基づいて、大至急、原稿資料をご送付下さるようご案内申し上げます。

社団法人 日本建築協会
編集委員会

■ご用意願う原稿〔提出資料〕

1.写　真　外観・内部のプリント2～3枚程度(サイズはキャビネ判程度)。
2.概　要　作品名称と所在地、設計者・施工者名、敷地面積・建築面積・延床面積・構造規模・工期など。
3.説明文　設計上の特徴や苦心された点について500字程度ご執筆下さい。

■掲載に際しての補足

1.掲載料はいただきません。但し、掲載写真は白黒とし、ご提出写真を掲載します。
※写真の撮影者名は必ず附記願います。
2.掲載頁数はご協力頂ける点数にもよりますが、原則として、1社(1人)1作品・1頁(予定)掲載とします。
3.建物の特徴や特殊な面については、編集にあたって簡明な補足説明をお願いする場合がありますが、その折には是非ご協力下さい。
4.応募作品が多数の場合、誌面編集上、５月号に掲載できないことも予測されますが、その場合は委員会にてその対応を協議の上事前にご連絡申し上げます。

■原稿期日及び送付先

1.期　日　1994年3月31日㈭［必着］
2.送付先　社団法人日本建築協会
編集委員会
「５月号作品特集号」係
〒530 大阪市北区梅田1丁目1-3-2100
TEL. 06-348-0632
FAX. 06-348-0634

㈳日本建築協会編

『建築設計者のための設備知識』刊行 割引価格で頒布

このたび㈳日本建築協会の編著、㈱オーム社の出版で『建築設計者のための設備知識』を刊行いたしました。

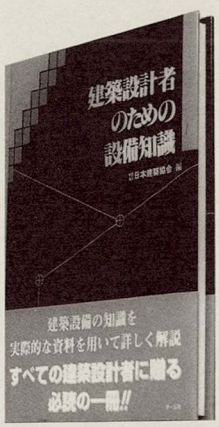
この著書は、本会機関誌「建築と社会」1990年～1992年に３回にわたり特集した内容をベースに、環境問題にゆれる現在の社会状況を織り込み、最新の情報を盛り込むべく新たに書き起こしたもので、執筆には、東畑建築事務所、日建設計、安井建築設計事務所、大阪ガス、関西電力の設備設計者約20名が当たり、本会の編集委員会で推敲を重ねました。

第一線で活躍する設備設計者が、実務において、建築と設備のかかわりあう場で直面した問題を掘り起こし、その解決を選択肢で示した本書は、意匠設計者のみならず、初歩の設備設計者にも好個の資料になるものと思います。

本書は、10月から全国の書店店頭に出ていますが、本会でも図書の販売をいたします。本会では特別価格として、定価(5000円)の２割引の4,000円(郵送の場合は送料380円/1冊要)で頒布しますので、お買い求め下さるようお願い申し上げます。

詳細お問い合わせ、および購入申込は、㈳日本建築協会へお願いします。

編著者　社団法人　日本建築協会
(東畑建築事務所／北島章因・弓崎幸治・坂田進・城下善雄・中野格、日建設計／藤岡茂・瀬戸良昭・押田忠明、安井建築設計事務所／日根東治・山根敏和・水谷広治、大阪ガス／中村秀行・佐々木明美、関西電力／中村秀夫・大木俊郎、ほか)
〒530 大阪市北区梅田1-1-3-2100 TEL06-348-0635



発行所　㈱オーム社
〒101 東京都千代田区神田錦町3-1 TEL03-3233-0641
体　裁　B5判、220頁、上製本
定価5,000円

'93～'94年版

日本建築協会会員名簿頒布お知らせ

会員の皆様方待望の'93～'94年版会員名簿が出来上がりました。この名簿は、建築界に活躍される会員の現況(出身校・現住所・勤務先・所在地)を紹介するばかりでなく、官公庁・学校・関係者諸団体のほか、建築事務所、建設、建材、設備その他関係業者の主要なものを業種別に収録しており、日常業務に大いに役立つものとおもわれます。何卒お買い求め下さるようお願い致します。

1.体　裁
B５判 270頁　本文上質紙
1.定　価
3,000円(消費税含む)　〒310円

日本建築協会新入会者ご斡旋お願い

本会は大正６年３月創立以来、建築法規の法制化に努めたほか、わが国初の住宅博覧会の開催、四会連合工事請負契約約款の制定など、今日に至るまで、建築界をリードするとともに、一般社会との結びつきを深めてまいりました。また、建築界の総合団体として常に建築関係各部門の連繋と調整に当たり、相互の親睦、共存共栄に意を注ぎ、会誌「建築と社会」の発行や、各種見学会、講習会など実務に直結した諸種の事業活動を行っております。

これらの事業をますます発展させるため、会員の増強運動を展開して会勢の伸展をはかりたく、入会者のご斡旋をお願い申し上げます。事務局は電話06-348-0635です。

出版委員会企画
第11回

「プロのノウハウ」講座

共催：日本建築協会
　　日本建築積算協会関西支部

―構造計画と軀体コストについて―

ある建物の設計初期の段階で、どの構造形式を採用するかは、デザイン、機能、安全性、コスト等から決定されます。ここでは、同一建物を4つの構造形式(RC、S、SRC、合成)について設計・積算した結果得られた軀体コストの比較について述べます。また、スパン、階数、階高、床荷重の変化に対して、軀体コストがどう変わるかも述べます。
これによって、設計初期の段階で構造形式の選択と軀体コストの概算把握が可能となり、構造計画に役立つ資料となるでしょう。



須賀好富(すが　よしとみ)

1961年京都大学大学院修了
近畿大学教授・工学博士
㈳日本建築協会理事・出版委員長
㈳日本建築構造技術者協会理事
㈳日本建築積算協会理事・関西支部長
関西建築構造設計事務所協会幹事

●著書
「構造計画とやさしい学力Ⅰ・Ⅱ」
「軀体工事監理のチェックポイント100」
「早わかりポケコンによる構造計算」
「構造コストと経済設計」
「建築デザインのための構造計画」
「建築構造力学図説・演習Ⅰ・Ⅱ」共著
「現代建築学―建築材料・施工」共著

―いま積算に求められているもの―

入札制度改革をめぐる話題が沸騰していますが、そのなかで、重要なポイントは建築費の問題です。
本来、積算は個別的な一品オーダーの建築コストの妥当性を求めるための手段といえるし、別の見方をすれば、需要供給のバランスのなかで標準（メルクマール）を示すものともいえます。こうした意味からいえば、建設業も設計事務所も、これまで積算の意義や役割を便利使い、ご都合主義で扱っていなかったでしょうか。
コストがいかに重要であるかの再確認とともに、建築界を構成する各パートによって、積算に対する共通認識を高める必要がありそうに思います。



生島道春(いくしまみちはる)

1949年大阪府立西野田工業高等学校建築科卒業
㈱日積サーベイ代表取締役
㈳日本建築積算協会顧問

●著書
「初級技術者のための建築積算業務」
「建築積算教程(実務課程)」共著
「積算技法(建築編)」共著
「建築工事積算講座(建築積算概説)」共著

―構造計画と軀体コストについて―
―いま積算に求められているもの―

日　時　平成6年3月29日㈫
　　開場14：30　開会15：00→閉会17：30
会　場　大阪府建築健保会館・多目的ホール
　　大阪市中央区和泉町2-1-11TEL.06-942-3621

日本建築協会で順次発刊、好評を得ている「建築技術選書」＜特装版＞、「プロのノウハウ」をテキストに、著者の講義や著者との質疑応答など、〝おのおのテーマについて、より深く勉強する場を設ける〟ことを主旨に開講した「プロのノウハウ」講座シリーズも、11回を迎えます。
今回は、須賀好富氏と生島道春氏をお招きし、おのおの上記のテーマで、1時間ずつお話を伺い、最後には両氏に対する質疑応答の時間を用意しております。
建築にたずさわっておられる方にとって、大変役立つお話が伺えます。
多数のご参加をお待ちします。

講　師　須賀　好富氏／近畿大学理工学部建築学科教授
　　生島　道春氏／㈱日積サーベイ代表取締役
司　会　前田　邦江氏／住まいの実技講座主宰
定　員　100名
受講料　会員4,000円、一般5,000円
　　※消費税を含む
　　※当日受付にていただきます。
参考図書　●建築技術選書＜特装版＞
　　「入門・建築積算」
　　(生島道春著)
　　●建築技術選書＜特装版＞
　　「構造コストと経済設計」
　　(須賀好富著)
　　※当日各々1部特価3,300円
　　〔消費税含む〕にて頒布。
申　込　3月22日㈫までに、ハガキ、FAX、電話でお申込みください。
　　1)催し名(第11回プロのノウハウ講座)、2)氏名、3)会員・一般の別、4)勤務先、5)受講券送付先、6)電話番号、をお知らせ願います。
　　※申込多数の場合は、抽選にて決定の上、受講券をお送りいたします。
申込先　㈳日本建築協会事業課
　　FAX.06-348-0634
　　TEL.06-348-0633
　　〒530　大阪市北区梅田1-1
　　大阪駅前第3ビル21階

30's EYE 21世紀へのエスキス

第5回

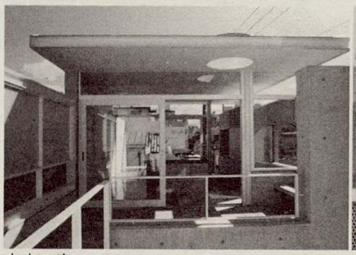
岸　和郎

建築家・京都工芸繊維大学助教授

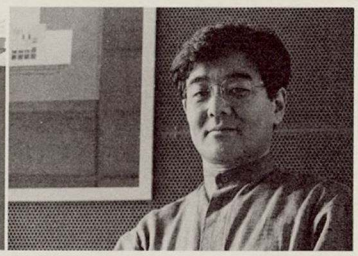
「DIE HARD MODERNISM」

「30's EYE-21世紀へのエキサス」をテーマに、30代を中心に様々な分野でご活躍の方々をゲスト講師に迎え、従来の講演会形式とは違う「語り合い、情報交換を行う場」をつくりたいと考えています。気軽にご参加下さい。

日　時　1994年 3 月 31 日(木)
　　18：30〜20：30
会　場　日本建築協会サロン
　　＊大阪駅前第３ビル21階
講　師　岸　和郎／建築家
　　京都工芸繊維大学助教授
定　員　30人＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員1,000円、一般1,500円
　　＊含、飲物・消費税
　　＊団体会員扱いは１社１名
申　込　３月24日(木)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
　　1)催し名(30's EYE)
　　2)氏名
　　3)会員・一般の別
　　4)職場名
　　5)参加証郵送先
　　6)連絡先電話番号
　　をお知らせ願います。
　　＊参加証を３月25日(金)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
　　大阪市北区梅田1-1　〒530
　　大阪駅前第３ビル21階
　　FAX 348-0634　TEL 348-0633
主　催　㈳日本建築協会
　　若い会員の集い小委員会
　　主担 米井 寛/東畑建築事務所



中京の家



大阪日本橋の繁華街をわずかにはずれた、間口３mの敷地に、岸和郎氏の「日本橋の家」は建ちます。この４階建の住宅は、最上階に天井高６mの明るいダイニングルームとテラスを持ち、断面構成と架構の見せ方、外壁や階段の仕上材の扱い、設備シャフトの処理等に見られる、既成の概念を越えた即物的(ザッハリッヒ)な造形手法により、極小な平面を克服して余りある瑞々しく豊かな空間が生み出されています。この作品で岸氏は1993年JIA新人賞を受賞されました。
ここに見られる浮遊感を漂わせた構成的手法と、これを支える抽象化への意志は、まさにモダニズムの精神につながるものであり、さらにこれらは「中京の家」などの近作にも受け継がれています。
「われわれの時代が獲得したものに対して無自覚でいることは避けたい」という岸氏は、われわれの時代＝近代を捉え直す作業を繰り返しながら、常に透明で明快なモダニズムの言語で語り続ける建築家といえるでしょう。
「DIE HARD MODERNISM」と題された今回の講演では、文字通りダイ・ハード・モダンな作品を紹介していただきながら、時代や建築に対する岸氏の姿勢をお聞きしたいと思います。

岸　和郎（きし　わろう）
1950　横浜市生まれ
　75　京都大学建築学科卒業
　78　　同大学院修士課程修了
　81　岸和郎建築設計事務所設立
　93　K.ASSOCIATES/Architectsと改組
　　京都工芸繊維大学造形工学科助教授
主な作品・受賞
1987　KIM HOUSE
　90　京都科学・開発センター
　91　湯の香橋/くまもと景観賞
　92　日本橋の家/1993JIA新人賞
　93　中京の家

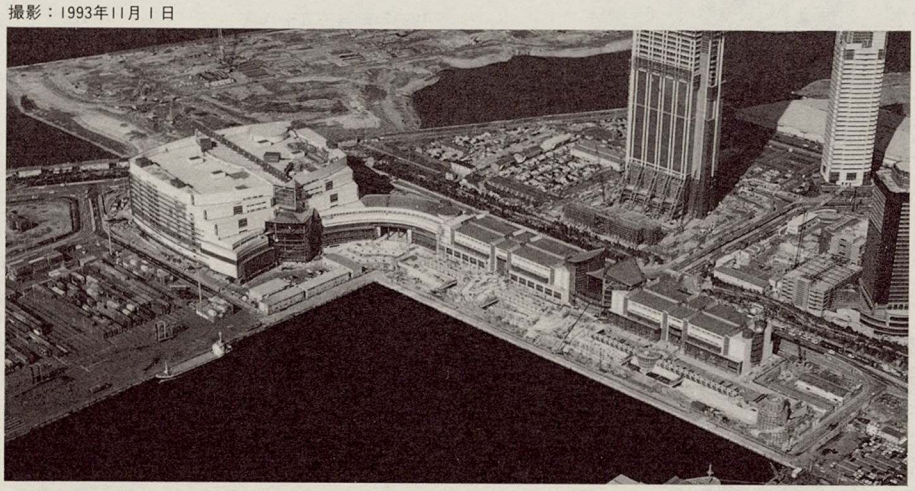
アジア太平洋トレードセンター見学会

アジア太平洋トレードセンター(ATC)は、関西の活性化ならびに輸入の推進を目的に計画された複合施設であり、南港コスモスクエア開発の中心施設の一つである。国際卸売センターを中心とする26万㎡のA棟と、アメニティー施設・展示場などのサポート施設を中心とする７万㎡のB棟よりなる。A棟は、中心軸に12層吹抜長さ100mのアトリウムを持つ。B棟は全長350mの海岸デッキを中心に構成されている。

(岡本　隆)

●建築概要
所在地　大阪市住之江区南港北２
設　計　日建設計
施　工　A棟：竹中・ベクテル・フジタ・奥村・東急・鴻池・錢高・青木・淺沼JV
　　B棟：大林・前田・飛島・オースチン・五洋・日本国土・大日本・新井・藤木JV
敷地面積　68,116㎡
建築面積　45,986㎡
延床面積　335,576㎡
構造規模　SRC、B2、13F
工　期　1991年３月〜1994年２月
オープン　1994年４月(予定)

撮影：1993年11月１日



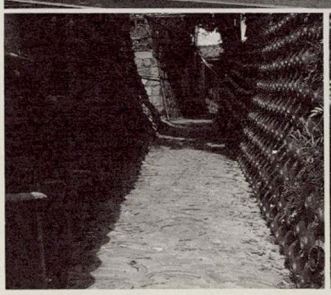
日　時　1994年 3 月 23 日(水)
　　14：00〜17：00
講　師　岡本　隆／日建設計設計主管
　　梶本尚武／A棟建設JV所長
定　員　60人
　　※申込者多数の場合は抽選
集　合　現地
　　大阪市住之江区南港北２
　　＊ニュートラム「中ふ頭」駅下車徒歩約５分
参加費　会員1,000円、一般1,500円
申　込　３月16日(水)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
　　1)催し名(ATC見学会)
　　2)氏名
　　3)会員・一般の別
　　4)職場名
　　5)参加証郵送先
　　6)連絡先電話番号
　　をお知らせ願います。
　　※参加証を３月17日(木)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
　　大阪市北区梅田1-1　〒530
　　大阪駅前第３ビル21階
　　FAX 348-0634　TEL 348-0633

常滑と志摩
早春の伊勢湾を巡る
ー見学と懇親の集いー

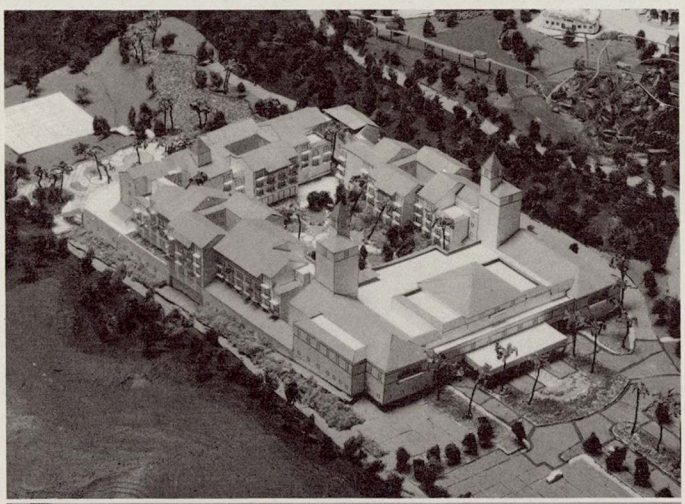
「見学と懇親の集い」ー今回は東海支部会員の協力により、〝ぐるっと伊勢湾〟をテーマに企画しました。平素あまり訪れる事のない知多半島には、建築に関係の深いテラコッタの生産地として「焼物の町常滑」があり、その歴史を識るとともに陶芸の里を散策するのも一興と考えられます。また海を渡った伊勢志摩半島には、今春、新しいリゾートの基地「志摩スペイン村」が誕生します。その他、学会賞をはじめ数々の賞に輝いた「海の博物館」や、伊勢神宮の遷宮を記念して建設された「式年遷宮記念神宮美術館」等も含めて盛りだくさんの企画です。会員各位の多数のご参加をお待ちしています。

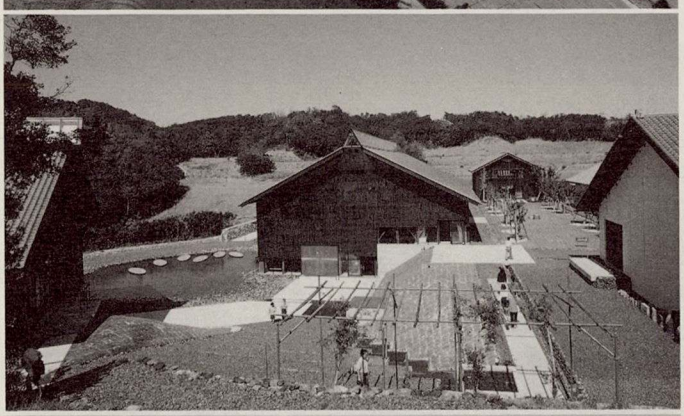
上：INAX本社ビル　左下：やきもの散歩道　右下：窯のある広場資料館













上から　ホテル志摩スペイン村、海の博物館、式年遷宮記念神宮美術館

開催日　1994年 **3** 月 **25**日㈮**26**日㈯
1泊2日

見学先　25日
1)サンゲツ本社ショールーム
◯常滑
2)INAX本社ビル／竹中工務店
3)やきもの散歩道
4)陶芸研究所／堀口捨己
民族資料館／戸尾任宏・アーキビジョン
5)INAX常滑東工場
窯のある広場資料館
トイレパーク／象設計集団
26日
◯伊勢・志摩
6)海の博物館／内藤廣建築設計事務所／1992年度学会賞・1993年度吉田五十八賞
7)ホテル志摩スペイン村／竹中工務店
8)式年遷宮記念神宮美術館／大江宏建築事務所
9)伊勢神宮内宮前おはらい町

講　師　1)INAX本社ビル
小川清一／竹中工務店名古屋支店設計部長
2)ホテル志摩スペイン村
飯山義隆／竹中工務店大阪本店設計部次長

宿泊・懇親会場
和風ホテル「呼帆荘」／南知多町内海

集　合　1)3月25日㈮ 8：00
JR大阪駅西口中央郵便局前
2)3月25日㈮11：00
サンゲツ本社2Fショールーム入口
＊名古屋市西区幅下1-4-1

交　通　全行程貸切バス利用

定　員　35人
＊申込者多数の場合は抽選

参加費　会員30,000円、一般35,000円
＊含、全行程の交通・食事・宿泊費等、消費税
＊申込者に追って支払方法を案内します。
＊入金締切：3月18日㈮

申　込　3月10日㈭までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
1)催し名（常滑と志摩）
2)氏名
3)会員・一般の別
4)職場名
5)参加証送付先所在地名
6)連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証・参加費支払方法等を3月11日㈮に発送します。

申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1　〒530
大阪駅前第3ビル21階
FAX348-0634　TEL348-0633

協　賛　1)サンゲツ
2)INAX

今月の表紙
クリスタルタワー
写真 東出清彦
表紙デザイン ㈱アクロス

建築と社会

1994 2 1917年創刊 第75集／通巻863号

ARCHITECTURE AND SOCIETY
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

CONTENTS

特集●　九州のインスタレーションと貌

［作品］　鹿児島アリーナ/小倉インターフェイススクエア/日田市庁舎 —— 24
(仮称)多目的スポーツ施設/伊万里市民センター
鹿児島港本港区北埠頭旅客ターミナル及び貨物上屋他
ウインズ八幡/尚玄山荘/紙与博多ビル/松下電器産業飯塚研究所
宮崎観光ホテル新館

［総説］　都市をよむキーワードとしての建築「インスタレーション」●萩島　哲 —— 52

［都市をよむ］「仮設」●村上義孝 —— 54
「異化」●黒瀬重幸 —— 56
「遊戯」●森　薫 —— 58
「仮想」●江口正利 —— 60
「虚構」●江口正利 —— 62
「図と地」●黒瀬重幸 —— 64
「両義」●重松雄二 —— 66

［インタビュー］　谷　伍平氏は語る●(聞き手)萩島　哲/広川大八 —— 68
四島　司氏に聞く●(聞き手)広川大八/江口正利 —— 72

会告
5月号作品特集号原稿募集、ほか
第11回「プロのノウハウ」講座 —構造計画と軀体コストおよびいま積算に求められているもの—
30's EYE-21世紀へのエスキス・岸 和郎「DIE HARD MODERNISM」
アジア太平洋トレードセンター見学会
常滑と志摩、早春の伊勢湾を巡る—見学と懇親の集い—

作品作風
インテックス大阪6号館 —— 6
住友生命ニューアルカイックビル
住友ゴム工業株式会社中央研修所
ベルシャイン駒ヶ根

書評
本屋さんが一肌脱いだ大阪からの発信 ——
『アーキ・フォーラム in OSAKA』●本多友常 —— 16

BOOK STATION
短評●伊藤郁郎/稲木裕子/毛谷村英治 —— 17

法令コーナー
FDによる確認申請—Q＆A—●渡辺壽一 —— 18

Report
瓦の色と景観●松浦邦男 —— 20

建築の眼
複雑さの中での建築●河邊　聡 —— 22
木賃整備の曙●笹川敏昌
タウンウォッチング(大阪茶屋町界隈)●山下　勝
美的建築のすすめ●藤崎安弘

構造の頁
建築物へのFR鋼の様々な利用事例●作本好文/渡辺　博 —— 76

設備の頁
新洗浄方式腰掛便器●植松政敏 —— 78

若い会員の集いReport
三澤文子—人と木がつくる美しい家—●廻はるよ —— 79

information
LE POEME DE L'ANGLE DROIT —— 80
「ミース・ファン・デル・ローエ：ウィル・オブ・エポック」展
NEG空間デザイン・コンペ
「ペイントショー'94」と「色彩シンポジウム」を幕張メッセで開催
平成5年度第25回中部建築賞表彰作品

月報
平成5年12月分 —— 82

■特集予告
3月号／〈伊勢〉神宮式年遷宮と神宮界隈
4月号／建築のエネルギーシステム

会　長　佐野正一
副会長　金子　潔・薬袋公明
　　市川　宏・鴻池藤一
　　三品哲夫

編集委員会（平成5年度）

■編集理事
◎荒井　清
井上　豊
金井　弘次
小島　雄
須賀　好富
竹中　錬一
深江　實
松村　慶三
溝神宏至朗
若山　繁
■編集顧問
東　孝光
■編集委員
★計画系分科会
☆計画系
伊縫　憲幸
梅村　宏尚
小浦　久子
鈴木　克彦
田中　直人
林　輝行
松川　敏正
山尾　弘子
横関　真紀
※吉村　英祐
☆建築計画系
※石山　道男
礎村千恵子
上杉　秀隆
江副　敏史
菅野　忠司
清本　明宏
笹村　欽也
佐藤不二男
塚本　史朗
刃金　国男
山本　匡
☆インテリア・住宅系
石川　佳子
大橋眞由美
加藤　力
角方　利幸
北浦かほる
工藤　昌之
小梶　吉隆
小島　保人
高橋　文吾
※中村　孝之
畑　康之
福田　由利
増田　邦子
★構造分科会
和泉　一義
岡本　達雄
亀井　功
黒木　安男
竹野　富夫
多田　元英
築谷　朋也
※二宮　利治
西　邦弘
西村　泰志
賽輪　幸男

★設備分科会
石沢　重治
遠藤　進
大田　克彦
※梶井　宏修
河津　隆之
伊達　正雄
田ノ畑好幸
村上幸三郎
★施工材料分科会
有光　利治
植田　実
小椎八重猛
※志水　史典
野口　和宏
村上　信直
★法令分科会
※生駒　芳明
乾　康雄
入江田吉仁
樫田　攻
加藤　輝男
廣田　美清
■作品作風小委員会
遠藤　公介
小笠原絵理
尾崎　久純
岡本　隆
川上比奈子
倉澗奈千子
桜井　俊郎
田中　均一
富田　昌義
藤城　義丈
前川　治彦
前田　幸宏
○松田　善弘
松村　衛
水川　尚彦
宮地雄一郎
■会員企画小委員会
伊藤　郁郎
稲木　裕子
茨木　保
槽谷　浩史
小板橋鉄雄
佐伯由紀子
佐野　洋
坂田　耕一
高田　光雄
○高橋　麗子
塚口　明洋
増渕　昌利
松石　千秋
山寄　章子
■広告企画小委員会
池渕　俊男
上井　善一
尾崎　英直
○勝　一弘
衣川　徳好
原田　常介
菱田信八郎
藤田　孝吉
山下　修司

◎委員長 ○副委員長 ※幹事

印　刷　平成6年2月20日
発　行　平成6年2月25日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
　　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　　電　06－348－0635
　　振替口座 大阪1-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
　　電　06－351－5428(代)
　　サン総合印刷株式会社
　　電　06－454－1481(代)
　　日本電植株式会社
　　電　06－352－7502
定　価　980円（本体価格951円・送料共 消費税29円）

東側外観



全景鳥瞰

作品
作風

設計監理 ■
大阪市都市整備局営繕部・東畑建築事務所

施工 ■
建　　築/鹿島・東急・松村共同企業体
電気(その1)/トーエネック・関電興・北陸共同企業体
電気(その2)/きんでん・中央共同企業体
機械(その1)/ダイダン・精研・不二熱共同企業体
機械(その2)/三晃・トーヨコ理研・協和共同企業体
ガ　　ス/大阪瓦斯
昇　降　機/三菱電機

インテックス大阪6号館

関西国際空港の開港を目前にして、大阪では今さまざまな大型プロジェクトが実施されている。その中で南港のコスモスクエア地区では、テクノポート大阪計画にそって、21世紀の臨海新都心をめざした先進的な街づくりが急ピッチで進められている。

その中核のひとつであるインテックス大阪は、1985年に当時としては国内で最新の設備を備えた国際見本市会場としてオープンしたが、今回年々大規模化をたどる見本市に将来的にも対応するために、既設6号館及び7号館を撤去した跡地に展示面積40,000㎡の新6号館を建設し全体で70,000㎡の展示面積を誇る国内一の大規模展示場として生まれ変わった。

新6号館の特徴は、展示室を1階と3階に設置して最上階にはレストランと約900台収容の駐車場を備えた「重層構造」にしたことである。

配置計画は、平面的には中央コアを挟んで一層目・二層目各2つづつの計4つのクラスターによって成り立っている。展示室西側の1階と3階には屋外プラザを設け、また1階から3階展示室へ直接利用出来る屋外エスカレーター等を設置して既設会場からもスムーズにアプローチ出来る様に計画している。

外観は都市における造形物としてはあまりにも巨大なために、平面及び立体的にセットバックをしてボリュームの緩和を計り、外壁にも材料や色彩に変化をもたせ、波をモチーフにしたスカイラインとともに建物に表情の変化を与え、ベイエリアの街並への融合を計っている。

21世紀に向けてこの地区は一大コンベンションコンプレックスを形成することになるが、インテックス大阪はその拠点として国際交易における更に重要な役割を果たすことが期待される。

(岡島博明／東畑建築事務所)

所 在 地　大阪市住之江区南港北1-5-102
敷地面積　128,985.6㎡
建築面積　30,806.415㎡(6号館)
延床面積　78,741.643㎡(6号館)
構造規模　S、地下RC、B1F、5F、P1
工　　期　平成3年9月～平成5年9月
最 寄 駅　地下鉄ニュートラム中ふ頭駅
撮　　影　水野励治※・高橋裕嗣


エントランス廻り


3階屋外プラザ※

1階エントランスホール



1階屋外プラザ



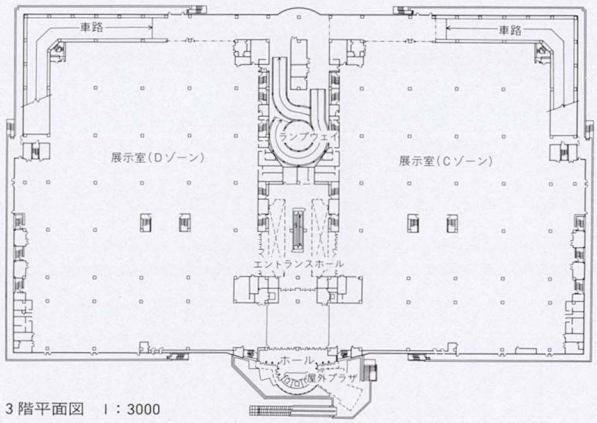
3階展示室(Dゾーン)※



2階展望ラウンジ



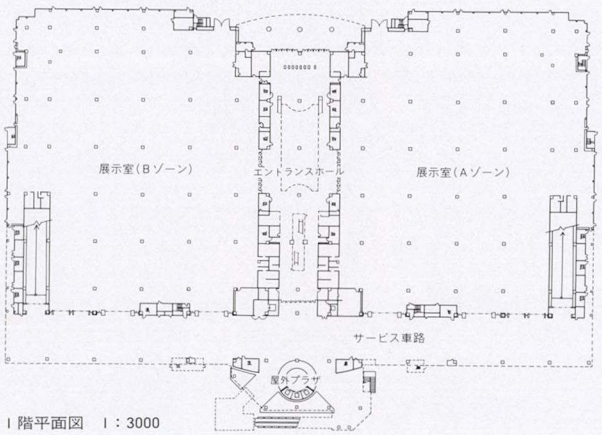
B階マスターピット



3階平面図　1：3000



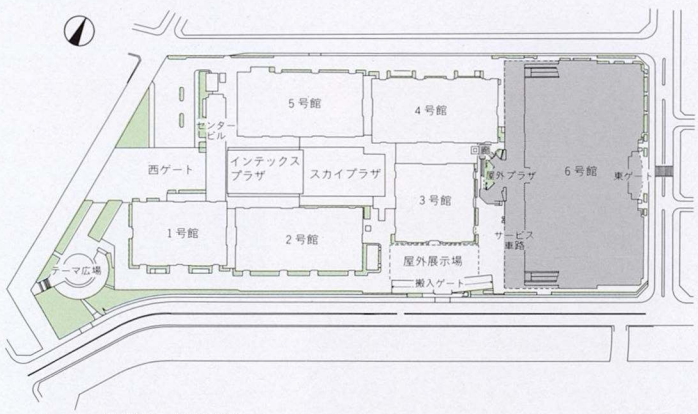
3階エントランスホール※



1階平面図　1：3000



5階通路※



配置図　1：7000



屋上駐車場※



外観(南東より)

作品
作風

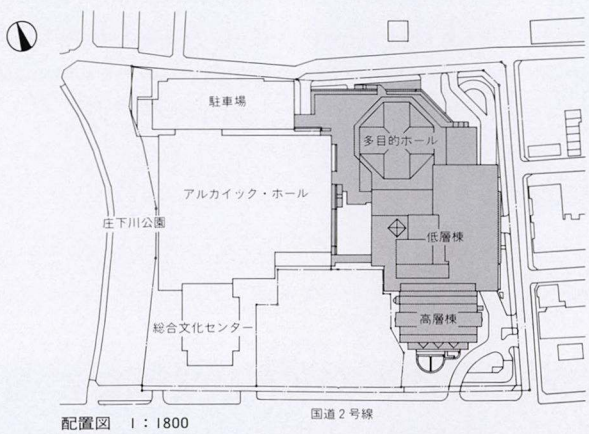
設計監理■
日建設計

施工■
錢高組・フジタ・柄谷工務店JV

住友生命ニューアルカイックビル

尼崎市の新しいランドマークとなるこの建物は、尼崎市総合計画に基づき、市民の文化・情報・交流の拠点として、官民共同開発事業により建設されたものである。
外観は、新しい尼崎をイメージさせるものとして、縦ラインを強調したデザインとし、シンボル性を表現した。
施設は、185の客室、宴会、料飲施設を備えた都市型コミュニティホテル「ホテルニューアルカイック」（ホテルニューオータニ運営提携）を中心に、尼崎市総合文化センターの多目的ホール「アルカイックホール・オクト」、更にはスポーツクラブ、オフィスなどで構成されている。また施設の核空間として、外部空間と連続させた三層吹抜の「シビックギャラリー」を設け、各施設を有機的に繋いでいる。
多目的ホールは、演劇・コンサート・伝統芸能・国際会議・スポーツ・展示会などの幅広い利用ができるよう、コンピューター制御の「可動床（電動椅子収納）」や、「移動壁（高さ7m×幅8m）」を駆使して、舞台や客席の配置を様々に可変できるハイテクホールである。
このプロジェクトがスタートして約5年。近い将来、さらに隣接する尼崎郵便局跡地が都市公園として整備され、この施設が尼崎市の文化の拠点として益々発展することを期待する。

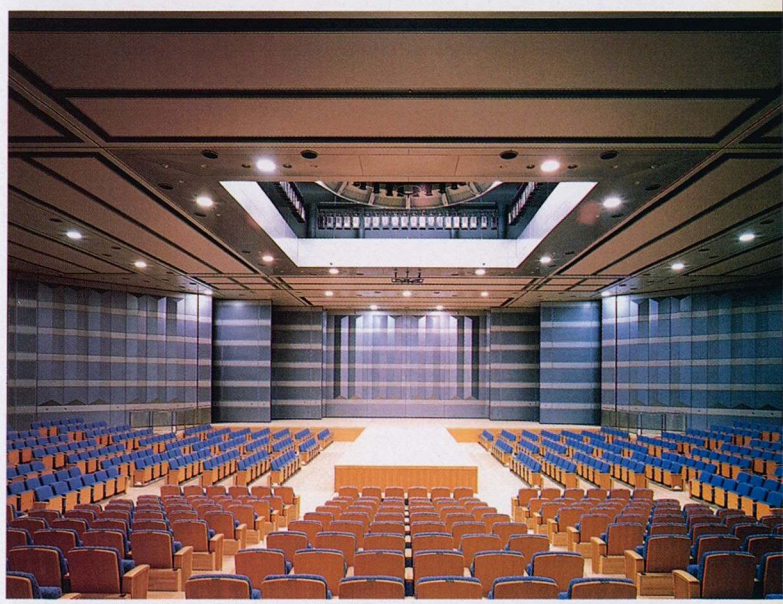
（田中秀男／日建設計）



配置図　1：1800

所在地――兵庫県尼崎市昭和通り2-7-1
敷地面積――12,196.02㎡
建築面積――7,320.85㎡
延床面積――42,367.41㎡
構造規模――SRC、RC、S、B1F、22F
工　　期――1991年6月～1993年9月
最寄駅――阪神電鉄・尼崎駅
撮　　影――名執一雄、稲住泰広※


航空写真（南西より）SS大阪


多目的ホール「アルカイックホール・オクト」※


ホテルロビー

研修棟正面外観

正面全景



作品風作

設計施工 ■
大林組

住友ゴム工業株式会社 中央研修所

敷地は、のどかな田園風景が眼下に広がり、北摂の山並みへの眺望が開けた高台にある。この街のネーミング『ウッディタウン』に相応しく、恵まれた自然環境を活かした研修所づくりが設計テーマの一つであった。

配置計画は、研修棟と宿泊棟を分離して独立性を高め、気分を一新させるガラス貼のブリッジで繋ぎ、各棟は分節化してボリューム感を和らげ、優しさを演出している。

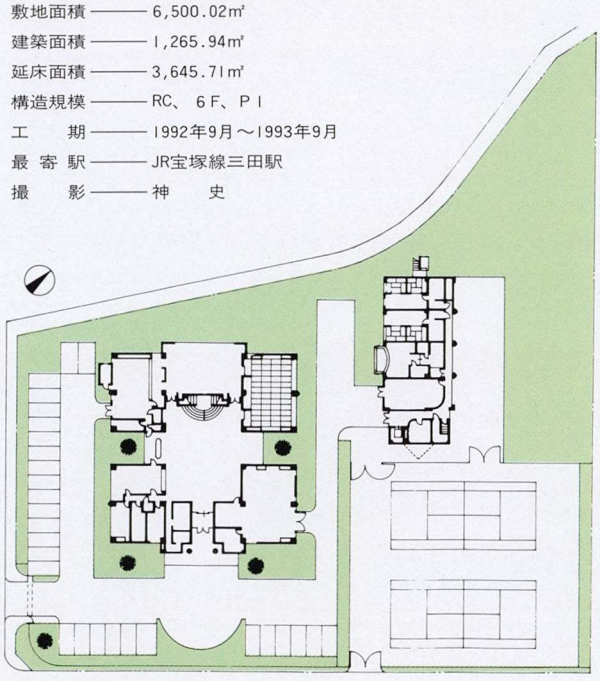
4つのピラミッド状のトップライトから陽光がふりそそぐアトリウムを中心軸とした研修棟は、外部に大きく開かれた窓ガラスから緑・光・VIEWを取り入れ、ゆとりのある空間とした。

外壁には、松林の緑に映える赤つち色系の暖かみのあるレンガタイルを採用して、これを住友ゴム工業の前身であるダンロップ発祥の地にちなんでイギリス貼とし、コンクリート打放し壁と対比させ、堅実・端正な表情で企業イメージを表現した。

宿泊棟は三角形の出窓スペースである談話室を研修生の交流の場として、象徴的に扱っている。

今日の高度情報化や、価値観の多様化など、時代の変化にミートした人材の育成の場として、この研修所が役立っていくことが期待されている。　　(船橋昭三・広田和正・仲西久実／大林組)

所 在 地 ——— 三田市ゆりのき台6丁目7番1
敷地面積 ——— 6,500.02㎡
建築面積 ——— 1,265.94㎡
延床面積 ——— 3,645.71㎡
構造規模 ——— RC、6F、P1
工　　期 ——— 1992年9月～1993年9月
最 寄 駅 ——— JR宝塚線三田駅
撮　　影 ——— 神　　史



配置・1階平面図　1：1200



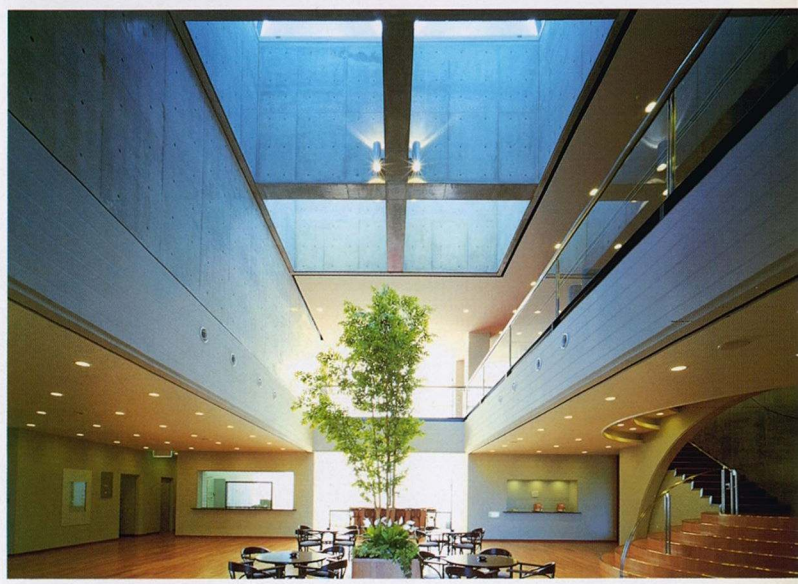
宿泊棟東面見上げ



2階ラウンジ



2階ラウンジ



エントランスロビー



東面近景



東面遠景

作品風

設計監理 ■
泉沢建築設計事務所

施工 ■
建築／ヤマウラ
電気／東陽興業
設備／三建設備工業・南信日立

ベルシャイン駒ヶ根

駒ヶ根市は長野県南部、伊那谷のほぼ中央部に位置し、西に中央アルプス、東に南アルプスを望む雄大な自然環境に恵まれた観光都市であり、また中央アルプスの主峰木曽駒ヶ岳及びロープウェイで登れる千畳敷への表玄関でもある。ベルシャイン駒ヶ根は中央自動車道駒ヶ根インターへのアクセス道路に接し東西の高低差約10mの敷地に計画された。

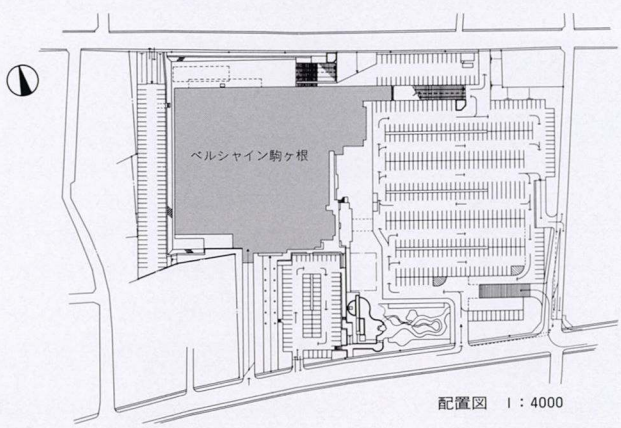
ショッピングセンターは買物だけでなく、プラスアルファーの商業空間であり買物以外の目的の人にもその施設が開放され、人々がそこに来て自由に楽しめる地域コミュニティの核として、また物質的な満足だけを与える施設ではなく、人間的な喜びや豊かさを感じることが出来る空間造りを心掛けており、その土地の魅力を充分に引出し、自然と調和を計りながら、快適な都市生活も味わえる地方色豊かな商業空間を演出できるように配慮した。

この計画の実現に当たっては、マイナスの要因をいかにプラスに転化させるかの戦いであったように思う。

ローコスト化、効率、画一化した考え、敷地特性、ヒューマンスケールに合わないスケール等々……。

今回これらの事柄を克服出来たのも、クライアントの理解及び計画に携わった人々のそれぞれの立場での協力のたまものであり、一つの目的に力を結集し、喜びを共に共有出来たことに感謝！

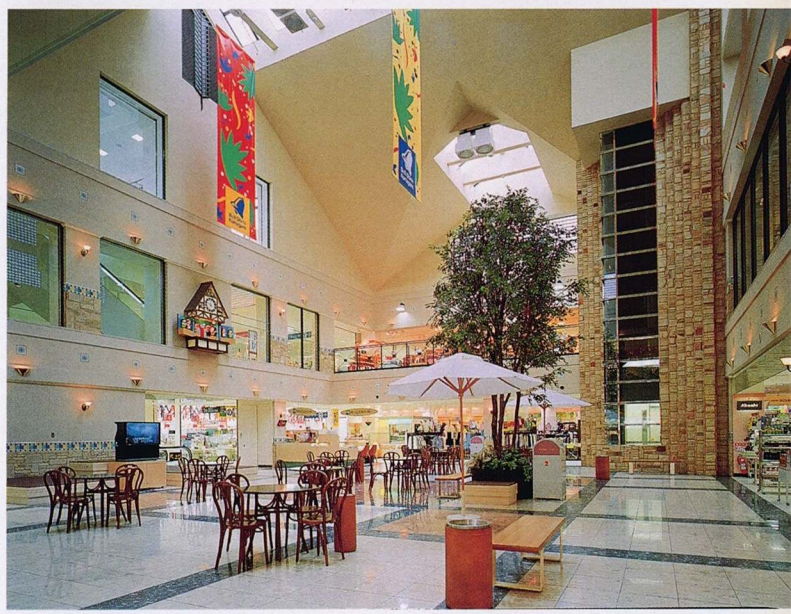
(坂賀信夫／泉沢建築設計事務所)



配置図　1：4000

所 在 地 ——— 長野県駒ヶ根市赤穂1568
敷地面積 ——— 34,432.54㎡
建築面積 ——— 9,716.44㎡
延床面積 ——— 17,377.76㎡
構造規模 ——— RC、2F、P2
工　　期 ——— 1992年4月～1993年3月
最 寄 駅 ——— 中央自動車道・駒ヶ根インター、JR飯田線・駒ヶ根駅
撮　　影 ——— 黒田青巌


南面カフェテラス

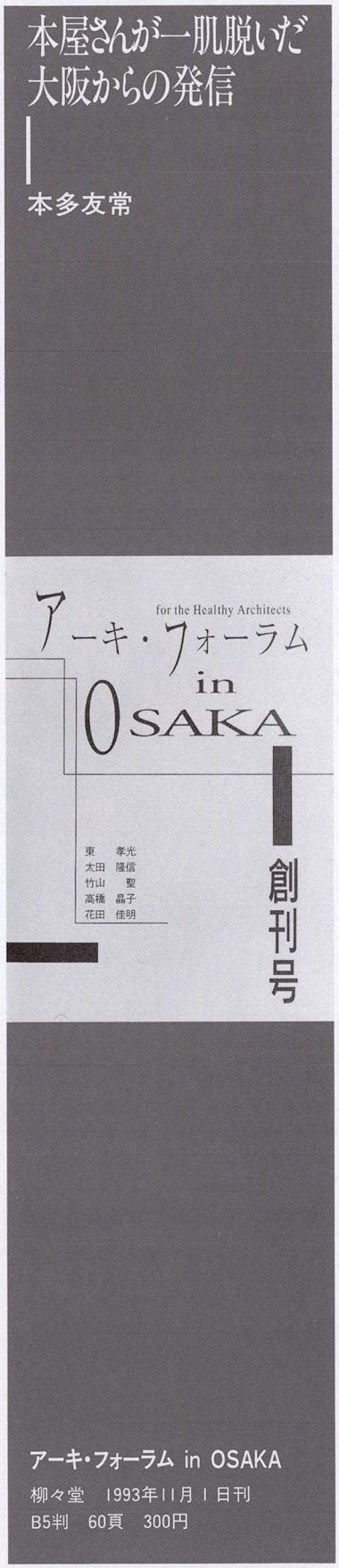

アトリウム


ファンタジー・パーク

書評

本屋さんが一肌脱いだ大阪からの発信

本多友常



アーキ・フォーラム in OSAKA
柳々堂　1993年11月1日刊
B5判　60頁　300円

私の机には、最近書類や図面の山に雑誌が堆く積まれるようになって来ている。それを時々気がついたように整理して積み直すのだが、書棚に収めてしまえばもうほとんど見ることはない。結局、未練も残って机のうえに積み上げておくことになる。その中には配達された伝票が挟まったまま、あまり目を通していない本も混じっている。そのほとんどは柳々堂が昔から配達してくれる雑誌類であり、じつは集金に来てくれる日が、もういちど見直すチャンスで、お金を払いながらあわててページをめくったりしている。

これは自分の怠慢であり、せっかくの情報なのだから意識をもって、立ち止まる時間を作り出そうとは思っている。しかしよく考えるてみると、むかしのように本が配達されて来た時のときめきが薄れ、新しい本をとりまく話題も減ってきたような気がする。かつては新しく載った建築を前にして、自分の設計の腕はさておき、やれ〝へたくそだ〟やれ〝出来不出来が激しいのは、K氏には哲学がないからだ〟〝それならお前の哲学はなんだ〟〝口より先に手をうごかせ〟〝いや、コンセプトのない線は意味がない〟などなど、揶揄から始まり話は四方八方にとんだものだった。

ところが振り返ってみると、どうも最近は新しい雑誌が負担になり出しているような気がしてならない。目を通さなくてはならない本がストレスになり始めているのだ。年をとったせいもあるかもしれない。しかし何よりも雑誌類のふえたことが原因していることは否めない。そして知らぬ間に、雑誌は新しい情報源であると同時に、それを捨て去るべきかどうか一瞬のうちに判断するための神経を強要するものになりつつある。今や情報は取り入れる努力だけではなく、断念する勇気まで強要するようになってきた。

＊

ある日いつものように柳々堂さんが本を配達にオフィス内を回りながら、「こんど、うちで出した雑誌です」といって置いていってくれたのが、『アーキ・フォーラム in OSAKA』であった。装丁はおせじにも商業誌にかなうようなものではなかった。しかし手作りの感じがよく出ていて、久しぶりになにかを発信したいという思いのこめられた小冊子であることがうかがわれた。

そして私の読み方はこうであった。パラパラと何回か往復しながら、柳々堂創業百年記念シンポジウムと、そのパネリストたちの言葉がのっていることを確認し、目にとまる部分の斜め読みをすること約2～3分。少し気になる事があって後で読むために鞄に入れ電車で読むことにした。ふたつの興味があったからだ。

ひとつは〝大阪からの発信〟に何か心にひっかかるものが見つかるかどうかという点と、もうひとつの理由は花田佳明が執筆していることを聞いていたからだ。

シンポジュームを中心とした執筆者陣は、東　孝光、太田隆信、竹山　聖、高橋晶子、のスター建築家たちである。巻頭文によれば、この小冊子の発端は『92年11月に行われた〝柳々堂創業100年記念シンポジューム〟に際して、東　孝光先生から〝これを契機に、大阪発信の媒体を創刊したらどうだろうか〟』という提案にあったという。大阪頑張れという声に歴史のある本屋さんが一肌脱いだわけだ。大阪の〝知〟を100年にわたって支えてきた柳々堂に向けたエールの熱も手伝って、執筆者たちも工夫をこらした力作を投稿している。〝大阪〟を、人それぞれの解釈に引き寄せながら持論を展開しているのだが、そこに苦心を感じるのは、そのキーワードによって打ち破るべき問題性そのものが見えにくくなっていることを示している。結果としては、各建築家達の個性的な感受性のダイジェストとなっている。そのためのスターの執筆陣に不足はない。

しかし、実はこの本の面白いところは別のところにある。一人だけ花田佳明がまじって〝都市という罠〟という本格的な批評を試みている点だ。驚くばかりのエネルギーと攻撃性を備え、周到に刃を研いた痕跡が、大きな違和感として挿入されているのだ。久しぶりに切り口の展開に感心し、同時に言葉に対する言葉の空転を心配した。言説と設計の間に架け渡される橋となるかどうかのかすかな疑いでもある。その内容についてはここではあまり触れる必要もないだろう。

かつてさまざまな手作りの発信がそうであったように、とげとげしく、いがらっぽい批評性を備えることが時代を動かす力となる。コーヒー一杯分の冊子である。まずは手にしてみたらどうだろうか。どこにもひっかかりが無ければ捨ててもおしくない。紙はもっと質素であってもよかったのではないかとさえ思う。それでもひっかかるかどうかは受け手にもよるだろう。編集の意向はともかくとして、『アーキ・フォーラム in OSAKA』は、捨てられることを前提とした雑誌であってほしい。あえて言うなら、少数派からの見識として99%は唾棄されるものの充満した世界であってもかまわない。ごみ箱に行きかけて戻ってくるような雑誌こそ実は生きたメディアなのだ。

大阪発信の出力は、その骨太さによって決まる。次号への期待と声援を込めて、一読をお勧めする。

（ほんだ　ともつね／株式会社竹中工務店設計課長）

BOOK STATION
ブック・ステーション

放送大学教材
生活と芸術 改訂版
日本生活文化史
熊倉功夫著

放送大学教育振興会
1990.3.20刊
A5判　192頁　1,650円



本書は、放送大学のテキストとしてかかれたものであるため、テレビの視聴と合わせての効果を考えているものではあるが、図版や写真も豊富で、これだけでも十分読み応えがある。内容としては、題名が示すように、日本人の生活と芸術のかかわり方を歴史的にたどり、その中に日本文化の特質を考えようとするものである。生活と芸術の接点として、芸能・建築・工芸などが取り上げられているが、本書の軸になっているのは日常生活に即した芸術とも言える「茶の湯」である。個々のテーマを、別個に研究した書物は多いが、それらを日本の生活文化という観点から一括して、しかも系統だてて考察した点が、新しく興味深い。　(Y.I)

都市再生
ロバータ・B・グラッツ著
富田釈彦・宮路真知子訳
林泰義監訳

晶文社
1993.6.30刊
A5判　376頁　3,800円



作者はN.Yのマンハッタン・グリニッジ・ビレッジに生まれ、新聞記者として街中を歩き回り住宅や都市更新、コミュニティの再生といった問題を取材してきた。自ら都市の中心に住み暮らすことでその魅力や都市を機能させている原動力を理解している。自らのコミュニティを救うために戦ってきた住民や利用者を取材し、都市の真の再生とはいったい何かを明らかにしている。ランドマークの保存運動についての自らの研究と記事を通して運動が全国に拡大する様子を追いかけていく中で、都市が如何にして自己破滅への道を突き進んだのかという問題に対する答えを得ている。ケリー通りの物語やモールについての逸話、移民社会の変化など住民として都市を見てきた者でしか語れない劇的な変化を通して都市の移り変わりを示し、都市を蘇らせるためのヒントを与えている。　(E.K)

この木なんの木
佐伯　浩著

海青社
1993.8.3刊
四六判　134頁　1,600円



「この木なんの木気になる木」という軽快なCMソングは誰の耳にも残っているのではないだろうか。木材構造学の専門家がウッドウォッチングとツリーウォッチングを大学での専門教育のはじめに行なってきた経験から、それを一般の人達にも「この木なんの木か」が分かるようにという願いをこめてまとめられたハンドブックである。建築に携わるものでもなかなか木の名前を言い当てることは難しく、身の回りに溢れる木製品をなんだか分からずに使っていることが多い。また、森に行ってもせいぜい数種類の名前を言い当てるのが精一杯であろう。この本は、そういったことに関してストレスを感じていた人にはぴったりであり、木の見分け方が平易にまとめられている。山歩きや家具選び、内装材の選択などを行う時に是非一読を進めたい一冊である。　(E.K)

SD選書 221
古典建築の失われた意味
ジョージ・ハーシー著
白井秀和訳

鹿島出版会
1993.10.10刊
四六判　238頁　1,854円



クラシックの代名詞のように用いられているオーダーや建築装飾が古代ギリシャに端を発していることは誰でも知っている事である。しかし、これらの様式・装飾それぞれが持つ背景、即ちその成立にあたっての神話・宗教儀式など当時の宗教観・世界観とのそれぞれの密接な関わりについての知識を持っている人は少ないのではないか。

ギリシャ・ローマ時代以来、各時代において少しづつ形を変えながらも最近のポストモダンに至るまで世界中において影響を与え続けてきたこれら古典建築が、特に近代以降、単に表層的な形式主義の面からしか理解されていないと批判する著者は、この本においてそれぞれの様式・装飾についてその意味・意義に関する理論を再構成しようと試みている。西洋古典建築の持つ用語の意味の真の理解のために貴重な一冊である。　(I.I)

担当：会員企画小委員会／伊藤郁郎・稲木裕子・毛谷村英治

法令コーナー

編集委員会法令分科会

288 FDによる確認申請 ーQ&Aー

平成５年２月15日、建築基準法施行規則が改正施行され、フロッピィディスク（以下「FD」という）による受け付けの準備が整った特定行政庁が区域を指定することにより、その区域において確認申請書の一部をFDで申請できるようになった。平成６年１月現在、全国の約1/3の特定行政庁ですでにOA機器を導入し、それらのうち34特定行政庁でFDによる確認申請を受け付けでき、その他の特定行政庁でもFDによる確認申請の受け付け準備を進めている。

また、建築確認の情報化の実施に関し特定行政庁のニーズ、意向等を集約するとともに相互の連携を図ることにより、建築行政の高度情報化の推進に資することを目的に設立された建築確認支援システム運用協議会と、建築行政の高度情報化に関する調査研究等を行い、建築活動の円滑な実施に寄与することを目的に設立された(財)建築行政情報化センターとは、相互に連携をとりつつFDによる確認申請の普及に努めているところである。

FDによる確認申請Q & A

このQ & Aは、平成５年３月１日から３月30日にかけて７都市で行った「フロッピィディスクによる確認申請の実施及び申請様式の改正講習会」で提出された質問に対して、全国共通の内容に関するものについて、建設省建築指導課、建築確認支援システム運用協議会運用部会および(財)建築行政情報化センターが回答を作成したものである。

紙面の都合で、その一部を割愛してご紹介する。

【FD申請(一般)】

Q：JISに規定以外の文字をプリントアウトする場合、第２面以降は「▲阪▼」のまま印刷してもよいか。

A：JISに規定以外の文字の場合は、第１面、第２面とも手書きとしてください。

Q：FD申請の実施特定行政庁、実施時期はどこでわかるのか。

A：実施前に各特定行政庁の広報に告示されます。詳細は、各特定行政庁に問い合わせてください。

Q：ソフトで入力し、書面で申請してもよいか。

A：確認申請書を「確認申請書作成プログラム」で作成し、それをプリントアウトしたもので申請できますが、FD申請を実施している特定行政庁では、その時、なるべくFDも提出してください。

Q：スキャナーがない場合、手書きでもよいか。

A：付近見取図は、手書きでもかまいません。

Q：FD申請の場合、配置図は、FDと紙、両方必要か。FD申請の場合、概要書の付近見取図、配置図があれば、添付図書は不要か。

A：FDのみの申請であれば、経由市町村において申請内容が把握できないので、申請側で申請書および図面についてプリントアウトの協力をお願いします。

Q：１申請物件当たり、FDは１枚か。

A：原則として１申請物件当たり、FDは１枚としてください。

Q：工事完了届はFD申請できるのか。

A：可能です。

Q：コンピュータを導入しなければ、確認申請を代行業者に任せるしかないのか。

A：書面申請でも可能となっています。

Q：FDはどのようなケースに入れればよいか。

A：ダンボール等でFDを保護するケースに収納してください。できれば磁気防止措置を施したものでお願いします。

Q：FD申請でも、図面は今までのように折って綴じるのか。

A：図面は、A４サイズに折って綴じてください。

Q：FD申請に使用できる文字について。

A：申請用のFDに使用できる文字は、JIS X 0201、X 0208で定められた文字だけです。

JIS X 0201では、半角の英数記号文字、カタカナ文字が規定されています。JIS X 0208では、全角の英数記号文字、カタカナ文字、平仮名文字、漢字文字が規定されています。X 0208では、第１水準、第２水準と区分けされていますが、そのいずれも使用可能です。

【申請書の記載・入力方法】

Q：第５面は、上階増築の時も、下階の記述は必要か。

A：第５面の記載については、増・改築の有無にかかわらず、既存部分を含めてすべての階の記載が必要となります。

Q：工事完了届は、建築物、昇降機等とどのように区分するのか。

A：工事完了届は、建築物、昇降機の区分はなく、様式は一種類となっています。

Q：建築主が複数の場合、名称、申請者を連名で記入してよいか。単名でなければならないか。申請者が複数の場合、代表を記入すべきかまたは別記とすべきか。

A：代表者のみ記入し、他は別紙に記入してください。なお、FD申請・書面申請とも記入可能な範囲であれば、連名で記入してもかまいません。建築工事届、建築計画概要書の建築主については、確認申請書と同一の扱いになっています。

Q：階数に算入されない地階は、第４面にはどのように記入するのか。

A：「ハ．昇降機塔等の階の数」欄に記入してください。

Q：建築計画概要書の付近見取図、配置図は、規則第１条第１項の表に準ずるのか。または(注意)書きに準じるのか。

A：建築計画概要書の配置図については、FD申請の場合は、規則第14号様式により、書面申請の場合は、規則第１号の２様式（建築計画概要書）の注意書きによってください。ただし、この付近見取図、配置図は、規則第１条第１項のものと同じものでも可能です。

Q：建築計画概要書の用途地域は、複数にまたがるとき、２つ以上記入するのか。

A：複数の用途地域にまたがる場合は、またがる用途地域名をすべて記入してください。

Q：昇降機申請で、複数台同時申請する場合の記載方法について。

A：昇降機の確認をFD申請する場合は、１枚のFDに複数台の申請データを記録して申請することができます。

Q：昇降機の号機表示はどうするのか。

A：任意としています。（番号は自由です）

Q：第３面で、法定容積率、建ぺい率を、記入する必要はないのか。

A：両方とも記入する必要があります。なお、容積率については、前面道路の幅員を考慮しなければなりません。

Q：第４面、第５面の単位（柱の小径、床高さ等）は何でもよいのか。

A：書面申請では、メートル法の単位を用いた数値ならば何でもかまいません。一方、FD申請では長さ、高さ等はミリメートル単位で表した数値を、また面積は平方メートル単位で表した数値を用いるようになっています。

Q：既存建築物の棟別概要は、新様式でも同じ扱いか。

A：増築、改築、用途変更、大規模な修繕、大規模な模様替えを伴わない既存建築物についての記入は必要ありません。

Q：工事施工者が複数の場合、代表者１名記入か、または別記とすべきか。

A：代表者１名記入し、他の施工者を別紙に記入してください。

Q：面積、高さの数値について、精度はどこまで必要か。２桁に切り捨てると制限値をオーバーすることもある。

A：小数点以下２桁までとし、第３桁の処理については常に安全側に表示してください。いずれにしても制限値ギリギリの場合は、精算を行う必要があります。

Q：書面申請でも各種コードを使用して申請するのか。

A：建築用途については、書面申請でも記号（コード番号）を記入する必要があります。

Q：敷地面積、床面積について求積図は不要としてよいか。

A：規則においては添付を義務づけていませんが、審査の迅速化のため、各特定行政庁の建築主事が

添付を求めることもあります。

【申請書の綴じ方】

Q：第４面、第５面の綴じ方はどうするのか。

Ａ：当該講習会テキスト(19ページ)の解説の通り、建築物の棟ごとに綴じてください。

(例　Ａ棟４面５面、Ｂ棟４面５面)

Q：建築工事届で、住宅がない場合の第３面、除却建築物がない場合の第４面は提出する必要があるか。

Ａ：それぞれ記載する内容がない場合は、提出は不要です。

【申請書の用紙】

Q：旧様式では、申請書および添付図書に記載の事項は事実に相違ない旨、申請者が記名、押印していたが、新様式では申請者および設計者が同列で記名、押印することとなっている。事実に相違があった場合、どちらに問題が起こるのか。

Ａ：記名、押印が同列になっても、設計者は建築主等からの情報に基づき設計し、その範囲において責任を負います。申請書および添付図書に記載の事項については、申請者が責任を負うことになります。これについては、従来と同じ考え方です。

Q：一太郎やロータス等で、第13号様式に近いものを印刷しても受け付けてもらえるか。

Ａ：第13号様式は、フロッピィディスクのデータフォーマットであるので受け付けられません。

Q：特定行政庁によっては新様式に追加の申請項目があり、統一できていないのではないか。また、FDが一元化されないこととなるのではないか。

Ａ：「建築確認申請書作成プログラム」で入力し作成されたFDやプリントアウトされた様式は、全国共通となっています。

Q：FD化されない特定行政庁は、全国どこでもプリントアウトしたものを受け付けるのか。Ａ４判、Ｂ５判が使えるのか。

Ａ：「建築確認申請書作成プログラム」によりプリントアウトされた申請書は、FD化されていない特定行政庁にも提出することができます。様式のサイズはＡ４判のみです。

【配置図の記載・入力方法】

Q：デジタイザーを利用できないのか。利用する場合、座標の変更は可能か。

Ａ：利用できます。ただし、敷地辺の入力のみ利用可能です。

Q：三斜測量値しかない場合、敷地辺頂点の座標は他のソフトで計算するのか。

Ａ：現システムではそれしかなく、今後の検討課題となっています。

Q：測量図から敷地データを入力できないか。

Ａ：デジタイザーを利用するか、またはXY座標を計算して入力することになります。

Q：敷地、建物で曲線部分の入力はどうやるのか。

Ａ：多角形の直線に近似して入力してください。

Q：敷地が大きい場合、縮尺を1／1000としてよいか。

Ａ：縮尺に制限はありませんが、このプログラムでは、敷地の大きさは300m×150mを適用範囲としており、これを超えるような敷地の場合、配置図のみ書面で作成してください。

Q：この配置図で、日影図のチェックに精度上十分か。

Ａ：日影規制や斜線制限などの形態制限については、安全側で近似してデータを入力していただくことによって問題はなくなります。

Q：一つの敷地辺で道路幅が変化する場合はどうするのか。

Ａ：幅員が変化するところで、敷地辺を分割してください。

Q：中抜き形状の建物の入力はどうやるのか。軒の出など、アイソメで記入できない形状はどうするか。

Ａ：建物形状を細部にわたって忠実に表現する必要はなく、あくまで形態制限チェックに必要な外形形状を包絡するよう各建物要素の組み合わせで考えてください。

Q：道路高低差をGLではなく、基準BMからとしてよいか。

Ａ：基準点を明確にすれば、どちらでもかまいません。

Q：概要書の配置図には、棟番号を記載する必要はないのか。(第４面では記載となっているが)

Ａ：配置図に、第４面と対応する棟番号を記入してください。

Q：なぜ、三次元データが必要なのか。書面でも高さの情報は必要なのか。

Ａ：建築計画概要書の配置図には不要ですが、添付図書としての配置図には必要となります。高さの情報は、形態制限等のチェックに必要不可欠なデータです。

Q：配置図で用途地域境界線を入力し、申請書の用途地域別敷地面積を自動計算し転記できないか。

Ａ：今はできません。

Q：書面の配置図で、各部分の高さとは、具体的に何を書くのか。

Ａ：形態制限等をチェックする上で必要となる建築物の主要な部分について、基準となる点からの高さを記入してください。類似の例としては、日影図があります。

Q：既存建物のデータは必要なのか。

Ａ：配置図には、棟番号を０と表示してください。(規則第14号様式、注意欄に規定があります)

Q：付近見取図は、CADデータではダメか。

Ａ：規則では、イメージデータとなっています。

Q：要素のデータはいくつまで入るか。データ数は少なくないですか。

Ａ：本プログラムの現行バージョンでは、一つの棟で20個、敷地に20棟の要素が作成できます。

Q：平均地盤面の分割の判断は、ソフト側でできるのか。

Ａ：できません。設計者の入力となります。

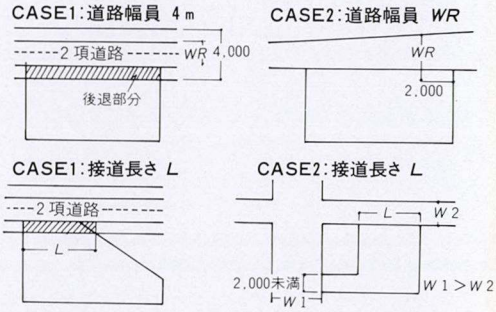
【「道路」の記載・入力方法】

Q：２項道路等の場合、道路幅員は、どのように記入（入力）するのか。また、道路幅員は最大のものだけでよいか。

Ａ：２項道路の場合については、後退後の道路幅員を記入（入力）してください。また２以上の道路に接する場合は、最大の幅員を記入（入力）してください。(CASE 1)

Q：平行でない道路の場合、道路幅員はどのように記入（入力）するのか。

Ａ：原則として、図示の幅員を記入（入力）してください。(CASE 2)



Q：接道長さの記入方法について、詳細に示してほしい。

Ａ：図示のように、接道長さを記入（入力）してください。

【「建築物の用途」の記載・入力方法】

Q：１階が店舗40㎡、住宅30㎡、２階が住宅70㎡の店舗兼用住宅を新築する場合、建築物用途はどのように記入するのか。

Ａ：第３面　7. の主要用途については、原則として敷地単位でとらえ、その施設の主な用途を判定して記入します。この事例の場合、住宅で事務所、店舗その他これらに類する用途を兼ねるものに該当します。(コード 08060　兼用住宅)

第４面　2. の用途については、棟別の用途としてとらえ、建築物用途で最も大きい部分の建築物用途を基準に記入します。(コード 08060　兼用住宅)

第５面　7. の用途別床面積については、階ごとの用途について詳細に記入します。

1Ｆ	コード	08440	店舗
	コード	08010	住宅
2Ｆ	コード	08010	住宅

【添付書類】

Q：確認申請に伴うビル管法、省エネ法などの書式も変更されるのか。

Ａ：行政文書については、全般的にＡ判に移行する予定です。

Q：FD申請の場合、1／2500の都市計画図添付は不要か。

Ａ：都市計画図と付近見取図は別のものなので、必要があればおのおの提出することになります。

Q：許可書、誓約書などの添付書類は、FD申請の場合どう扱うか。

Ａ：従来通り、書面にて添付することになります。

Q：危険物調書、工場調書の書類はどう変わるか。

Ａ：当面は従来通りですが、将来的には、統一してOA化する予定です。

【構造計算】

Q：構造チェックリストはＡ４判で提出するのか。

Ａ：各特定行政庁ごとにＡ４判にて対応します。構造チェックリストの統一は、今後の課題です。

Q：構造計算書のペーパーレス化の検討について。

Ａ：今後の大きな検討課題となっています。

渡辺壽一

大阪府建築部建築指導課審査第2係主査
建築確認支援システム運用協議会事務局員

Report

「街の色研究会・京都」シンポジウム'93

瓦の色と景観

松浦邦男

まつうら　くにお
「街の色研究会・京都」瓦の色調査委員会委員長
摂南大学建築学科教授・京大名誉教授

「街の色研究会・京都」は1992年８月、京都の街の色を調査することを目的として設立され、1993年には、＜色彩トーク＞「京都の夜景を考える」（４月３日）（本誌1993年５月号）、色彩文化講座等を主催している。

昨年11月６日には、その年次大会の機会に標題のシンポジウムほかを開催し、全国から約200名の参加をいただいた。総合司会は中村隆一副代表（京都芸大教授）である。

街の色研究会・京都の活動報告

まず当研究会の秋田宗平代表（京工繊大教授）より、この１年の活動報告、とくに「景観色」、「瓦の色」、「景観照明」、「祭りの色」、「壁の色」各調査研究委員会の活動と成果について報告があった。

景観色調査委員会報告

京都・大阪・神戸「街のイメージ色―三都物語」
（発表：加藤力委員長・京工繊大助教授）

三つの街のイメージ色を比較して、おのおのの特徴を明らかにした。

「街の景観色―その調和とは？」
（発表：豊原正智・大阪芸大、奈良磐雄・京芸短大、渡辺康人・日本カラーテクノロジー研、各委員）

麩屋町通および御幸町通を対象に、街並みのファサードの現状をＶＴＲ撮影したが、今後は、色彩とその調和の評価を考えている。

シンポジウム「瓦の色と景観」

基調講演要旨
（瓦の色調査委員会・委員長　松浦邦男）



1）日本とくに京都の瓦の色

794年の平安建都後、９世紀の建物と推定される大内裏、豊楽殿は1063年焼失したが、その瓦が1987年発掘された。それらは濃い緑色の釉薬瓦で、軒瓦、丸瓦、棟瓦、鴟尾の破片であり、軒瓦の色はマンセル記号で10GY4/3（1993年８月25日測定）であった。このような色瓦は法成寺をはじめいくつかの寺院に見られるが、主流はもちろん黒瓦であった。

近世にはいると、粘土瓦に漆を塗って金箔を貼る城郭建築（安土、大坂）が現れたが、軒瓦だけでしかも稀なものであった。江戸時代にはいって瓦は都市の町家に普及したが、寒冷地では褐色の釉薬瓦（石州瓦来待）が出現した。しかし、京都では黒瓦の品質は徐々に向上し、唐人一観が伝えたいぶし銀瓦が好まれるようになった。

明治以降、洋風建築の出現や塩焼瓦の工夫から若干の赤、褐色系統の瓦も現れたが、京都では微々たるもので、第二次大戦直後までは、いぶし銀の家並みでおおわれていた。要するに京都に限らず、日本では緑や赤系統の瓦はあっても、青い瓦はなかったのである。

2）京都の街の瓦の色の現状

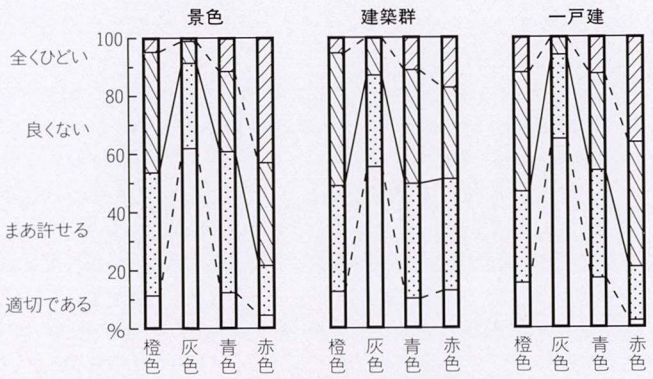
1965（昭40）年を過ぎるころから、それまで日本に全くなかった青い瓦が都市・農村を問わず現れ、約10年の間に日本国中に拡がった。それにつられて種々の色瓦・色屋根が使われるようになり、非戦災都市を除き日本の都市・農村の景観は一変した。京都ではこのころ急増した周辺の住宅地、すなわち、宇治市・醍醐・山科・修学院・岩倉・上賀茂・鷹峰・嵯峨野・桂・向日市・長岡京市などに、これが蔓延した。その状況は1979年撮影の航空写真（空から見た京都、日本交通公社、昭54）からも明らかである。これらの住宅はいわゆる木賃住宅・文化住宅であり、狭小で部材も細く、目立ちのために青瓦を葺いたのである。

時を同じくして、瓦製造業者は急増した住宅需要に応ずるため、生産性の悪いいぶし銀瓦の代わりに、トンネル窯で流れ作業式に量産できる安価な釉薬瓦を生産し始めた。窯業技術の進歩により釉薬瓦の色数は増し、それまで全くなかった青い色瓦が生産され、これが安価な建売・分譲住宅と結びついたのである。

3）京都市での屋根の色に対する法規制の現状

まず、京都市風致地区条例に基づく種別基準で、屋根ひさしの葺き材料は第１種地域では日本瓦（いぶし銀）、銅板等に限り、第２、３種地域で黒、灰色等の他の材料を許している。市街地景観条例では、美観地区で建築物の外観にけばけばしい色彩が施されていないこと、特別保全修景地区で地区別の具体的基準（風致地区のそれに近い）が定められている。別に凍結保存に近い伝統的建造物群保存地区等がある。

要するに、具体的基準が定められている地域は極く限られている。そこで、モンタージュ写真を用いて、瓦の色がどの程度ならば規制すべきかアンケート調査を行った。（図参照）



瓦の色に対する評価（%）

パネルディスカッション

パネリスト：
三田村宗二(画家)、島村昭好(正会員、伝統建築研究所)、高木美智子(正会員、カラー&イメージコーディネーター)、福島信夫（京都市都市計画局風致保全課）、松浦邦男（正会員、摂南大学教授）

コーディネーター：
吉村篤一（正会員、KK建築環境研究所）

まず、パネリストに主題についての意見、感想等を述べていただいた。

三田村：これまで京都の民家約4000軒を見て1350軒を描いてきたが、これを通して住居と人間生活とのかかわり合いを見てきた。瓦を含めて屋根は都市の皮膚であり、色瓦によって街の色が変わる。

島村：伝統的建築物の修理工事で日本瓦を見てきた。京都は瓦屋根が多いが、全体が瓦でおおわれたのはそう古くなく、せいぜい200年に過ぎない。最近の日本瓦は品質管理がよくなり、一様できれい過ぎであり、もっと変化があってもよい。

高木：ヨーロッパの瓦屋根の街は、スライドに見るように、南の赤みから北の濃いグレイまで変化しているが、一つの街で高さ、色彩がそろっている。これは法規制によるか、あるいは暗黙のうちにととのったもので、日本の街もこうならないものか。

福島：京都市の景観規制は他都市と比べて厳しく、また整備されている。ただ、色彩など具体的規準の定め方に不十分な部分があるが、これから皆さんの知恵を借りてさらに充実したい。

参加者も加わって

パネリストどうしの討論の後、参加者から多くの意見が述べられた。瓦製造業界の方々からは、京都の街並みの大切な要素である日本瓦を取り上げたことを評価していただいた。特に注目されたことは、金沢市、足利市、平塚市、福岡市など多くの自治体の都市景観の関係者の参加があったことで、この問題に対する関心の高さが想像される。そのほかにも熱心な討論があり、盛会のうちにシンポジウムを終了した。

日時：平成５年11月６日(土)10：30～16：30
会場：佛教大学四条センター（京都・四条烏丸）
主催：街の色研究会・京都　共催：佛教大学四条センター
後援：京都府、京都市　他　協力：日本建築協会　他

安全のための安心機構

おかげさまで30周年を迎えます

安全と安心を見つめて 30 Anniversary



建築物の質の向上と安全性の確保をめざして、
次のような試験・調査・研究を受託しています。

- 建築材料の品質と性能
- 構造物や構造部材の力学的性状
- 土の物性や力学的性状ならびに基礎・地盤の耐力
- 建築物や地域環境に関する空気力学的性状
- 建築材料および部材の耐火・防火性能
- 壁・床などの音響および熱に関する性状
- 窓の気密・水密性
- 建築全般に関する調査・診断

BRG

財団法人
日本建築総合試験所
GENERAL BUILDING RESEARCH CORPORATION

本　　所	吹田市藤白台5-8-1	TEL(06)872-0391	FAX(06)872-0784
大淀分室	大阪市北区長柄西2-1-18	TEL(06)351-7217	FAX(06)351-7856
堺　分　室	堺市浜寺石津町西2-1-34	TEL(0722)44-3912	FAX(0722)47-0299
京都分室	京都市伏見区中島前山町24-2	TEL(075)622-0713	FAX(075)602-1882
加古川分室	加古川市別府町新野辺字畑下1311-3	TEL(0794)35-5811	FAX(0794)37-1907

建築の眼

複雑さの中での建築

世の中の仕組みが複雑になって、筋の通った理論で幾つもの切り口を作ったとしても、物の本質は見えて来なくなった。学生の設計指導の一端で、建築はなるべく複雑に造るのが良い、というのも頭の訓練には有効だと思うが、実在の建築の成り立ちの複雑さを理解させるまでには、徹底及ばない

過ぎ去ったバブル時代のデザイン主導型の設計方法は、複雑さからの逃避を金で買ったようなものと思う。金さえ出せば誰でも何でもやってくれるということは、かえってモノの創造力を失う結果になったし、結局はその時期が、何も得るものの無かった時期ともいえよう。そのずっと以前から、不可解な複雑さの中で建築をどう作るかを、人は確かに考えようとしていた。それがあの時期、世の中の多くが色気を出して横みちを見てしまったということであろうか。とすればいよいよ腹をくくって、複雑さを理解する方法を手に入れるべく努力することが必要であると思っている。

河邊　聡　京都工芸繊維大学教授

タウンウォッチング（大阪茶屋町界隈）

茶屋町へ事務所移転して20年余りが経つ。その変貌ぶりを経年的・定点観測的に体感してきたわけで、とりわけ超高層ビルや大規模な商業ビルが完成すると、周辺道路、植栽等も整備され、まさに、以前の光景を思い出させない程ドラスチックに一変するのは蓋し当然のことである。この５年足らずの間に、梅田ロフト、MBS、阪急電鉄本社、アプローズタワーと劇場「飛天」が相ついで完成した。我々は職業柄どうしてもデザインやプラン・ディテール等に目が向いてしまう。然し寧ろ漫然と、街の雰囲気・或いは通りすぎる人達（現代は群衆が分衆化している？）を、ブラブラ歩きしたら、複眼的観察をすると、又、愉しいものである。

前述の梅田ロフトは、オープン以来、実に沢山の若者達がやって来る。阪急梅田駅と数百メートルの距離にあり、新しい百貨店経営戦略によるものであろう。又、劇場「飛天」は、やや年配の人達でまるでポンプの様にこれらの建物に吸い込まれ、吐き出され、囲りへ散っていく。それは寧ろ表通りよりも、地上げの終わった歪曲した昔の路地へ。人々はそうした細街路に、何か郷愁があるのかもしれない。バブル時代の終焉で、この未完ゾーンが、いつどんな街になるか、因みに新宿・上野・池袋は男街・原宿・青山・銀座は女街・さて大阪茶屋町界隈は？

山下　勝　双星設計代表取締役社長

木賃整備の曙

カルチェ・ダムール（愛の街角）…モダンで瀟洒な３階建ての集合住宅街（136戸、7,400平方メートル）。ここは、門真市域の一角にあって、かって老朽化した木造の文化住宅やアパートがひしめきあう市街地であったが、昭和60年から丸５年の歳月を経て建替事業が竣工した。

こうした木賃地区は、大阪中心市街地の周辺部、いわゆるインナーリング・エリアに50万戸も集中しており、これに対処する関係市を支援するため、平成２年９月に大阪府まちづくり推進機構が設立された。第２、第３のカルチェ・ダムールを実現するために、関係市と推進機構の懸命の働きかけが始まり、現在手がける事業は、30数地区・箇所にも及んでいると聞いている。

昨年の10月末に、寝屋川市東大利地区で、大阪府の超低利の融資制度を使った共同建替事業が着工された。この地区は、老朽化した木賃住宅が密着した約7,100平方メートルの地区であり、既に住・都公団により30戸の建替が完成していた。その後、地区を４つのゾーンに割り、段階的に地権者の合意を取り付けながら事業化を目指していたもので、今回の１次ゾーンの着工と２次ゾーンの地権者合意により一挙に整備が進むものと期待されている。少し気が早いかも知れぬが、第２のカルチェ・ダムールが完成するのも間近ではと…。寝屋川を始め関係者の一層のご努力を期待したい。

笹川敏昌　大阪府建築部副理事

美的建築のすすめ

大阪には、かつて「痰(たん)つぼ」と言わしめた光景もまだ散見されるが、最近、徐々にデザイン重視、景観重視の建造物が創られるようになつてきた。大阪のイメージも、少しずつではあるが良くなっていると思う。都市景観への寄与に対する表彰制度などが設けられ、建造物に社会的な評価が与えられる一方、我々建築界にあっても、底の浅いポストモダンではなく、腰を据えた上品なデザインのものが主流になりつつある。総じて、良い方向に進んでいるのではないか。個人的な好みは別にして、デザインエネルギーが結果として感じられ、それが地域のコンテクストにマッチし、人々に愛されるまでに昇華したものを、私は「美的建築」と呼びたい。

美的建築を創るのは容易ではない。限られた予算・時間と格闘し、クライアントを説得して完成までこぎつけねばならない。クライアントの要望はさまざまであるが、それらに対して少しでも高い次元で応え、社会をリードする建築こそが、私の望む美的建築である。設計者として、このような苦労の機会を与えて頂き、経験を積み重ねられるなら幸せである。

藤崎安弘　㈱奥村組建築設計部長

特集
九州のインスタレーションと貌

作品

最近の建築作品　11点

・

総説

都市をよむキーワードとしての建築「インスタレーション」

萩島　哲（九州大学工学部教授）

都市をよむキーワード

仮設／仮想／遊戯／異化／虚構／図と地／両義

インタビュー

ー磯崎　新と二人のメセーヌー

谷　伍平（北九州市立美術館長・前北九州市長）

四島　司（福岡シティ銀行頭取）

キーワードの意味（参考）

【都市を読むキーワード】（区分の視点の一貫性、区分肢の排他性、区分肢の網羅性が必要）
【仮設】②〔名・ス他〕仮に作ること。「一住宅」
【仮想】〔名・ス自他〕事実でないことを仮にそう考えること。仮定しての想像。「一敵国」
【遊戯】①〔名・ス自〕遊びたわむれること。遊びごと。②〔名〕一定の方法で行う、運動と娯楽を目的とする遊び。
【異化】〔名・ス自他〕生物が外から取り入れた物質を化学的に、より簡単な物質に分解すること。↔同化。「一作用」
【虚構】〔名・ス他〕実際にはない、作り上げたこと。作り事を仕組むこと。フィクション
【地図】一定の地域の状態を縮尺して平面に描いた図。
【複合】〔名・ス自他〕二つ以上のものが集まって一つになること。また、それを一つにすること。
［ x貌］ボウ（バウ）かたち①物のかたち・すがた。顔かたち。「容貌・風貌・美貌・面貌・顔貌・形貌・体貌・変貌・全貌・相貌」②外観。見かけ。うわべ。「外貌」
【転化】〔名・ス自〕他の状態・物に変化すること。転じて行くこと。
【カセット】小箱
Install［動］（他）①〔装置など〕を取り付ける、設置する、備えつける。②〔儀式を行って正式に人〕を就任させる。任命する。③　を着席させる；を落ち着かせる；《in…に》。
Installation［名］①就任（式）；任命。②設置；装置、設備。
【仮設の】〔仮の〕provisional；temporary《stands》；〔仮定の〕hypothetical。
【架設】construction；　building；　installation。
Patron［名］①後援者、保護者、パトロン。②お得意、ひいき客、利用者。
Patronage［名］①後援、賛助。②（商店などに対する）ひいき、愛顧、引き立て。

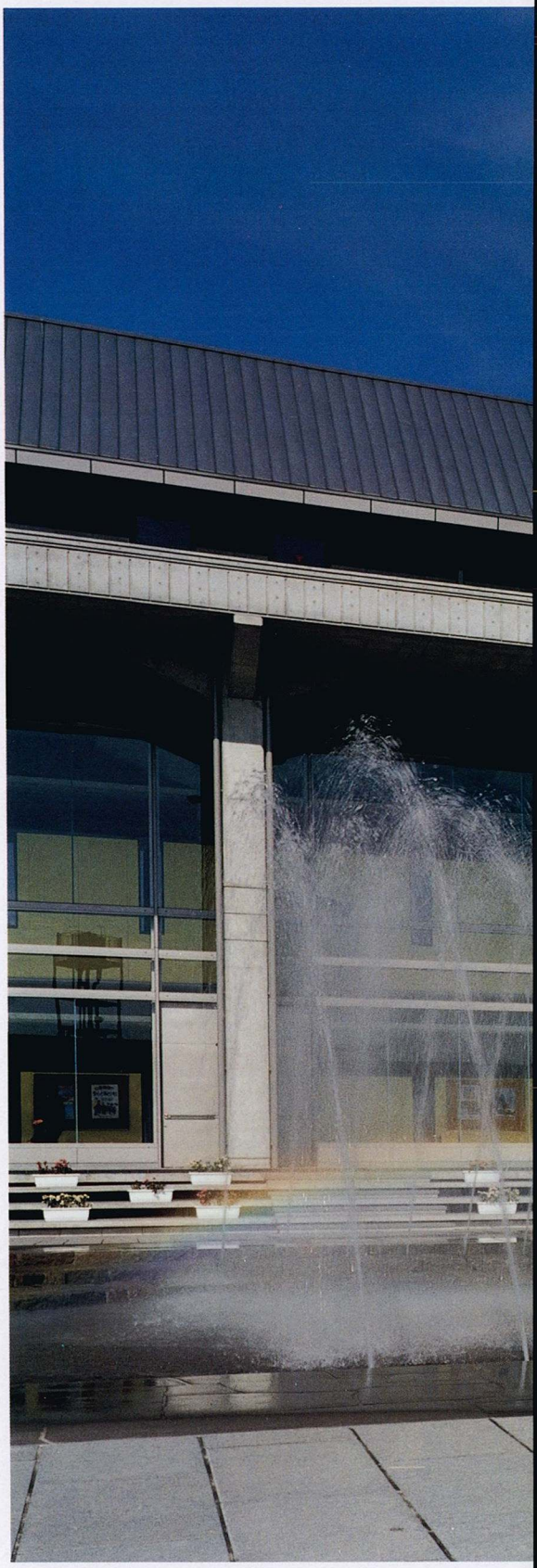
出典：岩波国語辞典／新クラウン和英辞典／ニューセンチュリー英和辞典

本特集編集企画委員会

萩島　哲（九州大学工学部）ー幹事
江口正利（アトリエGEN）
倉吉宏明（安井建築設計事務所）
黒瀬重幸（八代工業高等専門学校）
重松雄二（東畑建築事務所）
広川大八（1995ユニバーシアード福岡大会組織委員会）
村上義孝（安井建築設計事務所）
森　　薫（日建設計）

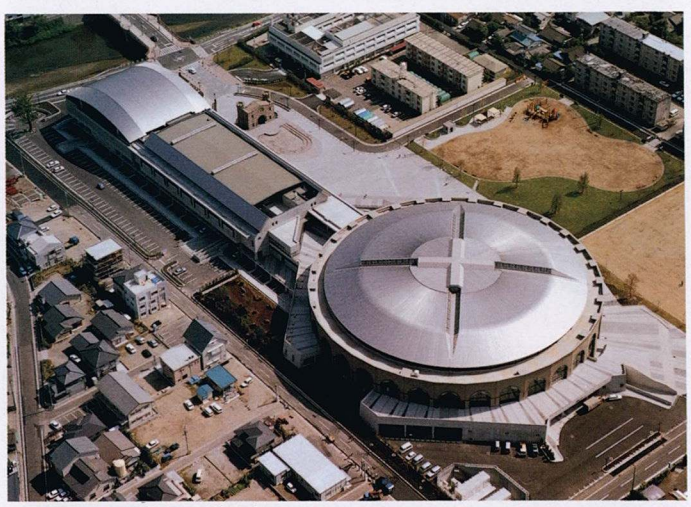
鹿児島アリーナ

設計監理　日建・川元・下舞JV
施　　工　ハザマ・鴻池組・日産建設・前田組・
　　前屋敷・下道組JV



この施設は、国際規模や全国規模のスポーツ大会と各種イベントを開催できる「メインアリーナ棟」と市民のための生涯スポーツセンターの役割を担う「サブアリーナ棟」とで構成されている。
兜突川にかかる石造五橋と、石造文化財として保存された旧刑務所の門という鹿児島伝統の石の文化に囲まれた環境を生かし、外壁を古代円型劇場のフォルムを原型として、広い敷地全体を石の環境三部作からなるメモリアルパークとした。
「みる」スポーツを主体としたメインアリーナと「する」スポーツのためのサブアリーナを柱列回廊でつなぐことで、大イベント時は一体利用ができ、門を背景にした池や広場を取囲んで、景観上も一体となって市民に憩いの場を提供している。
メインアリーナはスポーツ大会時の平行席から、コンサート時のセンターステージ席へという従来の施設にはない配置転換を可能にするため、エアフロート・シーティングシステムを開発し、劇的な空間変化を実現した。
特に降灰の多い厳しい地域特性に対しては、屋根全面をチタンシーム溶接工法にして解決した。

(橋本　巖／日建設計)



屋根全体がチタンシーム溶接工法



建物と門を背景にした噴水広場



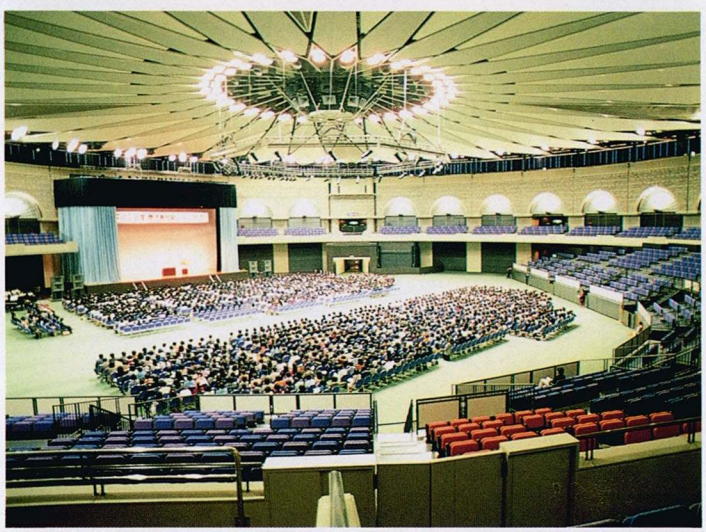
アリーナ内部全景（Bパターン　円型劇場）



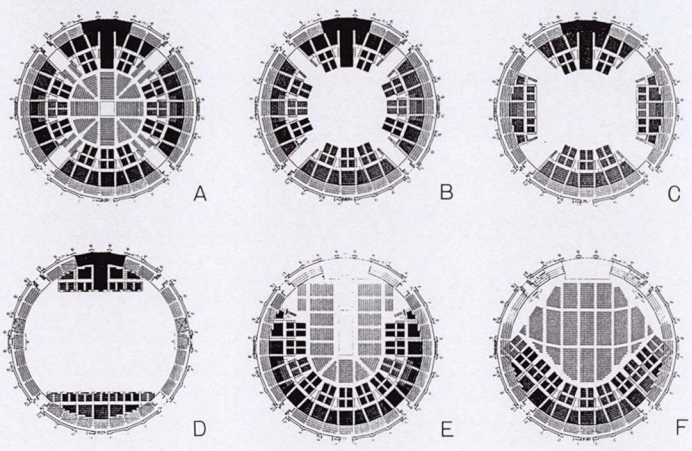
メインアリーナ平行席（Dパターン　スポーツ大会）



（Dパターン　展示会）



（Fパターン　講演会）



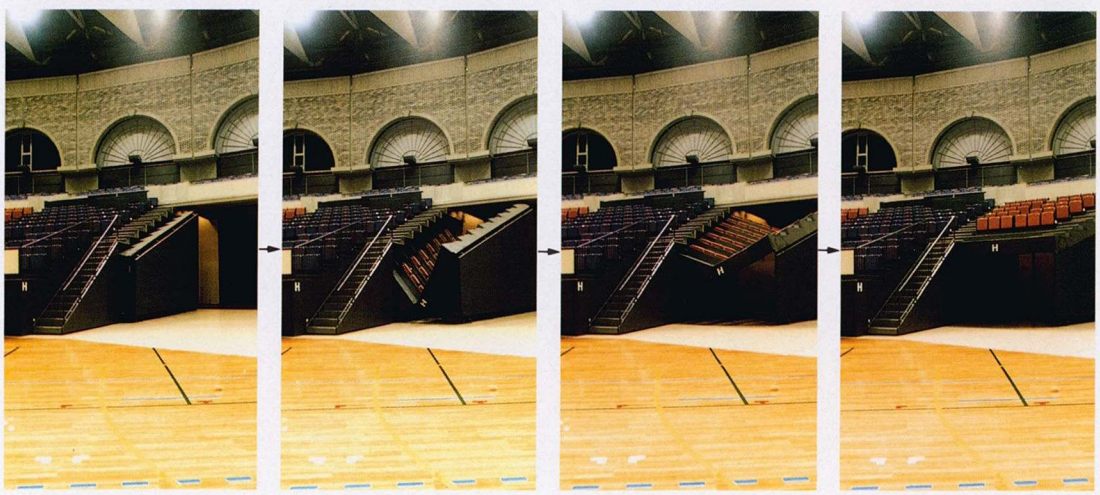
6つのシーティングパターン



武道場



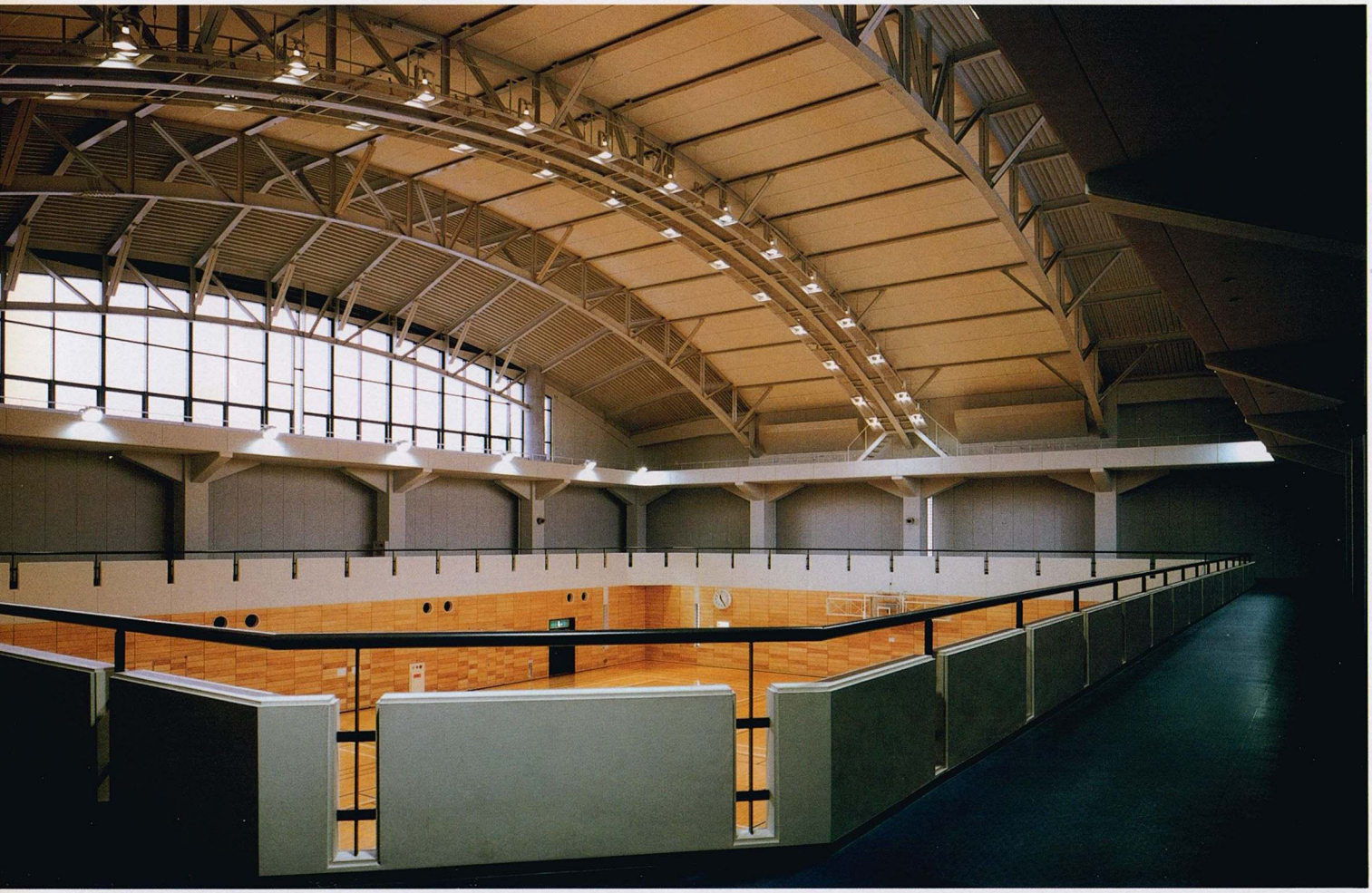
弓道場射場



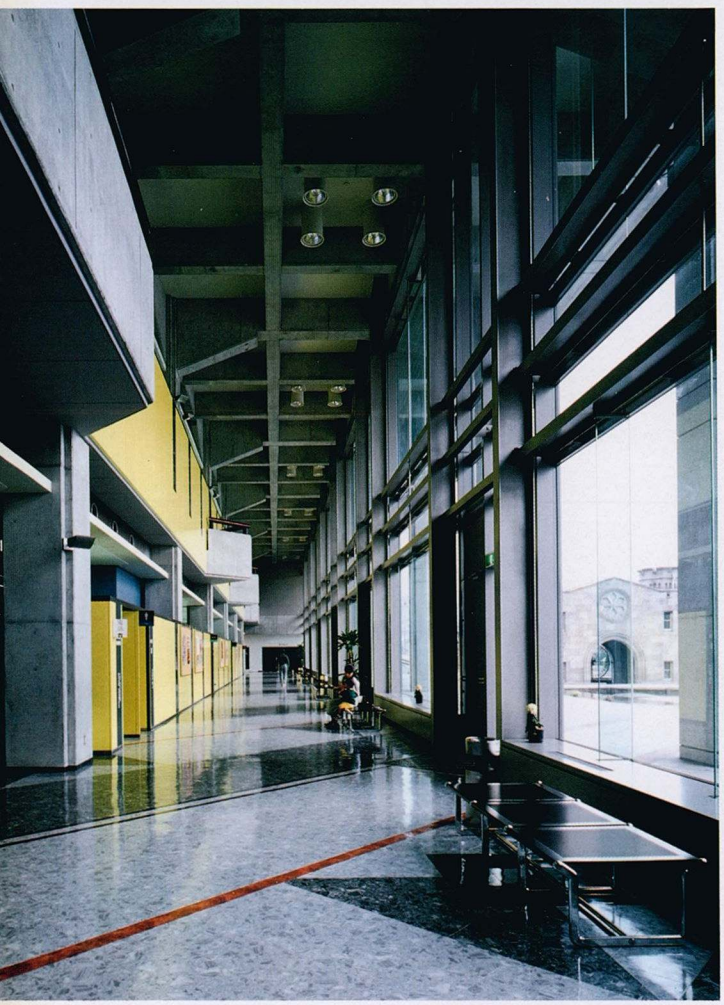
●特記

エアフロート・シーティングシステムは、1階の全座席を12分割した重さ数10トンの各ユニットが、足元に設置したエアベアリングの空気圧でアリーナ面から約20㎜空中に浮上して軽々と走行し、折りたたみ式のウィング席と連動して、多種多様な使用目的に応じて6つのパターンに変換できる、今までにないダイナミックな移動観覧席システムである。

・主要用途：国際スポーツ、市民スポーツ、コンサート、講演、展示



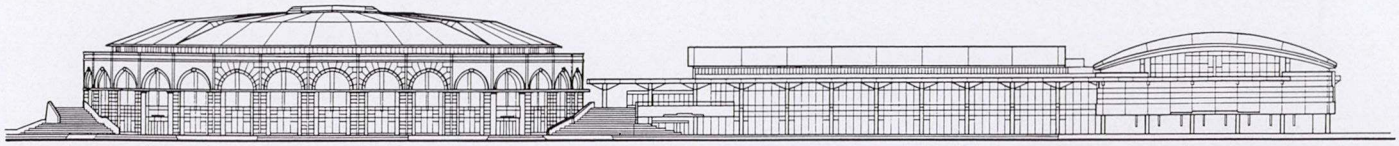
サブアリーナ・ランニングコース



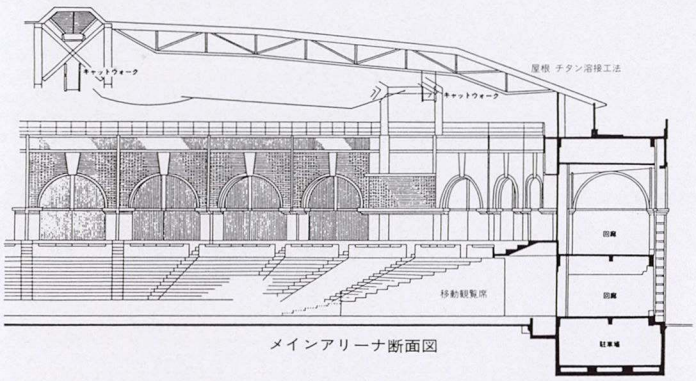
サブアリーナ1階回廊



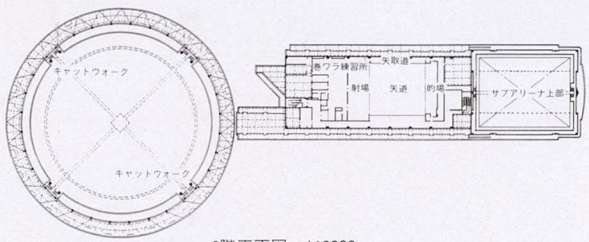
メインアリーナ2階回廊



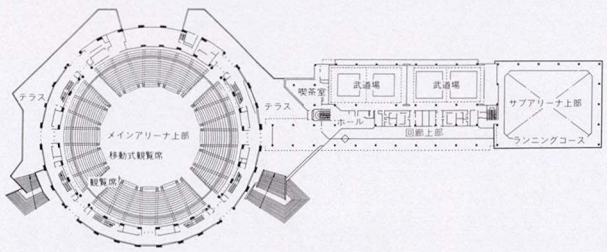
立面図　1:1400



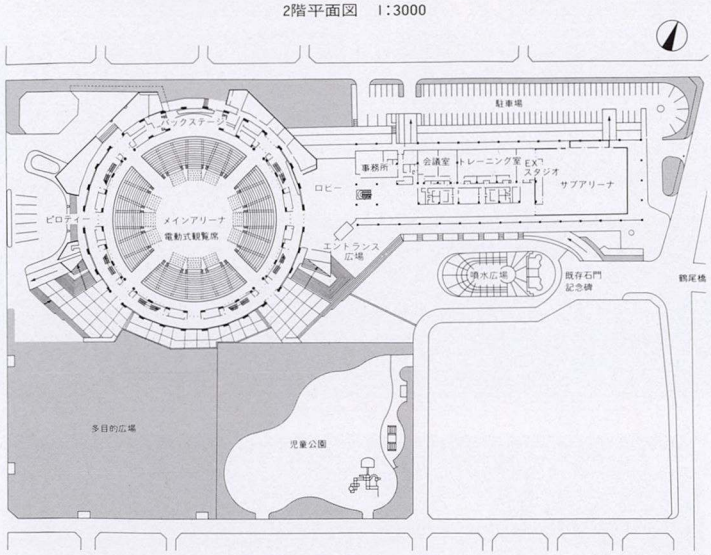
メインアリーナ断面図



3階平面図　1:3000



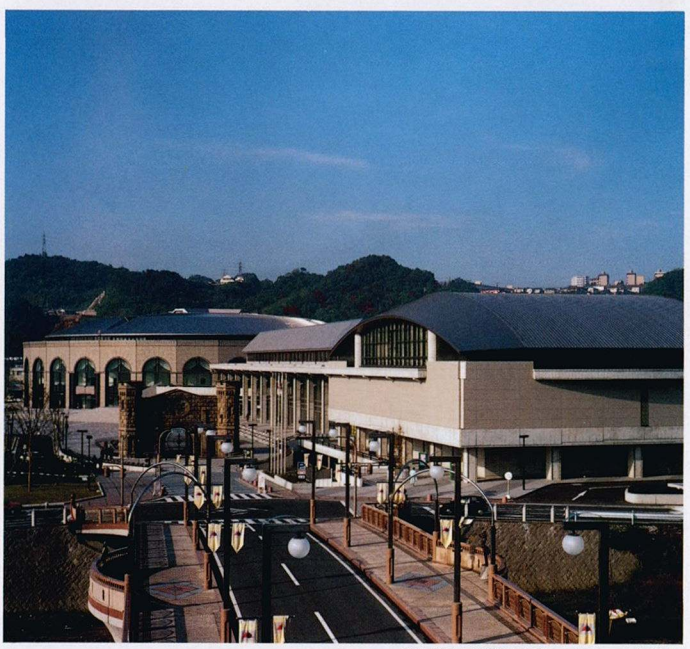
2階平面図　1:3000



配置図・1階平面図　1:3000



メインアリーナとサブアリーナを結ぶ外回廊



鶴尾橋より既存石門・アリーナを望む

主施設：○メインアリーナ(4,486㎡)・バレーボール４面、バスケットボール３面他　最大収容客席数 5,700席○サブアリーナ(1,008㎡)・バレーボール２面他○武道場(540㎡×２)　・畳敷き２面、板張り２面○弓道場(和弓近的10人立ち)○トレーニング室、健康体力相談室(360㎡)・トレーニングマシン○Exスタジオ(110㎡)・軽体操○会議室(235㎡)・大会議室、小会議室○駐車場・266台＋臨時264台　計530台○その他・ロビー、回廊、事務室など

□電気　きんでん・南九州・栗牧ＪＶ　□空調　新日本空調・南菱電設・鹿児島日立ＪＶ　□衛生　旭工業所・富士工業・南栄設備・興南水道ＪＶ　□昇降機　三菱エレベーター　□移動観覧席　サンケンエンジニアリング　□アリーナ床　三洋工業

所在地　鹿児島市永吉町13-9
敷地面積　34,119.68㎡
建築面積　13,570.37㎡
延床面積　29,023.31㎡
構造面積　SRC、S、BIF、3F
工期　平成２年10月～平成４年10月
最寄駅　JR西鹿児島駅
撮影　黒田青巌・アイオイプロフォート

リーガロイヤルホテル小倉及びポステ&アーバンポート　北西外観

小倉インターフェイススクエア

設計監理　日建設計

施　　工　：16号館　リーガロイヤルホテル小倉
鹿島・奥村・大成・鴻池JV
：21号館　ラフォーレ原宿・小倉
清水・奥村・大成・鴻池JV
：15号館　ポステ＆アーバンポート
奥村・清水・鴻池JV



上空より関門海峡と門司方面を望む



リーガロイヤルホテル小倉・2層吹抜の1階ラウンジ



客室(スイートルーム)



スカイラウンジ

―小倉駅北口の開発―

市制30周年を迎えた北九州市は、〝水辺と緑とふれあいの国際テクノロジー都市〟を基調テーマとした「北九州市ルネッサンス構想」が現実に向け大きく前進している。

そのひとつが国際化、高度情報化に対応した国際コンベンションゾーンを出現させる「小倉駅北口整備事業」である。その中心的な役割を担っているのが小倉駅北口に6.8haの土地を所有している小倉興産㈱の開発である。

国際コンベンションゾーンに不可欠な本格的なシティーホテルとして小倉興産16号館(リーガロイヤルホテル小倉)、にぎわいのある街づくりの商業施設として小倉興産21号館(ラフォーレ原宿・小倉)、そして増加する一方の駐車需要に対応すべく、駐車施設として小倉興産15号館(ポステ&アーバンポート)の3棟がほぼ同時に完成した。この3棟は2階レベルでペデストリアンデッキによってつながれ、将来は駅前広場のペデストリアンデッキとも接続され、回遊性をもったにぎわいのある街づくりを目指している。

ホテル棟は高さ132m、九州で最も高く、最上階のスカイラウンジからは関門橋、若戸大橋が一望できるシンボリックな建物である。商業棟は縦動線の中心に6層の吹き抜け空間をもち、どの位置からも店舗構成がわかるものとしている。

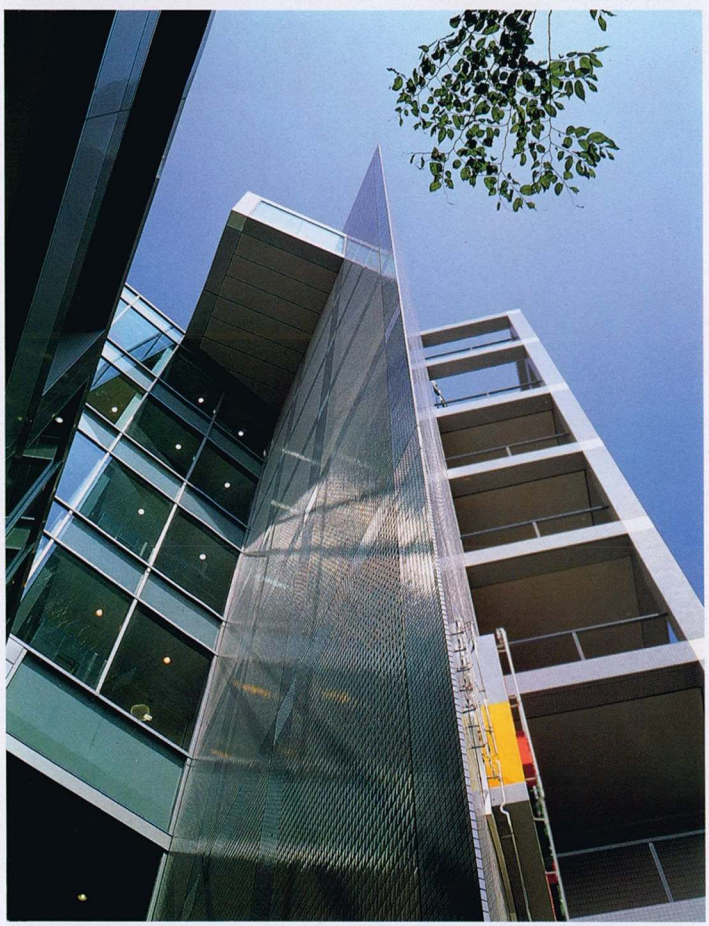
また駐車場棟は地下1～2階を店舗とし、街並ににぎわいをもたせた西日本最大クラス(約1,000台)の自走式立体駐車場である。

小倉駅北口にこの3棟が完成したことによって人の流れが変わり、都心としての形態が整いつつある。

(北島正行／日建設計)



ラフォーレ原宿・小倉 西側外観



外観・南西面ディテール



2階～7階のアトリウム 内装設計は葉デザイン事務所



15号館と16号館を結ぶペデストリアンデッキ



リーガロイヤルホテル小倉、ラフォーレ原宿・小倉　西側外観



ポステ＆アーバンポート　東、北外観

小倉インターフェイススクエア

所 在 地　北九州市小倉北区浅野２-14-2、3、5　　敷地面積　23,271.00㎡　　最寄駅　JR小倉駅

『16号館　リーガロイヤルホテル小倉』①

建築面積　7,519.52㎡

延床面積　64,853.31㎡

構造規模　SRC、S、B1F、30F、PI

工　　期　平成２年10月～平成５年３月

撮　　影　名執一雄

『21号館　ラフォーレ原宿・小倉』②

建築面積　3,235.19㎡

延床面積　17,491.67㎡

構造規模　SRC、B1F、７F、PI

工　　期　平成３年６月～平成５年３月

撮　　影　名執一雄

『15号館　ポステ＆アーバンポート』③

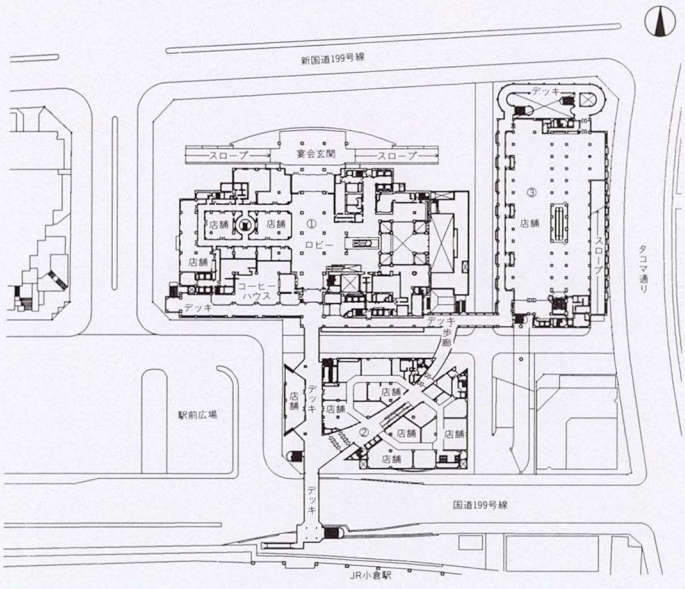
建築面積　4,330.08㎡

延床面積　34,004.99㎡

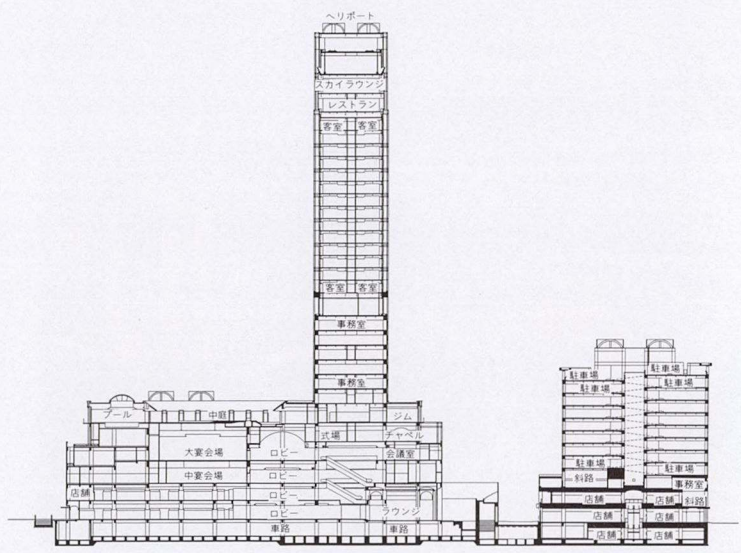
構造規模　SRC、B1F、11F、PI

工　　期　平成２年９月～平成４年８月

撮　　影　桜木写真工房



配置図・2階平面図　1：3000



16号館・15号館断面図　1：2000

日田市庁舎

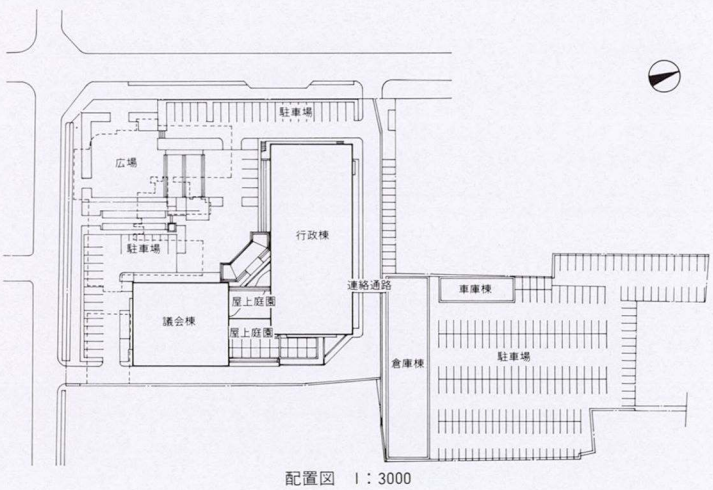
設計監理　安井建築設計事務所
施　　工　大林組・佐伯建設・藤田建設共同企業体



外観南面



外観南西面



配置図　1：3000

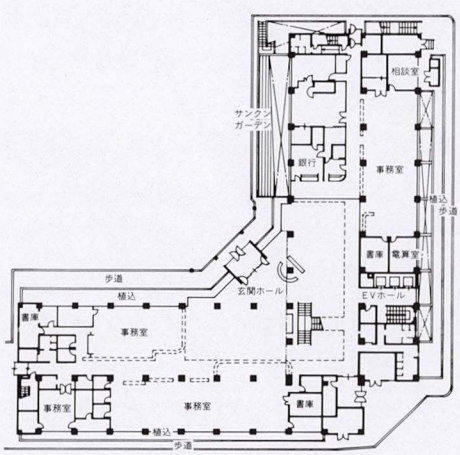
日田市は大分県の北西部に位置し、「清流三隈川」と美林に彩られる自然に恵まれ、江戸時代は天領として栄えた歴史の街である。日田市制定50周年記念事業の本庁舎は、市民に開かれた庁舎、社会的弱者に対する配慮、明快かつ合理的で快適な執務空間の提供の3点を基本理念として計画された。

市のランドマークとするべく地下1階・地上7階の規模の庁舎は「水と緑と人のふれあいの場」である市民広場をL型に囲む1階全体を窓口業務、北ウィングの2～7階には行政部門、地階には食堂・機械室関係、東ウィングの2～4階には会議部門を設ける構成とした。庁舎としての使いやすさ、将来の機構改革・用途変更に対応可能なフレキシビリティを持たせるため、6m×9m・12mの経済スパンを採用し、動線の単純化をはかりダブルコア中廊下形式とした。

外観は、暖かみを持った白いタイル貼の外壁と黒い金属の切妻屋根が生み出すコントラストと、典型的な盆地気候に対する省エネルギーと維持管理を配慮して設けられた軽快なバルコニーによって「小京都」と呼ばれる古いまちなみに調和しつつ、新しい時代の市民のシンボルとしての現代性を表現し、後世に永く伝える庁舎を目指した。

（岩崎弘行／安井建築設計事務所）

所 在 地　大分県日田市田島2-6
敷地面積　14,188.24㎡
建築面積　2,821.73㎡
延床面積　12,872.34㎡
構造規模　SRC、B1F、7F
工　　期　平成2年2月～平成3年8月
最 寄 駅　JR久大本線日田駅
撮　　影　SS九州



平面図　1：1200

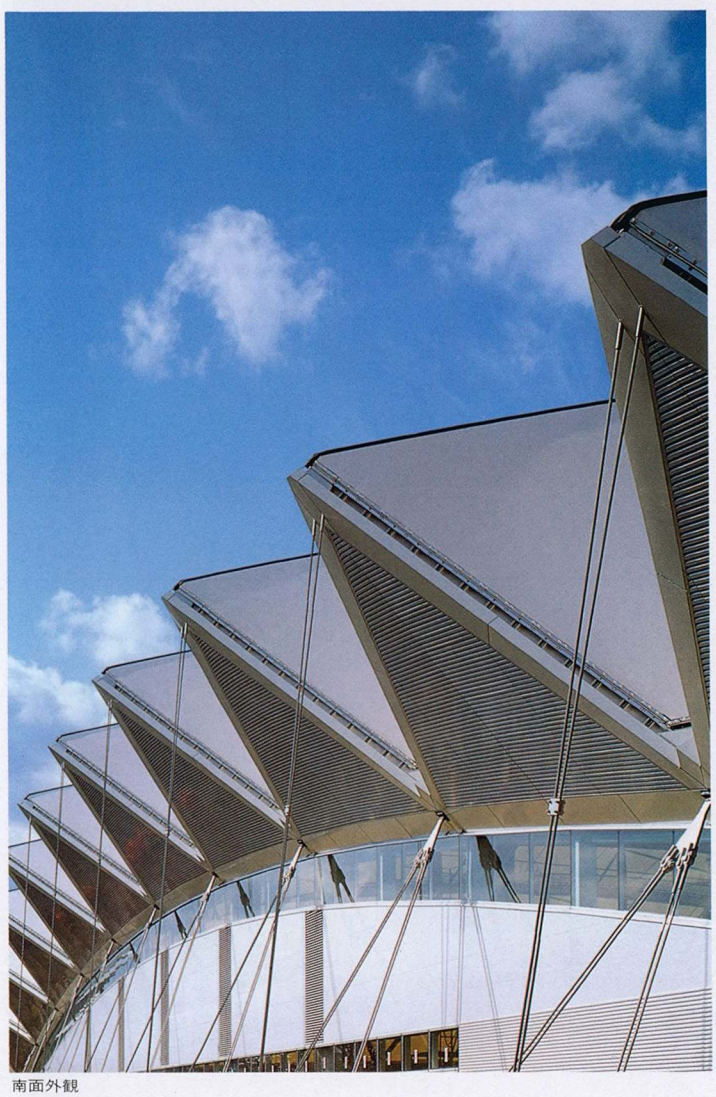

1階玄関ホール


3階議場


地下1階食堂



南面外観



南面外観



西面外観



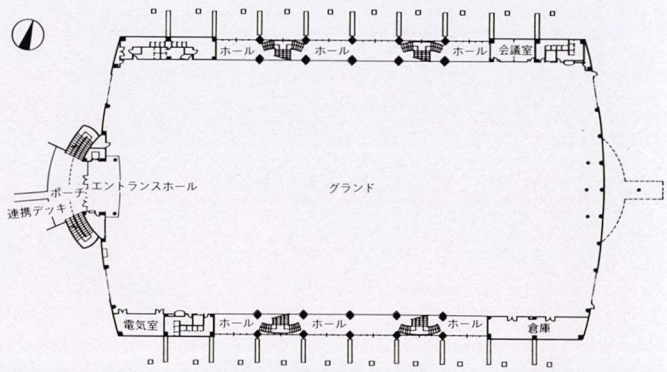
屋内柱頭見上げ



仮称 多目的スポーツ施設

設計　東畑建築事務所
構造　東畑建築事務所＋斎藤公男研究室
監理　北九州市建築局営繕課・東畑建築事務所
施工　大林・株木・大成工業共同企業体

所在地　北九州市八幡西区鉄竜一丁目
敷地面積　31,873.3㎡
建築面積　7,414.6㎡
延床面積　8,763.9㎡
構造規模　SRC、２Ｆ、屋根Ｓ
（サスペンション膜構造）
工　期　平成５年４月～平成６年３月
最寄駅　JR鹿児島本線黒崎駅
撮　影　河野博之

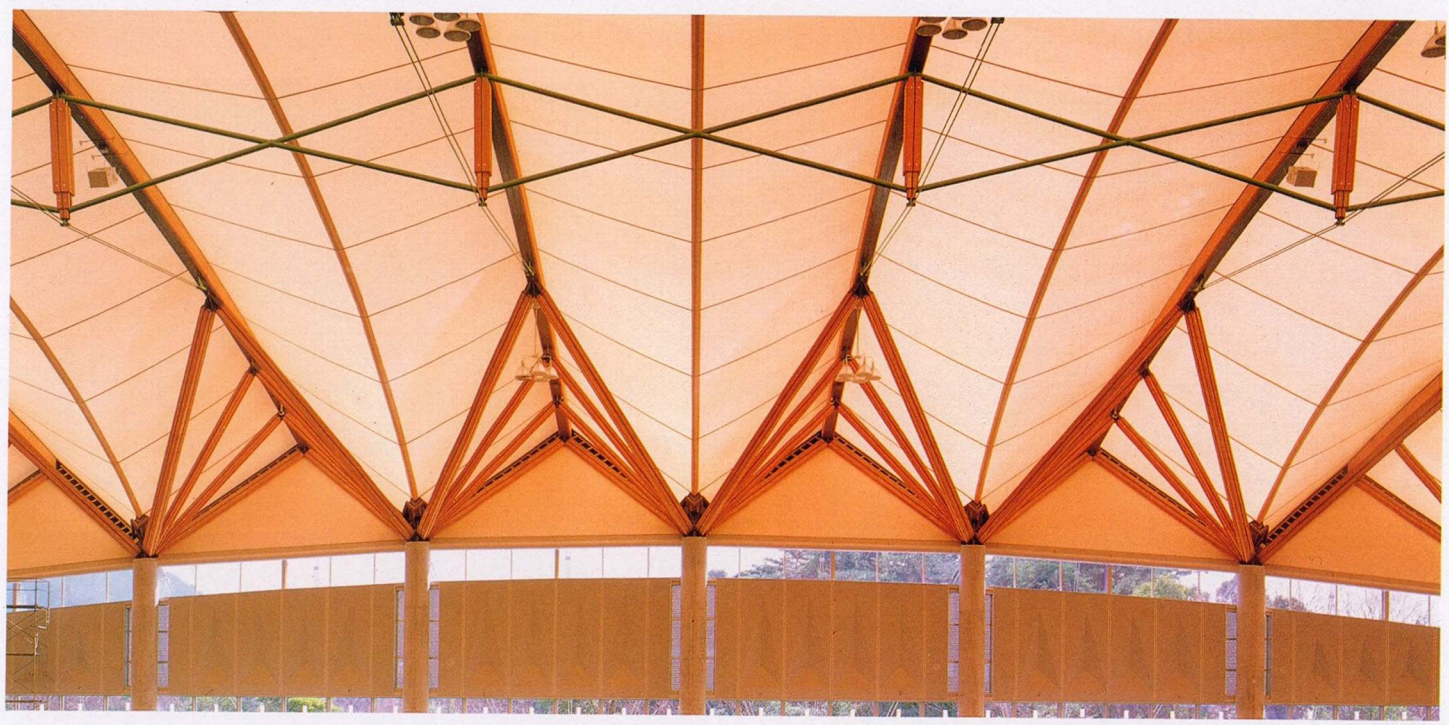


１階平面図　1：1600

閑静な住宅地区である鉄竜地区は、北九州市主導のもとに新しい街づくりが進められており、当施設はその先駆けになるものです。
スポーツ施設は、平成６年10月に開かれる全国スポレク大会のゲートボール会場として計画されたもので、西側に第二年長者研修大学校（仮称）が併設されます。年長者に対する施設でテニス・バレー・ペタンク等多目的に使用されますが、若年層の利用も含めて考慮されており現在建設中です。

屋根はサスペンション膜構造で、張間構造は、BSSとしています。鉄骨柱梁は集成材により座屈を拘束したハイブリッド部材とし、周辺の森空間を演出しました。又木肌は膜面の柔らかさを引き出す役割を兼ねています。
屋根面はドーナツチューブの一面であり一点を指向しています。その形状をパラグライダーとし再生飛翔する北九州市を象徴する姿としています。
膜については、当施設の圧倒的要素でもあり、透光機能の活用のみならず、膜による内外空間の演出が最大のテーマとなります。膜を折れ面とし、内外共に光と陰を隣接させ、光る膜の美しさを強調することとしました。室内的には膜面を遮る部材を最小限にすることを構造の取り組み方の第一義とし、膜の継ぎ目はむしろ積極的に見せる等原点に帰った取り組みをしました。

（重松雄二／東畑建築事務所）


屋内南面

伊万里市民センター

設計監理　安井建築設計事務所
施　　工　五洋建設・黒木建設・金崎組・川原建設共同企業体

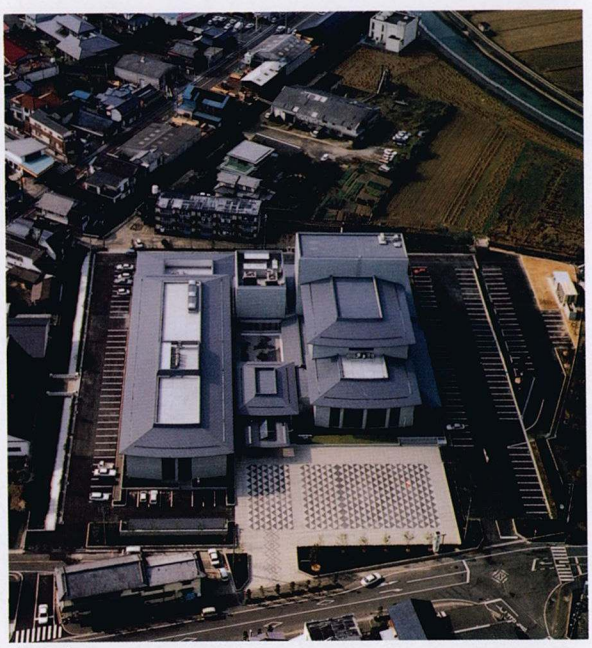
所 在 地　伊万里市松原町383
敷地面積　13,901.57㎡
建築面積　 4,739.98㎡
延床面積　 6,403.40㎡
構造規模　RC、3F
工　　期　平成3年3月～平成4年10月
最 寄 駅　JR筑肥線・松浦鉄道伊万里駅
撮　　影　SS九州



外観東面



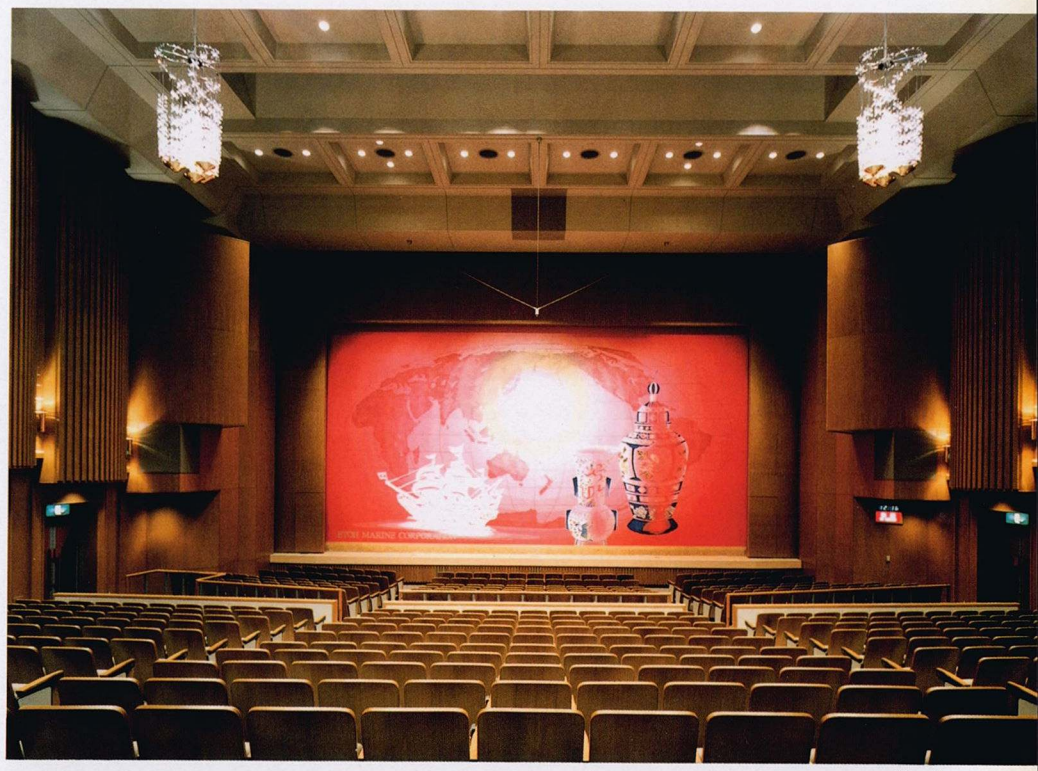
玄関廻り



航空写真

伊万里市は、佐賀県の西北部に位置し、17世紀なかばよりセラミックロードの起点として、国際交流の歴史が豊かな人口6万2千余の市である。
今回の市民センター建設地は、伊万里市中心部の住宅街に位置し、周辺は中央公民館・図書館・歴史資料館などの文化施設が立地している。計画にあたっては、一般住宅地域に隣接した敷地条件より、日影・風害・電波障害などの環境保全を重視し、建物の低層化をはかるとともに、常時使用される施設の日照・通風を考慮し東西を建物軸として計画した。
また、全面広場を設け、日本三大けんか祭りのひとつ「トンテントン祭り」等のイベントにも対応できるよう配慮するとともに、隣接環境と調和するよう植栽をほどこし、景観を整えるよう努めた。
当市民センターは、大きく会館棟とコンベンションホール棟により構成され、さらに、会館棟は教養・福祉・保健の各ゾーンに分けられる。
いずれの施設も、健常者・身体障害者・老若男女の市民全てが利用できるような複合施設として計画されている。
ホール棟については、収容人数570人と小規模ではあるが、シューボックス型のホール形状をとり、コンサート時の残響計画に留意した。また、当ホールの場合、今後の国際化社会に向け、同時通訳設備を備え国際会議にも対応できるよう計画されている。

（倉吉宏明／安井建築設計事務所）



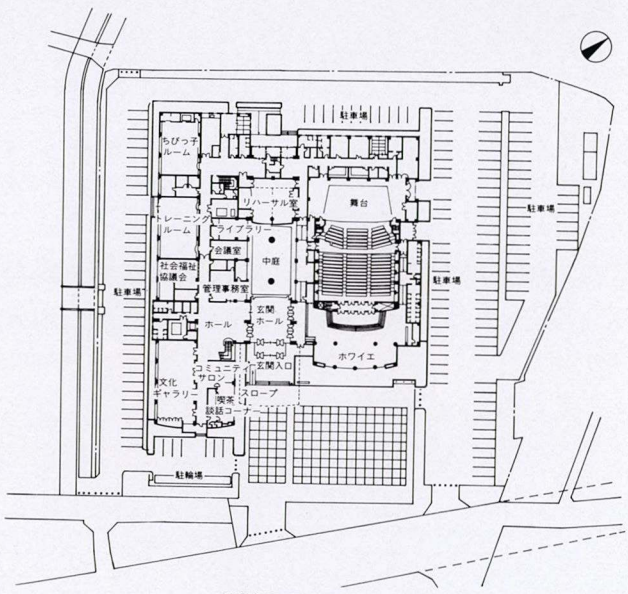
ホール



玄関ホール



ホワイエ



配置図・1階平面図　1：2000

鹿児島港本港区北埠頭旅客ターミナル及び貨物上屋他

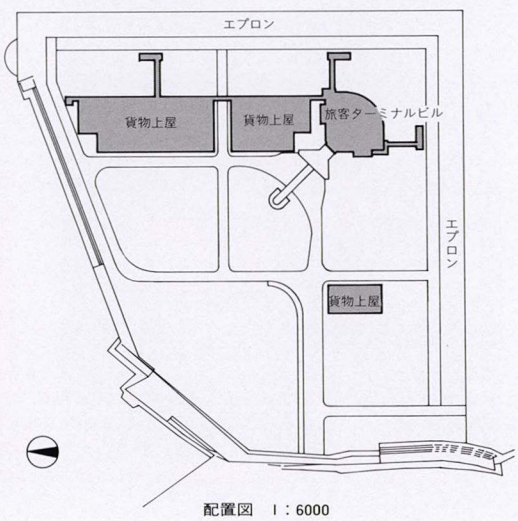
設　計　鹿児島県土木部建築課、安井・衛藤中山設計共同企業体
監　理　安井・衛藤中山監理共同企業体
施　工　前田・萩原・中山JV、坂本・鶴留JV、新生・勝JV
　　渡辺組、岩田組、竹下組、森山工務店



旅客ターミナルビル外観南面

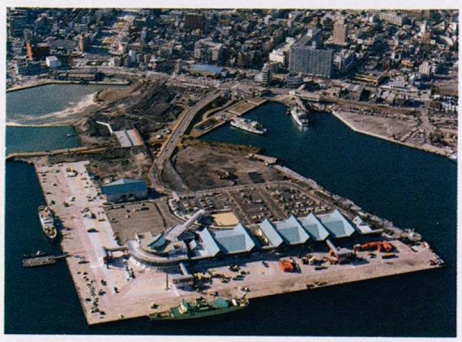


2号上屋東側外観



配置図　1：6000

所 在 地　鹿児島市本港新町
敷地面積　10,379.88㎡
建築面積　11,906.45㎡
（ターミナル 2,311.57、その他 9,594.88㎡）
延床面積　14,185.23㎡
（ターミナル 5,350.34、その他 8,834.89㎡）
構造規模　旅客ターミナル RC、S、3F、貨物上屋 RC、S、1F
工　　期　平成４年７月～平成５年12月
最 寄 駅　JR鹿児島本線鹿児島駅
撮　　影　アイオイプロフォート、不二青※





1階エントランスホール・受付カウンター


3階バルコニー南東面


乗船ラウンジ※

鹿児島港は600年の歴史を有し、本港区を発祥として現在では８港区に拡大され港湾活動が活発に行われている。しかしながら本港区は用地の狭あい化、施設の老朽化、分散化で流通の近代化に対応できず再開発の要請が高まっていた。

そこで鹿児島県は「鹿児島港ポートルネッサンス21計画」を策定し、本港区背後地域の海や港とのつながりの深さ、鹿児島港発祥の地としての歴史的厚み、桜島を前面に望む恵まれた景観等をふまえ多様な機能が高度に営まれる「総合的な港湾空間の創造」を目指している。本施設群は上記計画の第１期工事として、沖縄・奄美諸島航路用の旅客ターミナル・貨物上屋、来港者が自由に散歩・見学できる自由歩道（スカイデッキ、ラウンジ）、ピーク時の混雑解消、歩車分離用のペデストリアンデッキからなっている。

配置計画は機能性を重視し、船の停泊位置、港湾作業、乗降客の歩行距離を考慮しＬ型施設配置とし、中心部に旅客ターミナルを配した。旅客ターミナルの前面を解放し市街地からのアプローチの際ターミナルが視認し易く寄りつき易い形になっている。

旅客ターミナルは階別および平面的に機能別に明確に分離しており、１階チケットロビー、２階待合ホール、３階展望ホールとも一望して内部が見渡せ、吹抜けや高い天井、落ち着いた内装、錦江湾と桜島の雄大な自然の展望ができる誰もが親しめ気軽に使える開放的な空間となっている。

外観は鹿児島港の景観をリードするものとして、船をモチーフとした個性的なデザインとし、ガラスカーテンウォール、メタリックな外壁材料を使用することにより近代的なイメージを表現した。

（松下兼昭／安井建築設計事務所）

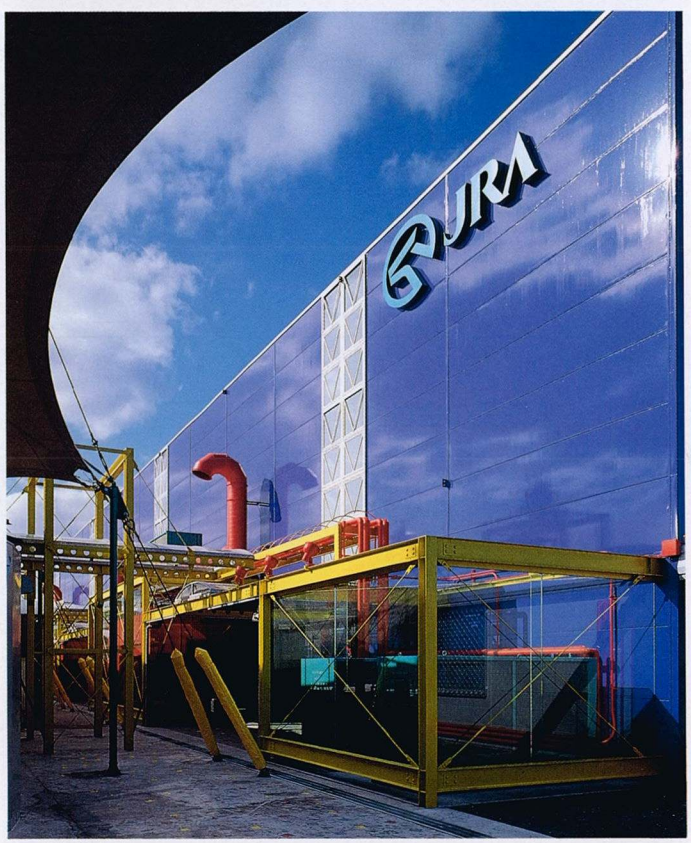


南面外観

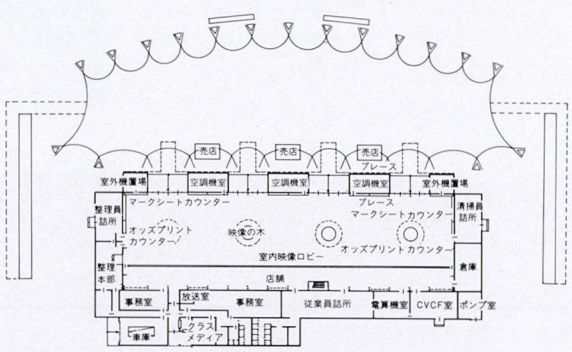
ウインズ八幡

設計　日本競馬施設(設計協力：東畑建築事務所)
監理　日本競馬施設(監理協力：東畑建築事務所)
施工　新日鐵・大成共同企業体

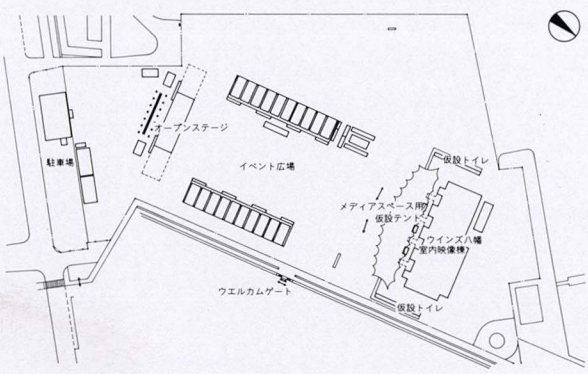
所在地　北九州市八幡東区枝光700-2
敷地面積　49,558.00㎡
建築面積　4,144.14㎡
延床面積　3,759.94㎡
構造規模　S、サスペンション膜構造
工　期　平成5年9月～平成5年12月
最寄駅　JR鹿児島本線枝光駅
撮　影　河野博之



南面外観見上げ



1階平面図　1：1200



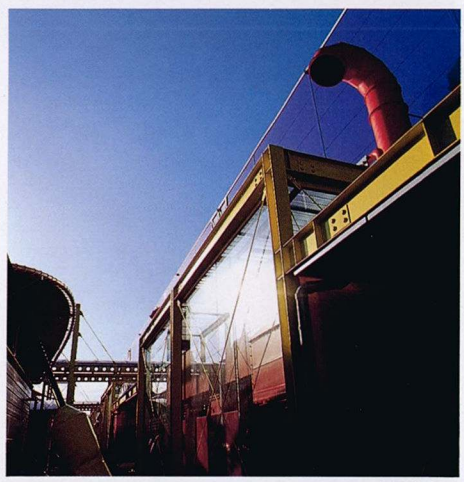
配置図　1：5000



映像の樹

この建物は、日本中央競馬会初めての仮設の場外勝馬投票券発売所(場外馬券売場)です。
スペースワールドの横にあるこの敷地は、洞海湾に面した広大なイベントスペースのなかにあり、高速道路や鉄道から良く見える場所に位置します。設計期間2ヶ月、工期3ヶ月という超短期工程の中で、仮設性の持つ建築とプレファブ工法の中で生まれたのが、このオウシャンブルーの場外である。短期工事と仮設であるため、投票券(馬券)を買うロビーと、業務部門のオフィスエリア、露出された設備ユニット、客がくつろげるテントの下のメディアスペース、それに両ウイングを構成するトイレユニットと、機能により明解に分割された、プレファブの部品を多用したプラン構成となっています。

初めてこの地をみたとき、新日鐵のプラントの持つ非日常性の持つ非建築的な美しさと迫力、スペースワールドの遊戯性のあるカラフルな空間から強い印象を受けました。このイメージをベースに、より印象的な建築にするために、いくつかの装置を使いながら構成しています。オウシャンブルーの壁面をバックにかろやかなラインを描くテンション構造のテント、テレビが嵌め込まれた映像の樹、天井を軽やかに舞うタープ、点在するストリートファニチュアー、露出された機械室とダクト、4色のみの原色の採用など、いくつかの手法を使いながらこのショウアップされた仮設性の持つ華やかな虚構の世界を造り上げており、本質的な場外の機能である興行場としての原点の姿を現しています。(池田哲郎／日本競馬施設)



南面見上げ



東面外観



テント見上げ



建物前景

尚玄山荘

監　　修　阿地武建築設計事務所
設計施工　竹中工務店九州支店

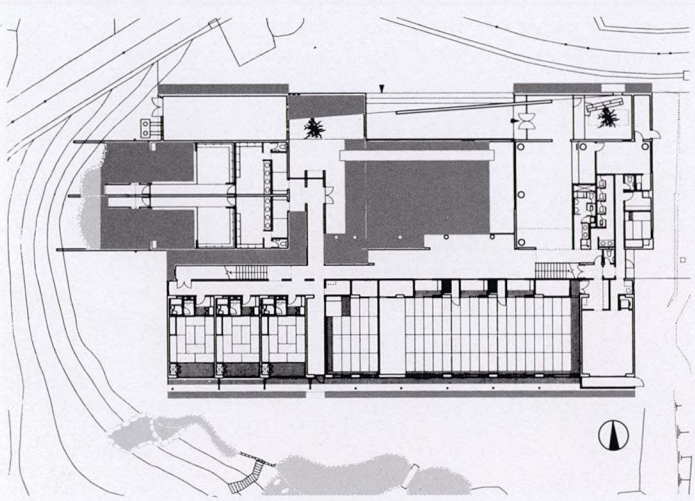
この建物は、熊本県玉名市の温泉街にある、木造温泉旅館の建て替えとして企画され、企業の保養所兼地域に開放された温泉施設として計画された。解体後に残された既存の緑・庭との関係に最大限の注意が払われ、設計は進められた。

施設構成は、既存の自然庭と応答する形で新設された人工庭を囲いながら、エントランス棟、浴室棟及び宿泊棟の3棟が配置されている。

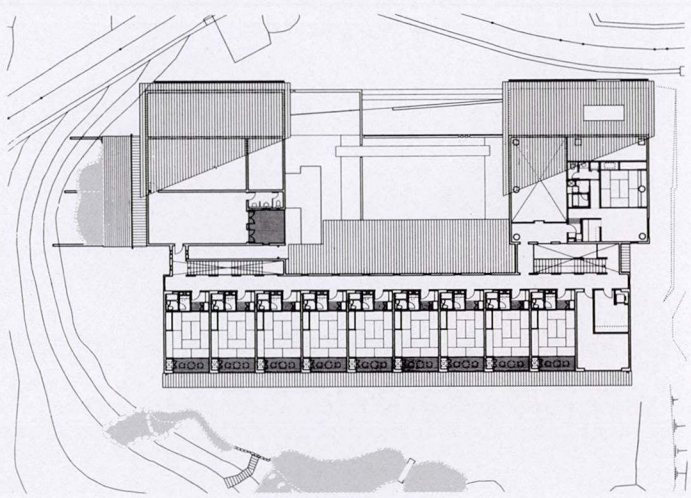
外観は、日本瓦の持つ大屋根の美しさと、分節されたマッスの構成により、シンプルで簡潔なデザインを追求している。

（大谷直己／竹中工務店）

所 在 地　熊本県玉名市河崎字高津原1番1-3
敷地面積　6,228.43㎡
建築面積　995.23㎡
延床面積　1,538.69㎡
構造規模　RC
工　　期　平成5年6月～平成5年12月
最 寄 駅　JR鹿児島本線玉名駅
撮　　影　岡本公二



1階平面図1：750



2階平面図1：750



中庭夜景



アプローチ見返し



中庭夜景見返し



中庭ブリッジより浴室棟を見る



建物正面全景

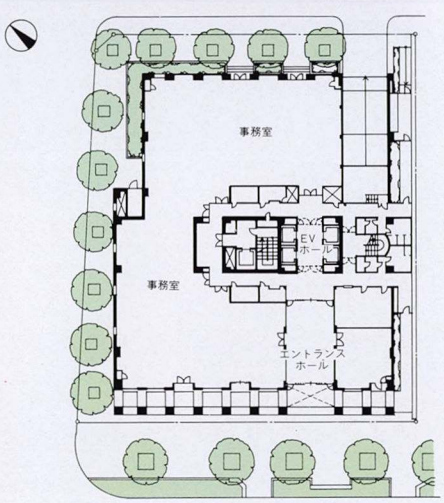


大博通りより

紙与博多ビル

設計監理　日建設計
施　　工　鹿島

所 在 地　福岡市博多区博多駅前1-11-18
敷地面積　2,111.78㎡
建築面積　1,568.06㎡
延床面積　18,328.96㎡
構造面積　SRC、S、BIF、11F、P1
工　　期　平成3年10月～平成5年8月
最 寄 駅　JR博多駅
撮　　影　岡本公二



1階平面図　1:1000



見上げ

敷地は、博多のメインストリートである大博通りに面し、博多駅から徒歩で２～３分というオフィスビルの立地としては、理想的な場所である。

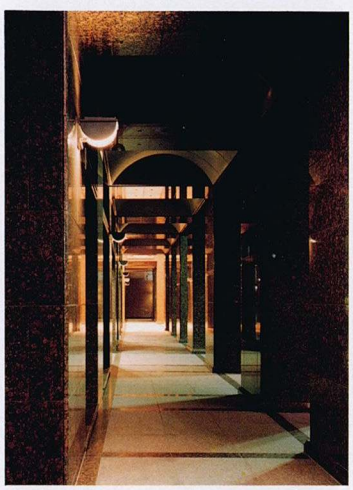
大博通り沿い及び博多駅周辺は、福岡空港からの航空制限のため、建物の高さがそろった連続感のある街並みを形成している。

都市景観上の配慮から、壁面線をそろえ、周辺街並の高さを合わせる計画とし、大博通りに面した１階部分は、歩行者用のピロティを設けた。外観は貸事務所でありながらメモリアル的な建物とする基本的な考え方でのぞみ、それにふさわしい落ち着きと、飽きのこないデザインを目指し、仕上材も質感のあるタイル及び花崗石を採用した。事務所・基準階の有効面積は、1,140㎡あり、一体利用、又は分割利用（最大４分割）も可能である。吹抜のあるエントランスホール、自然採光の入る便所、間接照明を主体として雰囲気づくりを行った廊下、エレベーターホールなど、パブリック部分にも、充分な配慮を行った、メモリアルにふさわしい建物となりえたと、考えている。

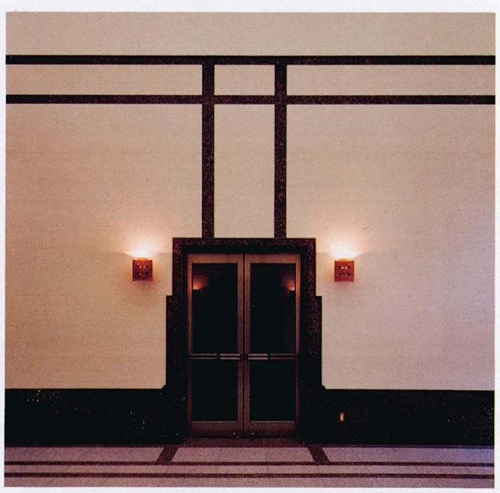
（藪野宜美／日建設計）



エントランスホール



大博通りに面したピロティ



エントランスホール



外観南西面

松下電器産業 飯塚研究所

設計監理　安井建築設計事務所
施　　工　清水建設九州支店



南面見上げ

西日本の総合開発拠点であると同時に、アジアを中心とした環太平洋のソフトウエア開発拠点として位置づけられた当研究所は、九州工業大学に隣接し市内を一望できる高台にその敷地がある。外観はこの立地条件を生かして＜情報維新＞をコンセプトにもつ研究所の情報発進基地としてのシンボリックなランドマークとなることをねらっている。

高層部は、反射ガラスの直線的なカーテンウォール主体で先進的イメージを表現、低層部は大型の磁器タイルと柔らかい曲線の外壁構成とし、豊かな情報コミュニケーションとアメニティーを醸成するにふさわしい親しみを感じさせるものとした。

内部構成はフレキシビリティに富むプライベートなソフト開発空間と豊かな発想を生み出す快適なパブリック空間を、厳密なセキュリティを保持しながら、使い易く統合することをテーマに組み立てた。

特に２層単位で設けたアトリウム空間にあるリフレッシュコーナーは各オフィスエリアに隣接し、研究者間のコミュニケーションがスムーズに図れ、また市内が一望に見渡せる場所に設け、快適で自由闊達な創造の場にふさわしい空間を提供することをめざした。　（大村鐵太郎／安井建築設計事務所）



エントランスホール



2階プレゼンテーションホール

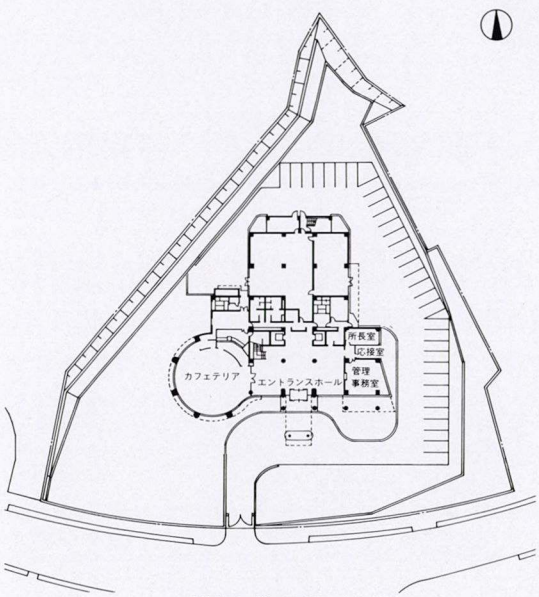


2階宿泊室



リフレッシュコーナー吹抜け

所在地　福岡県飯塚市大字川津字杉谷693
敷地面積　5,920.31㎡
建築面積　1,249.79㎡
延床面積　4,706.52㎡
構造規模　RC一部S、6F
工　　期　平成3年11月～平成5年3月
最寄駅　JR筑豊本線飯塚駅
撮　　影　SS九州



配置図・1階平面図　1：1500



1階カフェテリア

宮崎観光ホテル新館

設計監理　竹中工務店九州支店
施　　工　竹中工務店・東急建設・
　　戸田建設共同企業体



外観

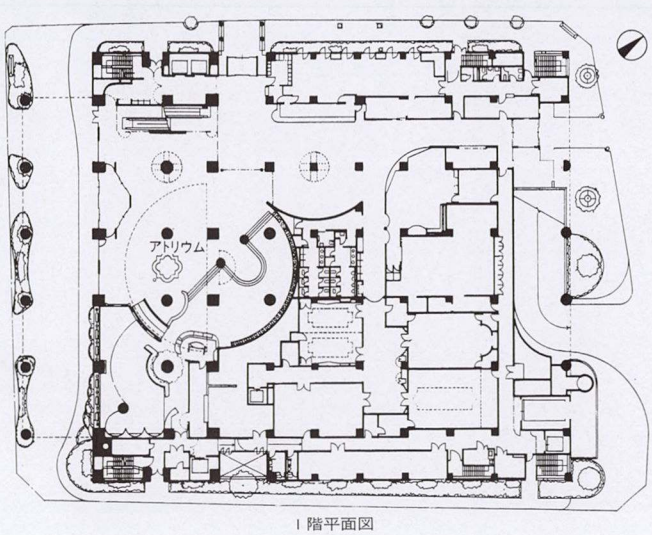
宮崎市の大淀河畔に建つ老舗ホテルが、コンベンション機能をもつ大宴会場の増設と合わせて、イメージの一新を企図し、完成したのがこの宮崎観光ホテル新館である。

地中海のように温暖な宮崎で、シティホテルのサービスをもちながら、ゆったりと時を過ごせるリゾート性豊かなホテルをつくることができ話題となっている。

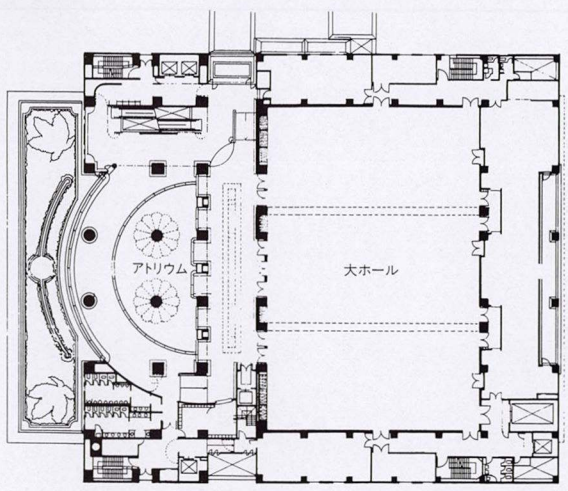
太陽と緑の国・宮崎には花があふれている。

このホテルの敷地内にもゼラニウムの真っ赤な花や、トロピカルな雰囲気を醸し出すブーゲンビリアが咲き乱れ、青磁色の外壁が大淀川に映える。また、インテリアでも、花をテーマにした造形やファブリックのデザインを施し、四季を通じて花のあふれるホテルとした。幻想的なパティオをイメージしたアトリウムロビーが別世界への導入を演出している。（青山　昭／竹中工務店）

所 在 地　宮崎市松山１丁目62他
敷地面積　5,249㎡
建築面積　3,975㎡
延床面積　23,249㎡
構造規模　SRC、ＢＩＦ、13Ｆ
工　　期　平成３年５月～平成５年３月
最 寄 駅　JR日豊本線宮崎駅
撮　　影　イトープロフォート（伊東　浩）



１階平面図



３階平面図



南欧的イメージをもったアトリウムロビー

都市をよむキーワードとしての建築「インスタレーション」

萩島　哲
（九州大学工学部教授）

はじめに

私達が九州の建築を考える時、都市をよむキーワードとしての建築を想定することができる。つまり私達は、単体としての建築を考えるよりも、都市の中に存在する建築の意味を考えることが、九州の建築をよく理解できるのである。

保守的な体質をもつと言われている九州は、しかしながらアジアに近いこともあって、古くから外国のさまざまな影響を受け入れてきた。例えば、古くは眼鏡橋等の石造アーチ橋、建築に限定して言えば長崎市にある教会建築や沖縄の石造建築がそうである。代表的な作品には、平戸の紐差カトリック教会堂、長崎の崇福寺、グラバー邸等がある。さらに近代においては、辰野金吾のアールヌーボスタイルの旧松本邸等の建築作品があげられる。それらのデザインは、周辺環境とは異質であるが、外国の文化を受け入れてきた。

これらの事情は、現在も変わっていない。近年の海外建築家の九州への参入による建築のデザインがそうであるし、また在京の有名建築家による九州での仕事にも現れている。またそれに触発されて地元の若手建築家が協力して設計する自治体のデザインにも同じことが言える。

そこには、九州人には都市の中に気軽にかつ大胆にこれら「異質の新しいデザイン」を取り入れる図太さ、気質の先進性がある。多分に、それを取り入れたとしても九州の自然の豊かさやオリジナルの基本は変化しないという自信があるのだと思う。何故なら、先述したように、過去から外国の文化を受け入れて、今日まで定着させてきた経験からそう言えるのである。

これらを考慮すると、私達は、九州の建築の主要なデザインが、実は周辺環境の市街地や田園部の中に歴史の脈絡とは関係なく忽然と発生してきたもの、あるいは導入してきたものであることを理解する。すなわち、都市の中に、常にきわだって新しく異質なものを作者の意図とは別に気軽に導入してきたことから、九州の都市をよむキーワードとしての建築は、「インスタレーション」という言葉で表現できるように思う。インスタレーションの本来の意味は、ある環境の中に「装備すること」「取り付けること」「導入すること」「仕掛けること」である。一般に、建築を作ることは、従来の環境場に新規の建築空間を導入すること、つまりインスタレーションである。そして周辺の環境場に働きかけ、周辺の環境をすこしづつ変化させながら、相互作用をおこしながら、周辺となじんでいき、新しい環境を作りだしていく。そしていつのまにか導入された建築自らが環境の一部になっていき、同化していくのである。つまり、本来の導入された建築そのものを深刻に問題にせず、それを環境の一部に同化、呑み込んでそして新たにつくられていく都市空間に、九州の特質があるのだと思う。結果として、「インスタレーション」が九州の建築をよむキーワードとして表現できるのである。

しかしながら「インスタレーション」として導入される空間は、具体的にはいくつかの側面をもち、「仮設」「仮想」「遊戯」「異化」「虚構」「図と地」「両義」の７つの側面の空間の貌が挙げられる。

「仮設」「仮想」「遊戯」の空間は、仕掛けられた空間それ自身が絶えず変化するタイプであり、「自然発生的」に無名のデザイナーによって付加されて作りだされるインスタレーション空間である。これは、一時的に都市空間を豊かにする装置といえる。

「異化」「虚構」の空間は、導入された空間が周辺の環境にあらかじめはたらきかける「意図性」を有するインスタレーション空間である。そこでは、周辺の環境と緊張関係を保ちながらも、相互に併存して新しい都市空間を形成していくのである。

「図と地」「両義」の空間は、導入された空間が実は量的に大きくなる時、環境そのものに逆転し、従って、異質でなくなる可能性をもつ空間である。

このキーワードに対応する具体の都市空間はどのようなものであろうか。その事例を以下に示そう。

都市をよむキーワード

●仮設（自然発生的）

(1)仮設的空間の貌

都市空間の中に、日常空間の中に仮に臨時にとりつける仮設的な建築物である。これは季節に応じて、あるいは時間的に、瞬間的に日常空間を豊かなものにする。

代表的な事例は、福岡市の博多のラーメン屋台空間、あるいは夏の代表的な祭りである福岡市の山笠を支える空間である。これらは、高層ビルに囲まれた無味乾燥なしかも夜間人口の減少著しい人影少ない業務地区の中に、これを借景に成立する。一時的な装置として屋台、照明、笹、飾り山、のぼり、通りの飾り、締め込みの姿の人そして仮設の観客用のスタンドが設置され、それらの装置は、皮相的なライトアップによるのでなく歴史の脈絡の中から人間味豊かな生活空間へと変貌させる。

(2)　仮想的空間の貌

郊外の田園部に立地し、その表情は明らかに隣接の空間と遊離している。これは、自動車交通を中心とするくるま社会が郊外沿道沿いに自然発生的に創りだしたまちなみであり、極めて異様な容貌を

呈する１つの都市の貌である。その空間のコンセプトは、定かでなく、入替え可能なカセットであり、仮想的である。

代表的事例として取り上げた福岡県の原鶴温泉の都市空間は、筑後川の農村の中に突如出現し、仮想の世界を表出する。これに類する市街地の例は、郊外部において枚挙にいとまがない。

⑶遊戯的空間の貌

市街地の中に、ミニ東京の空間、ファッション的なデザインの都市空間が出現し、そこでは若者文化の軽やかさや猥雑さが発揮され、無名の若者が独自の夜の空間を形作らせている。それはまさに新しいタイプの商業空間であり、具体的には遊戯のための機能を有し、デザインもまた遊戯的であり、遊戯空間と呼ぶに相応しい。

代表的な事例として挙げた福岡市の親不孝通りは、大人達が自然発生的に作り上げた夜の慰楽空間の中州に対して、若者達が作り上げた夜の遊戯空間と言えよう。その空間は大人の慰楽空間とは異なり、メイン通りかそれに面するサブ通りに限定された空間であり、面的には展開しない空間である。何故なら、若者はあくまで表の空間を指向するからである。他に熊本市のオークス通り、シャワー通りがある。

●対立と融合（意図的）

⑷異化的空間の貌

歴史・文化や周辺環境の文脈に照らして、明らかに対照的な空間を持ち込む場合がある。

周辺と同じ機能でありながらも、全く異なった表現を有する空間が導入されるのである。そこでは、表情の異質さに比べて、機能レベルでは、周辺のバランスをあらかじめ考慮しているのが前提となる。

代表的な事例は、熊本県八代市立博物館、大分県立図書館周辺、それに福岡市の春吉地区のイルパラッツォ、である。前者は、文化地区に異質なデザインの公共建築物が、後者は、旅館地区に異質のデザインのホテルが建設された。２つの異質なデザインが周辺とどのように同化していくかは、今後の課題である。

⑸虚構的空間の貌

虚構とは文字通りフィクションの世界であり、虚構的空間とは、現実の都市空間にはありようのないタイムスリップした世界の空間である。それは、機能、形態とも周辺とのバランスが前提とされず、徹底して対立的にすら見える。従って九州のもつ文化にてらすと明かに虚構的空間であるが、しかし虚構を徹底的に追求するなかで、それが現実社会に変貌する。そのためには、規模の大きさと環境を呑み込むほどのデザイン力の強さが必要である。代表的事例は、「健康」を基本コンセプトにすえた佐世保の埋立地に建設されているテーマパークのハウステンボス、それに福岡ドームである。また佐賀県有田町のポーセリングや沖縄県与論島の「白」のカラーによるまちづくりがあげられる。

●逆転の構図

⑹図と地的空間の貌

地と図の逆転を意図した空間の導入である。当初は、自然の山々が「地」で市街地が「図」、次いで、「地」が市街地となり、「図」が数少ない近代建築となる。それが、主要な公共建築物の設計に若手の建築家群の登用により、いつのまにかかれらの作品群の建築が、その町の「地」となっている例である。「地」と「図」が時間の経緯とともに変化していく構図を示す。

事例としては、熊本県小国町の木造建築を設計している若手のグループの作品があげられる。彼らのデザインは、町で生産される木造という在来の材料を用いるものであるが、新しい木構造のシステムを開発し、その新しい木構造によってつくられたデザインが、町のデザインの基調となり「地」に変貌している。また宮崎県の飫肥町の和風建築「図」と伝統建築「地」の関係があげられる。

⑺両義的空間の貌

周辺環境と両立していくことをあらかじめ意図して対照的な機能を導入した事例である。都市の貌としての空間も、従ってネガティブな旧工場群と新たに導入される新市街地のせめぎあう空間であり、その共生が前提としてデザインされる。

工業中心のもともとネガティブな表情の都市が、新たな産業の展開を模索する中で、第３次産業への構造転換を図るために、建物の材質・表情が更に超近代的なメカニックな表情でデザインされる。今後とも従来の工業空間の貌と共生し、あるいはそれにとって変わる新しい都市空間へ逆転していく可能性をもつ空間である。代表的な事例は、福岡県北九州市の国際会議場と周辺の港湾、スペースワールドと周辺の工場群の対比である。

九州のパトロネージュ

九州におけるこれらのインスタレーションの空間は、その背後には実現に力を貸してくれた偉大なる後援者が必ず存在しており、それによって成立しているのである。後援者は、斬新な企画を立案し、それを実行する自治体の首長や企業家達であり、結果として若手の自由なデザインの指向と一致し、その良き理解者である。

その後援者の代表的な事例としてここで取り上げるのは、北九州市の３つの公共建築の設計を磯崎氏に依頼した谷　伍平前北九州市長、福岡シテイ銀行の本店、支店の設計を磯崎氏に依頼した頭取の四島　司氏である。磯崎氏は、これらの作品を通して自らのオリジナルを実現し、世界的評価を勝ちえたといっても過言ではない。

磯崎氏を取り巻くこれら２人の後援者が都市の中のインスタレーションにいかなる役割を果たしてきたか、をヒアリングを通して後ほど紹介することにする。ヒアリングの結果、２人の後援者の建築家にたいする共通した考えは、利用者のために建築空間を考えること、利用者の要求に答える柔軟な頭脳をもつ建築家が重要であることを指摘している。

谷前市長が依頼した北九州市の公共建築物は、北九州市立美術館、西日本総合展示場、北九州市立図書館・博物館であり、四島頭取が依頼した銀行建築は福岡シティ銀行本店、同大分支店等である。

□都市をよむ ―――――― 福岡市

「仮　設」

リヤカーをベースに装置としての屋台は実に合理的に作られている。色とりどりの暖簾や提灯を背にここ博多の街においては、空間を生け捕りにした現われ方をする。すなわち借景的な屋台として。

この場合、背景は高層ビルであり、有名建築家になる建築群である。仮設であることの非日常・脱日常的な空間は、一過性であればあるほど、より象徴性を強め、本来のもつ猥雑さとあいまって都市の空間をいきいきさせる。



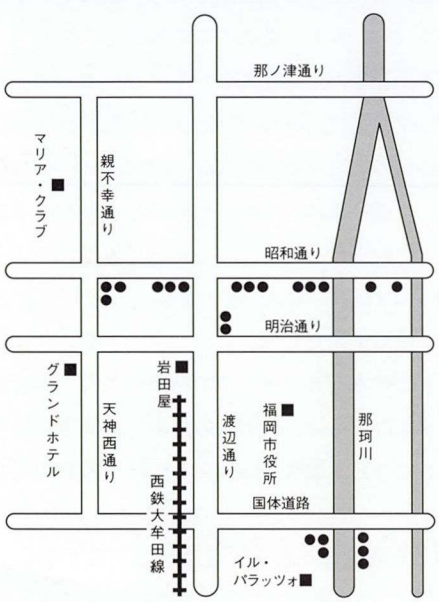
▲
今や若者のメッカとして有名な屋台である。レトロブームに便乗した感もあるが、屋台の灯りが建物をライトアップしており、人間味あふれる豊饒な空間をかもし出している
（旧日本生命館：設計 辰野金吾　資料提供 福岡市広報室）



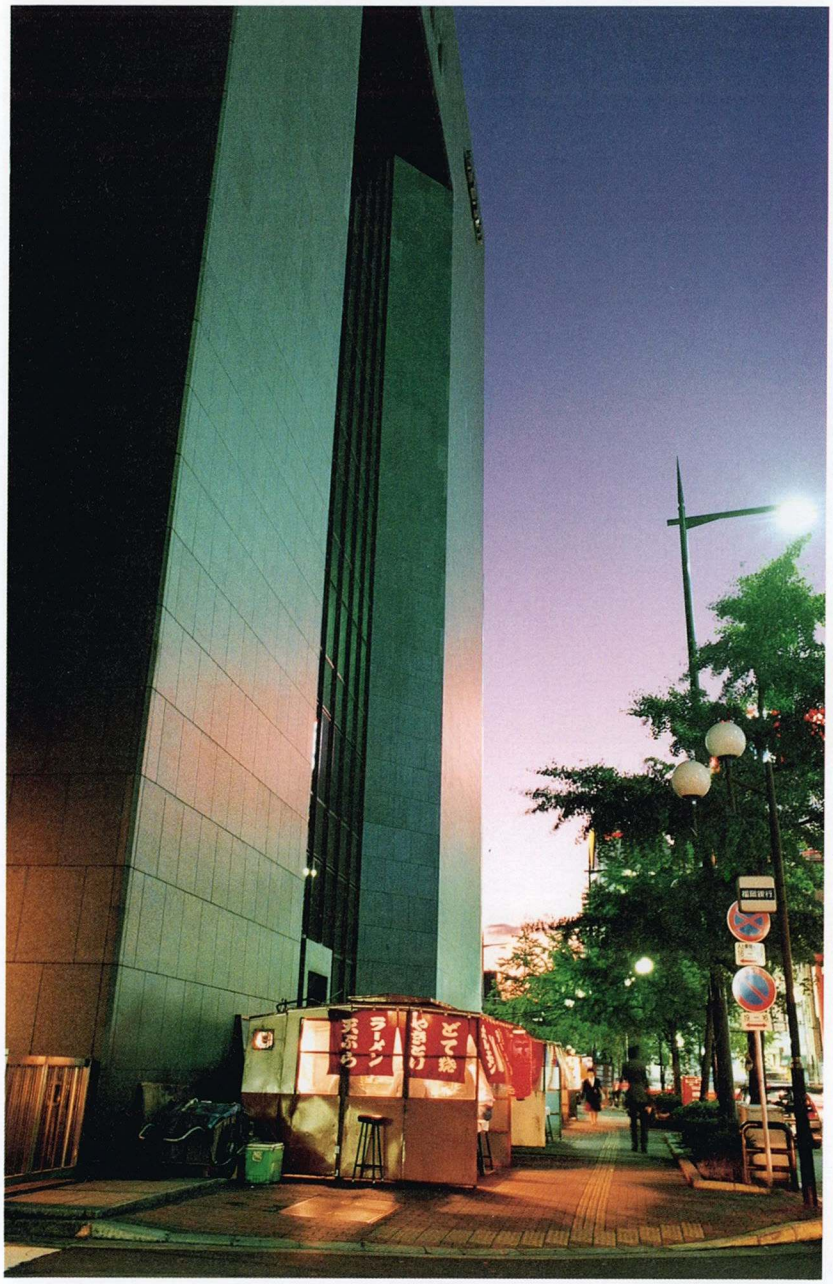
◀道路を挟み、空間的には分断されているが、写真の手前側は親不幸通りの起点となっており、アイストップ的な役割を果たしている。また、不夜城への道しるべとも言える　（出光興産九州支店：設計　村野藤吾）

叙情的とも言える屋台、これらは多くの人にとってファッションでありナウイものなのである
▼





天神・中洲屋台マップ（●屋台群）



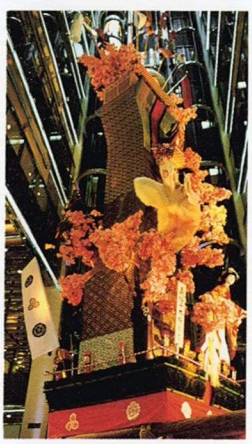
▲
あたかも高層ビルに寄生するかの様に展開する屋台の群れ、昼と夜、主と従は交替する
非合法の合法化により、都市の空間は生まれかわる　(福岡銀行：設計　黒川紀章)







▲
無駄なくコンパクトに作られた屋台の内部と外部。屋根には樋や換気扇まで
装備されたものもあり、また、フロンテージデザインのあともうかがえる





右の写真は、博多の夏祭り祇園山笠で、
静なる飾り山と動なる山(神輿)があり、
奉納山を除き、ひと夏限りのものである
(資料提供　福岡市広報室)

写真・文　村上義孝(安井建築設計事務所九州事務所)

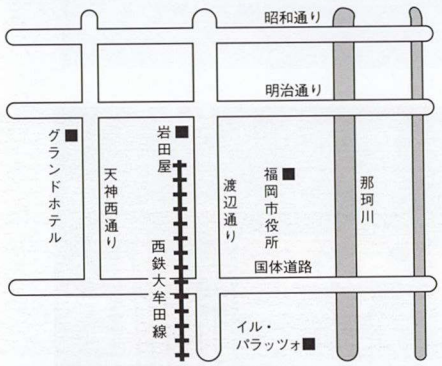
□都市をよむ——福岡市・大分市・八代市

「異　化」

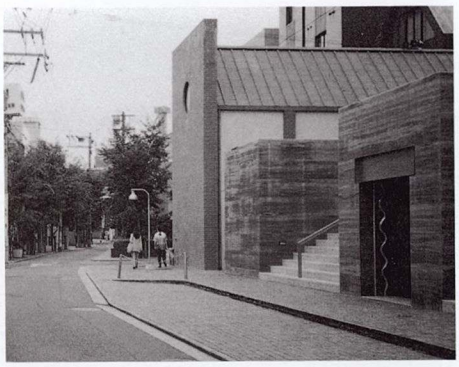
異化とは、もともとロシアフォルマリズムのシクロフスキーが提示した文学表現の手法であり、言葉を周囲のコンテキストから切り離して明視する手法である。異化は視覚現象としての都市、建築にも同様に適用できる。見慣れた風景の中にまったくコンテキストの異なる建築を持ち込むことによって、それまでとは違う新鮮な風景が浮かび上がってくる。ここでは建築家の都市(コンテキスト)を明視する能力と芸術的な表現力が問われることになる。



▲
ヴェネツィア古典建築のイメージは、川岸という場所性を通して転写され、博多の伝統的な遊廊街を異化することに成功した
(イル・パラッツオ：設計　アルド・ロッシ)



異化


▶

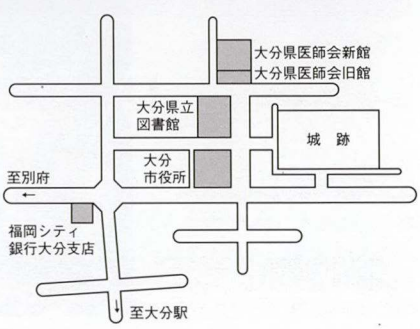




▲
地方の近世城下町の一角が、空中都市、ギリシャ神殿、パンテオンなど西欧的な建築的メタファーによって異化されている。隣地に建った市役所は県立図書館側に広場があり、空間的にもメタファーとしても連続性を感じさせる　(左上)
(大分県立図書館、大分県医師会館：設計　磯崎　新)



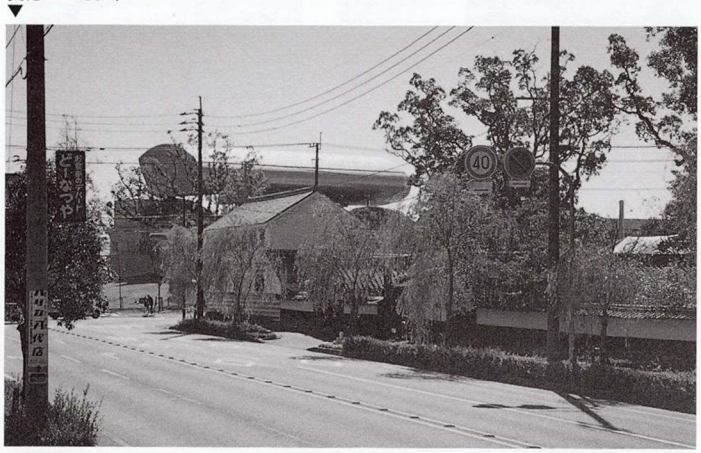
◀異化された空間も年月を経て定着し、場所を示すランドマークとなっている

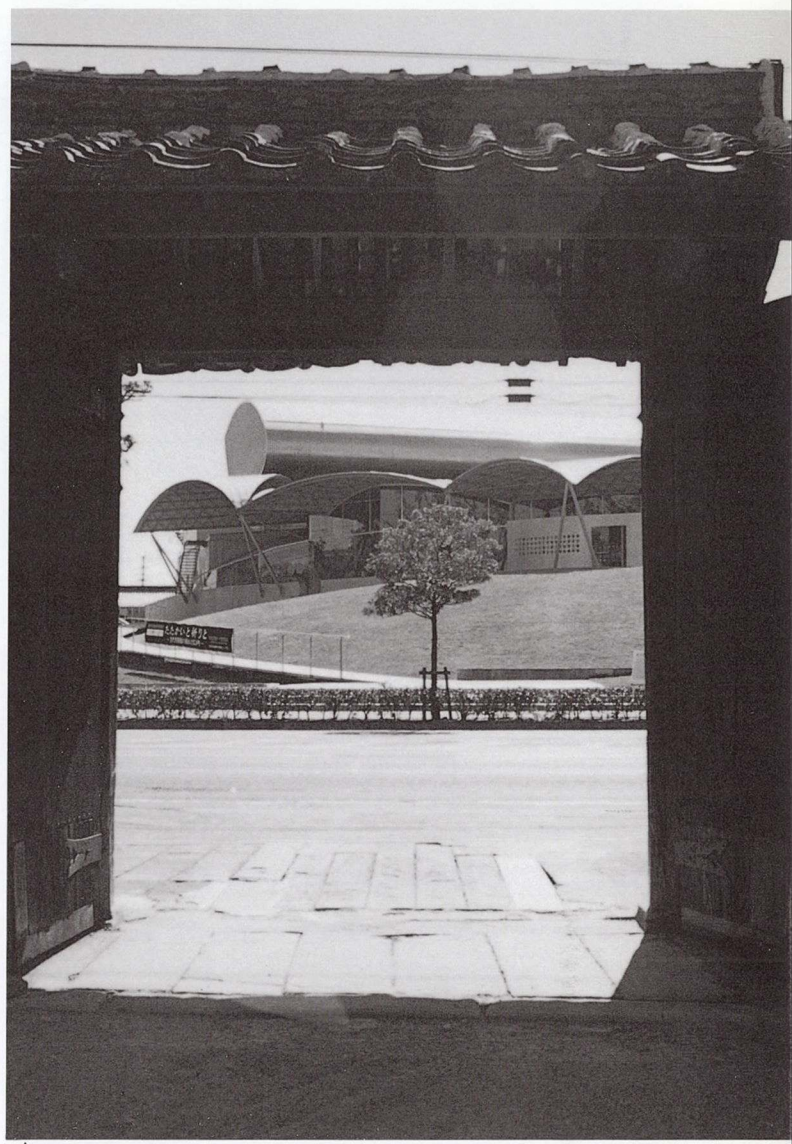




▲
保全された樹木と人工的につくられた緑の丘が、周辺のコンテキストへのクッションとなっている

近世の町並みの向こうに浮かぶポストモダンの博物館は、一つの場所に併存する歴史的な時間の対比による異化といえよう
▼





▲
松浜軒（江戸時代の遺構）の門から博物館を望むと都市のなかに埋もれた近世と現代の二つの歴史的時間が浮きだしてくる
（八代市立博物館：設計　伊東豊雄）

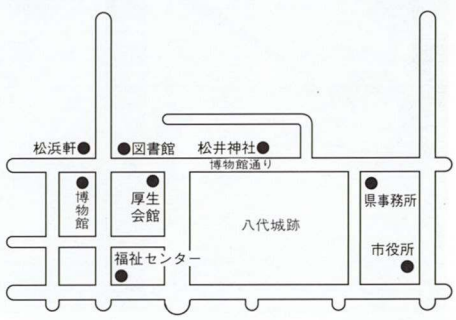
博物館の建設をきっかけに駅からの通りは、街路灯や歩道の整備が進み、博物館通りと呼ばれるようになった。通りの整備には博物館の設計者伊東豊雄氏が協力している
歩道には等身大の彫刻が何気なく置かれ、八代ゆかりの著名人の手形もみられる
▼











写真・文　黒瀬重幸（八代工業高等専門学校）





▲ マリアクラブ前のポケットパーク、夜になると若者たちの溜り場となる

◀ 昭和通りから長浜通りまで抜ける400m足らずの道筋のゲート部分、予備校の看板が目立つ

□都市をよむ————福岡市・熊本市

「遊戯」

繁華街ではなかった市街地の中に、ひとつの通りを軸にして若者達の遊空間が忽然と現れ、自然発生的に増殖していく。街の歴史的文脈とは拘りなく発生し、絶えず異質なものが挿入され、投げ込まれる仕掛けとしての都市空間である。それは大人の慰楽空間とは異なって、ファッショナブルであり常に変化するテンポラリーな舞台(ステージ)としての遊戯的な空間である。
九州では福岡の親不孝通りと熊本のシャワー通りなどに、その典型をみることができる。



▲ 親不孝通りの中心部にあるインフォメーション・センター、飲食店やカラオケビル、ファッションビルの雑居する街の案内役



▲ マリアストリート突当りの花関酒造のビル、新旧とのとりあわせが面白い

親不孝通り (福岡市中央区天神三丁目・舞鶴一丁目)
昔は少年鑑別所があったが、近年は大手予備校が2つもあって若者達が通うため、およそ20年程前この名がついたという。週末ともなると深夜まで若者で溢れる眠らない街となる。

遊戯

バー・カラオケのあるマジックスクエアビル、ガウディもどきのデザインで異様な雰囲気を醸し出す ▶



ディスコ、イマジン前のウォールペインティング(N.Y.のアーティスト、フランギャスキンの作)
▼



ウォールペイント的なデザインで異彩を放つバータイルの壁と木のフレームの構成が妙
▼



シャワー通り
(熊本市下通・新市街)

旧来の商店街の延長線上に若者達の街が出来た。アーケード街の大きなスケールの通りに対し、ヒューマンスケールのファッションストリートが展開され、ファッション業界のパイロット的店舗群が建ち並ぶ。



▲そぞろ歩きを誘うような蛇行した道。ニコレットモールの構成とボン・エルフの手法を組み合わせた通りが200メートル程続く。アーケード街にない戸外のアメニティを感じさせる



▲下通りと新市街の2つのアーケード街の途切れる所からシャワー通りが始まる

▼ブティック街のファッションビル、南国風の明るいデザインと植栽が特徴的

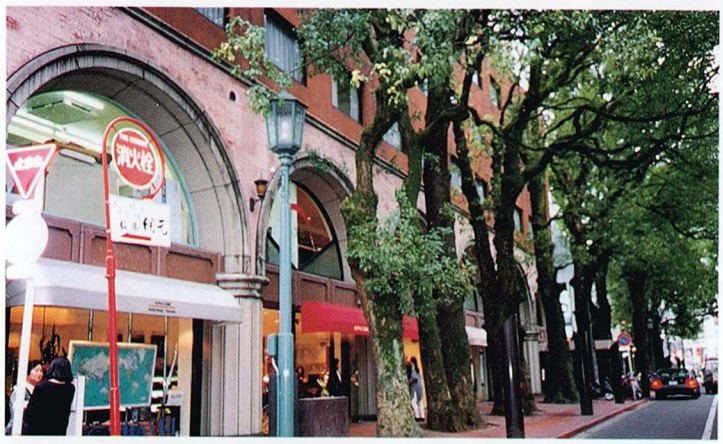


パサージュ形式の店が並ぶ、奥にはパティオ(中庭)がある
▼



▼ファッションビル前のポケットパーク、シンボルツリーが空間を引き締めている





◀洒落たブティックをもつホテルと、大木の楠の組み合わせが格調高い雰囲気を出している



パティオ的空間兼通り抜けの構成の手法が面白いが憩いのスペースとして中途半端か ▶

オークス通り近辺
(熊本市上通町)

かつての女学校の跡地に残った大きな楠並木沿い等に瀟洒なブティッ街ができる。

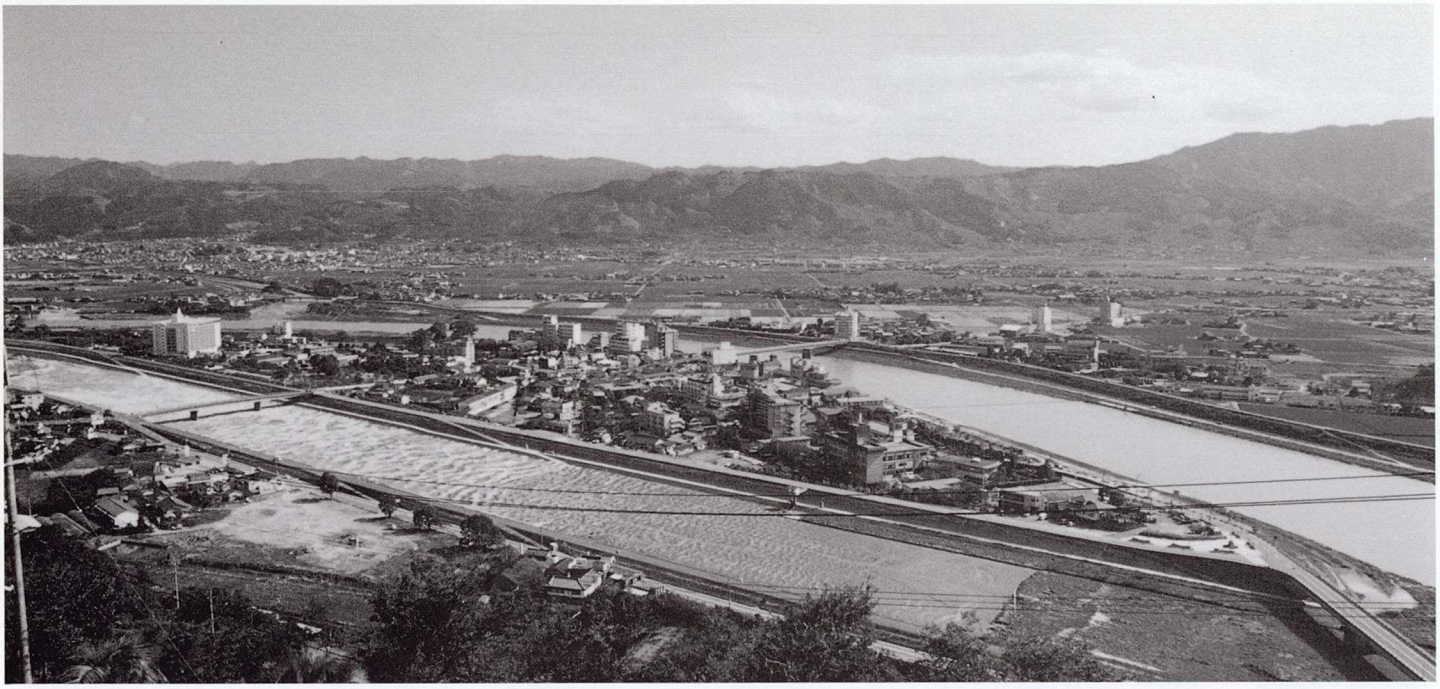


◀ファッションビル・VIALEの通り抜け空間、オークス通りと上通りのアーケード街を結ぶ



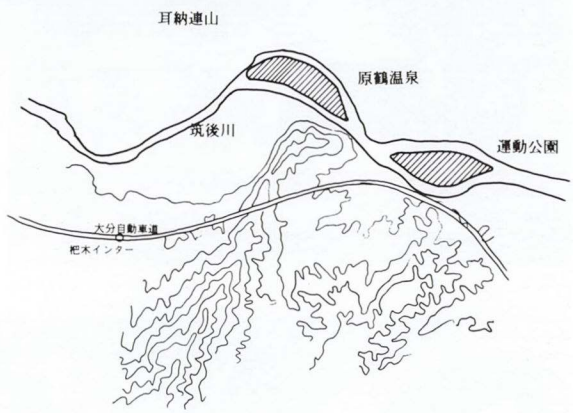
ファッションビル・PAVILLIONの一画▶のポケットパーク
路線型アーケード街に奥行きと拡がりを出した成功例

写真・文　森　　薫(日建設計九州支所)



□都市をよむ— 福岡県杷木町・春日市・筑後市

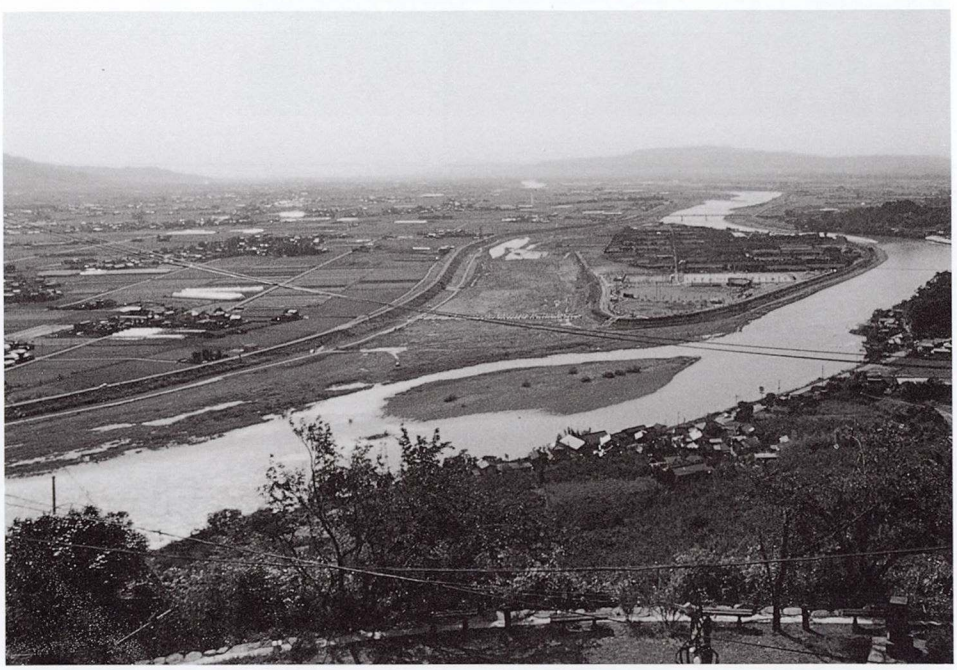
「仮　想」

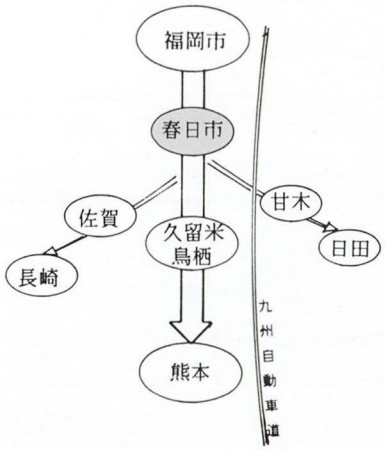


仮想的空間は、くるま社会の中で自然の風景に突如姿を表わす。そして日常の小さな空間を母体に、つぎつぎに自然発生的に成長する空間は、風景の中に根づいていく。
しかしながらカセットのように置き換え可能である。成長したカセットは文脈を再構築し、別の風景の中に想像する事もできる。

原鶴温泉　福岡県朝倉郡杷木町原鶴
卑弥呼の里・古代の地
原鶴温泉は、筑後川と耳納連山を背景に広がる筑後平野を風景に、三角州を利用した温泉街である。カセットは成熟し、歓楽街として、生活の場として根づいている。下の写真は隣の運動公園となっている三角州。原鶴温泉というカセットを隣の三角州に移しても原鶴温泉を想像する事ができる







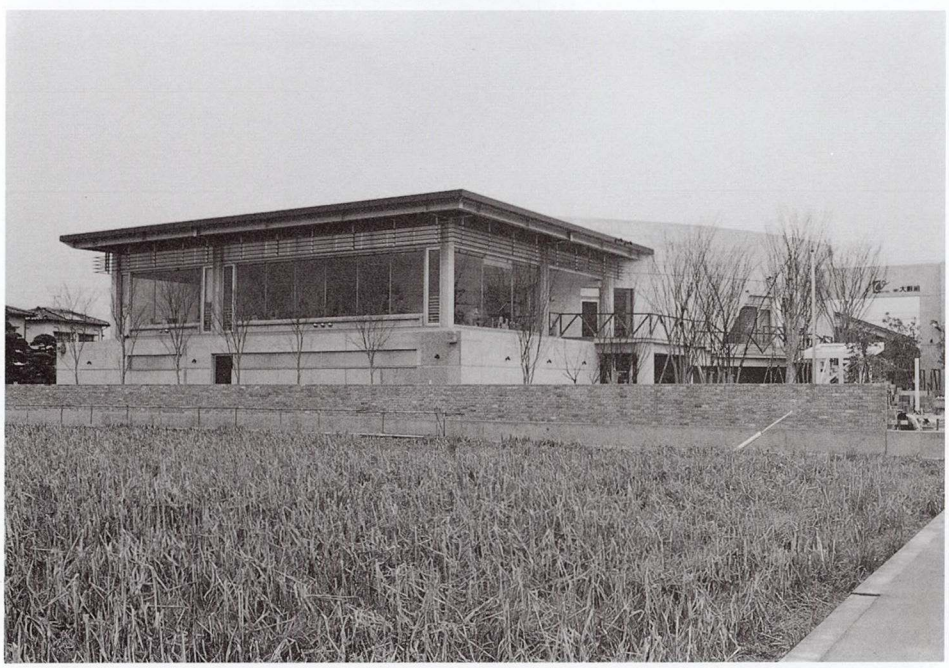


春日市県道31号線バイパス沿い　▲
福岡市に隣接するベッドタウン春日市。ここには県道31号線という福岡市への入口がある。最近、近くは久留米・鳥栖・佐賀、遠くは、熊本・長崎からの交通が多い
田園の中に出現した商業カセットは、国道沿いのどこにでもある風景を創りだしている
車で2分程度で通り過ぎていくこのカセットは、成長中の活気と不安定さで動いている





仮想



◀O. Y100ビル（福岡県筑後市）
田園風景の中に出現したコンクリートと鉄とガラスの空間
近くにはショッピングセンター、ドラッグストアー等あり、くるま社会の仮想的空間の核として今後の成長楽しみな初期のカセット　（設計：アトリエＧＥＮ）

写真・文　江口正利(アトリエGEN)

□都市をよむ―佐世保市・佐賀県有田町
鹿児島県与論町・福岡市

「虚　構」



一つの文化の中に異なった文化が、時間、空間を破って入ってくる。
二つの文化は対立し、バランスをくずしながら虚構的空間を創りだす。
強烈なデザインによる虚構的空間は我々の中に突如組み込まれる。我々は戸惑いと不安の中で「虚構」の世界をのぞいてみる。
そこには、タイムスリップした巨大な文化を見ることになる。

ハウステンボス(上・下・右)

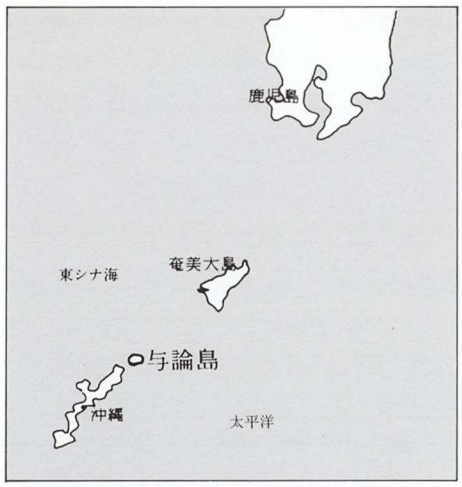


JR九州のパンフレットを見ると「中世のオランダへショートトリップ」「遊ぶ」「憧れ」というコピーが目に入る。大村湾の箱庭のように中世オランダをコンセプトに出現した「ハウステンボス」は、ネーデルランド(低地)という文化、風土によって創られた形を挿入している。そこには山があり、日本人がいる、徹底して虚構をつくると対比の中に文化の本質が見えてくる





◀ 有田ポーセリンパーク
(佐賀県西松浦郡有田町)
陶器の町、有田の山奥に出現した、「ツヴィンザー城宮殿」周りの山・林をも含めバロック的空間に満ちている







与論中学校体育館

与論島（鹿児島県大島郡与論町）
与論島は鹿児島最南端に位置する周囲21.9km、人口7,000人強の南の島である。
「東洋の海に浮かぶ1個の真珠」として年間約10万人の観光客に夢を与えている。町をあげて姉妹都市であるエーゲ海に浮かぶミコノスの〝白〟を与論の島へ導入している。茶花地区待合所、与論中体育館はギリシャ風神殿と白の導入により遊び性を楽しませてくれる　（写真提供：与論町）

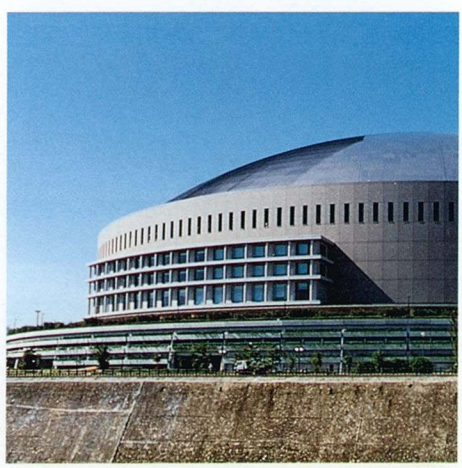


与論港茶花地区待合所（設計：鹿児島県大島支所）

虚構



福岡ドーム（福岡市中央区百道）
古代ローマのコロセウムをコンセプトとした福岡ドームは福岡の町へ突如挿入された。時・空をタイムスリップしてきたこの巨大空間は、時空の中で222mの屋根を動かす事で新たな夢を創り出した
（設計：竹中工務店・前田建設工業JV）



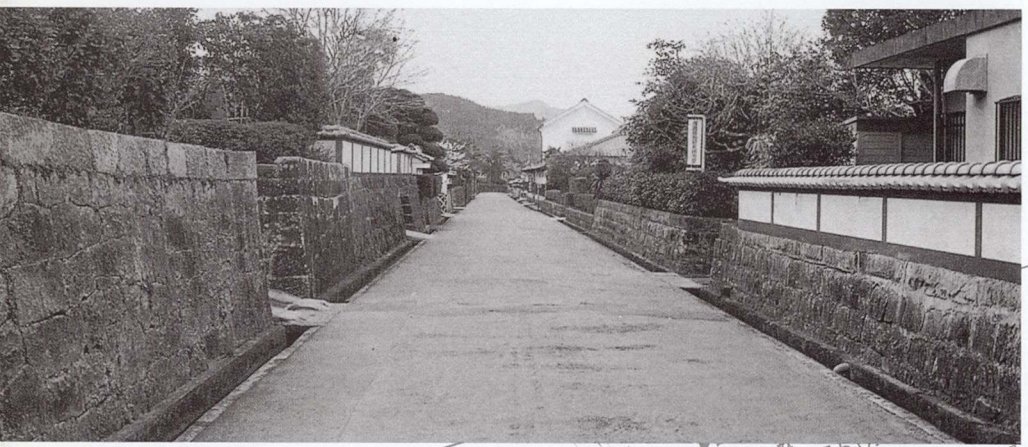
写真・文　江口正利(アトリエGEN)

□都市をよむ――――日南市飫肥
熊本県小国町

「図と地」

元々あった統一的なもの「地」の上に新たなもの「図」が持ち込まれ、次の統一的なもの「地」が企図される時、過度的に「図と地」が発生する。それは都市のカオスよりも集落のコスモスにおいて顕著にみることができる。

「図と地」は、コミュニティの共有する価値観のもとに行われる空間の更新プロセスといってもいい。都市にではなく集落に存在する「図と地」こそがインスタレーションの最も好ましい類型であるかもしれない。



旧城下町を横切る国道沿いの再開発地区「図」には、周囲の伝統的建造物保存地区「地」を意識した和風の商店建築が並ぶ。和風建築というイメージによるまちづくりは、異化とは対照的に新旧の同化による統一感をめざしている。しかし、ここでの和風建築「図」と伝統建築「地」にみるある種の違和感は、新たな「図と地」の関係を問い返しているといえよう。



▲復元された大手門を中心に伝建保存地区

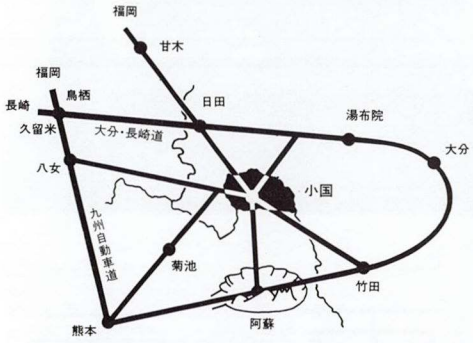
国道222号線の拡幅に伴う町並みの再生は、九州における町並み美化の先駆的試みであった。

▼普通より高く、スパンの大きい電柱配置も町並みに貢献している



（資料提供：日南市飫肥）

小国町の杉の山あい「地」に明確な主張を持った新しい木造建築「図」が展開している。小国ドームはその代表格といえよう。こうした建築を核にして小国のまちなみは変化し始めた。自然の風景「地」のなかに埋め込まれた新しい建築「図」はさらに周囲に広がり、新たな景観「地」を生み出す可能性を秘めている。





▲
山あいに舞い降りたUFOのような体育館は、小国の新木造建築群の象徴である　(小国ドーム：設計 葉　祥栄)



▲
中央の多目的室の軸測ドームが特徴の小学校である。故木島安史熊大教授の遺作となった
(西里小学校：設計 木島安史)

高台に建つレストランはぴらみっどの愛称で親しまれ、山なみの曲線状スカイラインにアクセントを与えている
(ぴらみっど：設計 前田欣宏)
▼



繰り返すボックス梁は周辺の杉林とよく調和し、
▼北里地区の顔となっている　(木魂館：設計 桂　英昭)

図と地



谷あいに完成した新しい木造の保育園には、まわりの自然と町並みの双方へ配慮したデザインが伺われる
(北里保育園：設計 古賀士平＋小笹幸彦＋佐藤貞洋)
▼



(写真提供：小国町)



文　黒瀬重幸(八代工業高等専門学校)





□都市をよむ ——————— 北九州市

「両　義」

▲
八幡東田地区は我国最初の高炉建設地であり製鉄のメッカである。周辺はテーマパークへと生まれ変わり、JR線を越えて街の海への進出が急速に進みつつある。永年日本経済を支えつづけた東田高炉は、今記念塔として静かに佇んでいる





スペースワールドの近くベイスクェアに建つ場外馬券売場。▶
近々姿を消すという正に仮設的な建物である。隣はすでに海(洞海湾)であり、街はついに海に達したのである
ウインズ(設計：日本競馬施設・設計協力：東畑建築事務所)
▼

近代産業の象徴であった北九州工業地帯には、日々の暮らしの風景にいつも煙突と溶鉱炉があった。産業構造の転換によって重工業の衰退を余儀なくされた北九州は今次第にその貌を変えつつある。

JR線による工場地帯(海側)と街(山側)の南北分断の構図が崩れ、街の海側への急速な進出が始まっている。その好例が八幡東田(スペースワールド周辺)と小倉駅北口(国際会議場周辺)であろう。そこは新しい街と旧工場群がせめぎ合う両義の空間である。

近代建築のすぐ先にはいまだ工場群が昼も夜も休まず働いている。

新しい街とアンバランスでネガティブな周辺環境との共生は、再生をかけて戦う北九州の新しい場であり貌である。



両義

近代建築から垣間みる煙突群



国際交流センター(設計：磯崎新)



▲海側から見たJR小倉北口
今や国際交流ゾーンとして急速に変貌しつつある。前面にひろがるのは工場跡地であり北九州再生のエネルギー源となっている

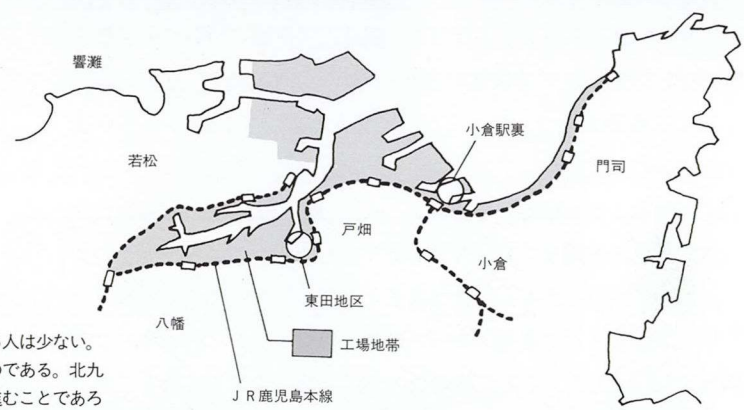
国際交流センターの目前は工場地帯である。岸壁には漁船が連なり都市の力強い
▼貌を見せている　(山側から見たJR小倉北口)











北九州に美しい海があることを知る人は少ない。ここは正にウォーターフロントなのである。北九州の再生をかけて街は海へ海へと進むことであろう



写真・文　重松雄二(東畑建築事務所九州事務所)

北九州市立美術館長・前北九州市長

谷　伍平氏は語る

―磯崎　新と二人のメセーヌ(1)―

聞き手｜萩島　哲（九州大学工学部教授）
広川大八（1995ユニバーシアード福岡大会組織委員会競技課課長補佐）

――今回の特集にあたり、九州の中でも北九州市は自治体としての大規模プロジェクトに、それも3作品も続けて一人の設計家に依頼したというのは、特異なこととして、つとに有名ですが、その重責に立派に応えられた磯崎　新氏について、当時市長として決定に強く関与された、谷さんにお話をお聞きいたしたくまいりました。

磯崎さんとの出会い

――まず、谷さんと磯崎さんとの出会いから、最初の設計の依頼までの、お話を伺いたいのですが。

谷　磯崎氏との出会いということですが、磯崎氏を北九州市立美術館の設計に起用したらということは、谷口鉄雄氏（九大名誉教授）に薦められたんです。ちょうどそのころ磯崎氏設計による博多駅前の福岡シティ銀行本店が竣工したばかりの時でした。

そこで以前から存じあげていた、頭取の四島　司さんを本店に訪ね、建物内部を案内していただき、磯崎氏の作風についての感想を伺いましたところ、「柔軟性があり、デザインも斬新で、銀行の業務に対する機能面についてもなかなか気をつかって設計されています。」とのことでした。

北九州市には旧市時代の建物で、八幡の市民会館、村野藤吾先生の設計した図書館などいいものがありましたが、村野事務所などからは何のアプローチもありませんでした。

唯一設計者として推薦のあったのは、谷口先生からの紹介による磯崎氏だけでした、そこで磯崎氏の作品のある大分市へ行って県立図書館と医師会館を見て、これはますます面白いと感じ、四島さんの「若い人で柔軟性がある」という一言も含めて、それならひとつ設計を頼もうかと。

北九州市は街としてはなんら特徴のない街で、これは柳田桃太郎さん（元門司市長）からのまた聞きですが、評論家の江藤　淳氏が門司市に講演に来たとき、柳田さんに「北九州というところは汚れたふんどしのようですな」と言ったそうです、海岸線に汚い工場地帯かずーっとつづいて……汚れたふんどしのようですなとは、まことに失礼だけれども、言われてみるとなんかドキッとするような汚れたふんどしでは困る、ひとつアクセントが欲しい、工場の煙突だけでなく、北九州市のランドマークになるような建物が必要だと思いました。

私が市長になって最初に手がける大型施設として、100万都市にふさわしい美術館ということで、あまり奇抜でもいけないが、北九州市のランドマークとして明快なものにしたいという気持ちがありました。

――その時には、もうすでにこの場所を決められていましたか。

谷　この場所については、大変苦労しました。
まず、美術館の建設委員会をつくり、谷口先生に委員長になっていただき、まもなく答申を出していただきましたが、場所が決まらない。そこで委員の方にマイクロバスで、和布刈からずーっと市内を公園部長を伴ってくまなく見て廻ったんですが、適当な候補地がない。谷口先生も答申の内容は決めたけれど、建設場所については決めかねる、「市長、決めてください。」ということになりました。

そこで、まえまえからこの戸畑バイパスを通るたびに見ていたこの山ですが、これは新日鐵の土地だったんですが、環境も良さそうだし、眺望もいいしということで、委員の方々に見てもらいました。

――そうですね、アクセスにはちょっと難がありますが、場所としてはよかったですね。

谷　ええ、それで新日鐵に話をしたら、「まあ、市がたってとおっしゃるなら、お譲りしましょう。」ということで、譲ってもらったんです。

ランドマークとなる建物を

――最初に磯崎さんにお会いになったときの印象についてお聞かせください。

谷　建築局を通じて磯崎氏に来てもらい、谷口先生の口添えもあって、あんたに頼みたいから基本設計のパースを描いてほしいということになったんです、そうしたら彼も大胆というか、これまで美術館の設計をしたこともないのに、いきなり受けたんです。
あとでわかったことですが、偶然、同時期に埼玉でも美術館の設計を引受けていたんです。
大胆というか、まあ自信があったんでしょう。





北九州市立美術館

さっそく、二つの模型による設計案を持ってきました、一つは山の尾根を削って板をのせて埋め込んで、潜望鏡が飛び出ているような案と、現在の形の双眼鏡が宙に浮いたような形とでした。私としてはさっきの「汚れたふんどし」から脱却するためにも、建物の姿がランドマークとして市民から見えるようなものにしたい、ということで、戸畑バイパスからも特徴のある建物として目立つ姿の現在のデザインを選びました。

いま考えてみても、磯崎氏が最初に手がけた美術館ということもあって外観のデザインはいまでも新しさがあっていいと思うんですが内部のレイアウトからいうとちょっと問題がありますね、発注する我々としても、学芸員もいなかったし、美術館の運営についての経験も浅かったわけでして。

――磯崎さんにお願いされるときに、レイアウトとして、例えば何平米でやってください、こういう部屋と、こんな部屋も必要ですといった具体的な注文はされましたか。

谷　そのへんはもっぱら美術館と磯崎氏との折衝でしたから、詳細については知りませんが、谷口先生のお話では財政局に牽制されて十分な予算をつけてくれなかったり、皆が未経験だったこともあって、100%満足な結果は得られなかったと。まあそれは否定できませんね。しかしデザイン的には非常に斬新で市民の評判もよかったですね。

北九州市３部作への歩み

――美術館のあと、図書館、総合展示場とひきつづき設計を依頼されていますが、それはやはりこの美術館での評価があってのことでしょうか。

谷　そうです。磯崎氏ばかりではなく、おれにもやらせろという人も出てきませんが、四島さんのおっしゃる〝柔軟性云々〟というのは確かでして、最初から設計案を二案持ってくるなんてことは普通の建築家はあまりやらない、「これだっ」てもってきて、ケチをつけたら機嫌をそこねる、その点彼（磯崎氏）はこちらの要望をよくとりいれてくれましたね。

例えば、市立中央図書館の設計のときですが、歴史博物館と図書館部分とがいまは図書館の下をくぐって公園の方にぬけられますがはじめの磯崎さんの設計案ではピタッと塞がっていたんです。これでは公園の方から入るのにずうーっと大回りしなければならない、ここは開けてほしいとお願いしたんです。かなり大きな原案に対する修正だったんですが、受け入れてくれました。
そのかわり蔵書のスペースがかなり減りましたが。

もう一つは総合展示場の場合ですが、あの場所には二つの道路があるんですが、磯崎氏の最初の考え方は入口は二つだけだった、これについても、利用する人の立場にたって入口をふやせないかと。これも望みどうりにしてくれました。自分の考え方にあまり固執せずに、施主の立場になって考えてくれたと思います。

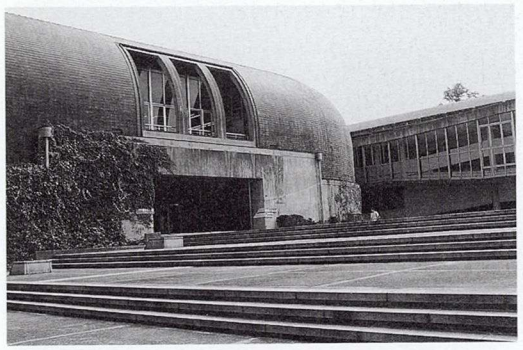
また、これは中央図書館の歴史博物館部門でのことですが、私のまったくの思いつきだったんですが、以前キャンベラに行って国立図書館を見学したときに見たステンド・グラスが、図書館の落ち着いた雰囲気に非常にマッチしていた印象を思い出しましてね、確か、設計も完了して着工時期になっていたように思うけど、磯崎氏にあらためてその時の印象を伝え、小品を考えていたんですが、出来てきたのは〝三浦梅園の摂理〟を図案化したもので、この時点では日本で一番大きなステンド・グラスでした。
おかげで何千万円かの余計な出費になり建築局から文句をいわれましたが。

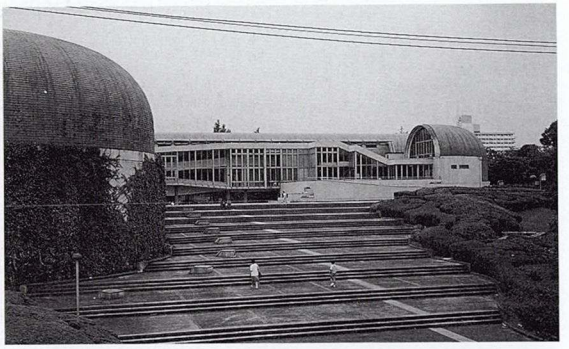
――我々が見ても、ここまでやっていいのかなと感じましたがとても素晴らしい雰囲気を醸し出していると思います。

谷　「少しデカすぎる―磯崎さん、あんた悪のりしたな」と言ったんですが。

――磯崎さんも、いまや世界的な日本を代表する建築家になっておられますが、その才能とセンスにつき若いころから、四島さん、谷さんのお二人が着目されて、それを発揮する場を提供し、育てられた、それぞれ優れた人格をお持ちですが、お互いに仕事を通じて、何か影響し合ったというようなことはありませんか。

谷　まあ、それは施主としての立場もあっていろいろと注文もつけ、また彼の方も設計者の立場をこえて柔軟性をもって応えてくれたと思います。そうですね、時には意気投合した場面もありました。そんなお付き合いもあって、市立美術館にひきつづき、市立図書館・博物館、西日本総合展示場とつづけて、当時、三部作と称された、大型プロジェクトを依頼したわけです。





北九州市立中央図書館・博物館

磯崎氏は、外国へ行って自分の作品を紹介すると、一つの自治体で三つの大きな施設を同一人に依頼したのは、メディチ家みたいなものではないかと、言われたというんですが、メディチ家ほどではありませんが、まあ、結果的に一人だけに集中することになった。しかし、磯崎氏に三つもつづけて依頼した点についての批判はありませんでした。

公共建築には重厚さがほしい

――あれは2年前でしたか、国際交流センターも磯崎さんによって建てられましたが、いまでも市長時代の影響があってですか。

谷　いやいや。あれは、私の現職時代に用地の買収をして、基本設計を磯崎氏からもらった段階で任期がきてやめたわけです。

そして現市長になって、規模も大きくしようと見直しがあったわけです、ですから磯崎氏に頼むことについてはすでに決まっていたんです。

それで、現市長に、なんか私が文句をつけるようで悪いけれど、あの設計はあまりいただけないと思うんです。斬新だとか奇抜とかいっても、公共の施設は30年、40年使うわけでして、明るさや面白さよりも、そこにある程度の気品とか重厚さというか、ポストモダンですから、重厚さはともかくも、まあ、品格というか重さというか、落ち着きがほしかったですね。

――しかし、若い、学生には人気がありますよ。

谷　この間、この美術館で、磯崎さんの展覧会をしまして、展示場でレクチュアをしましたが、大変な人気で一度では入れなくて2回にわけてやったんですが、それはまあ、カリスマ的な人気ですね。

で、外国での仕事も、いろいろいい仕事をしているし――私は〝MOCA（ロスアンゼルス現代美術館）〟が好きですね。

高い建物が密集したなかに、割合小型の美術館というよりも展示場ですか、ぐっと背をかがめたようなたたずまいで、周りの高い建物に取り囲まれた面白さが効果的で好きですね、あれは現地の選定委員会と喧嘩しながら、主張を通したんだそうです、立派ですね。

「これは現代のカテドラル！」

――公共の建物は、30年、40年の感覚で考えなければいけないとおっしゃいましたが、公共建築と民間の建築との違いについての、磯崎さんとの議論はありましたか。

谷　特にその点については議論や意志統一はありませんでした。ただ、この美術館については、「これは、現代のカテドラルだ。」といったことがありました。エントランス・ホールの雰囲気などは天井などを見ても、教会の感じをねらっていると思う。

中央図書館にしても、教会建築の片鱗を感じさせます。いずれにしてもいままでの公共建築にみられる暗い、なじみにくい、イメージは困るけれど、重厚さと品格はあるべきだと思う。

起債をして建築費を捻出し、後々まで返済していくわけですから、現代の感覚で、ただ新しさ、面白さのみにとらわれるようであってはならないということです。

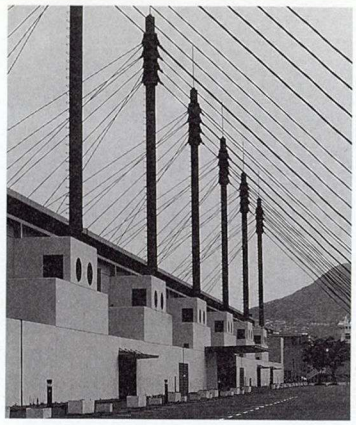
――設計を依頼されてのち、細部の打合せとかは直接お会いになって、施主としての意思を伝えることはありましたか。

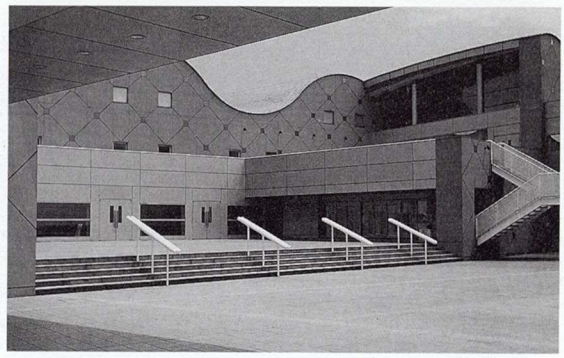
谷　それは、何回もありました。

基本的なイメージについては、彼がもっているわけですが、施主側としては、機能面からの注文や、市民の受けとりかた等については意見をはさみますが、磯崎氏が修正した部分というのは、全体からみると僅かです。もっぱら磯崎氏の頭の中から生み出されたと、ご理解いただいていいと思います。

――公共の建築物というのは、汚い、狭い、粗末というのがいままでのイメージですが、この建物は美術館ということもありますが、ヨーロッパの古典建築を感じますし、現代建築でありながらすごくアートに近いというか、公共建築としてはかなり飛躍した作品だと思います。これも谷市長（当時）と磯崎さんとの〝あ、うん〟の呼吸の成果ですか。それと先ほどの〝汚れたふんどし〟論に対する考慮もあって、美しく、シンボリックなものとして残そうというリクエストが強く磯崎さんにあったんでしょうか。

谷　〝汚れたふんどし〟にたいする反発があったかどうか、自分でもわかりませんが、この美術館が竣工したときにいわれたことですが、エントランスに入ったときの印象が非常に冷たい、なんで





西日本総合展示場(左)国際交流センター(右)

あんなに広い(イタリアの大理石貼りで500平米)空間が必要なのかと。私の意図した公共建築物の重さ、品格という点においては申し分ないけれど、まあ、若干の冷たさはあると思います、しかし、やはり平々凡々たるものであっては困るしね。

――磯崎さんは建築はもちろんのこと、アートに関しても造詣が深く、特に現代美術には詳しい方ですが、美術館の中身についてもご意見があったんでしょうか。

谷　中身についてはまったくございません。
彼が西日本総合展示場を仕上げたころから、もう世界の磯崎になっていましたから、いつまでも北九州にばかり係わってはいられない状態になっていましたから、部分補修しようにも、世界をまたにかけていて、なかなかつかまらないという実状ですから。

ただ、最近になって、これは私が決断したんです。この建物の特徴でもある〝双眼鏡〟のような部分の〝レンズ〟に当たるところの開口部、ブラインドで調光するようになっていますが、ここからの眺望は抜群ですが、美術館側としてはここで景色を見てもらう必要性はないわけでして、食堂からも、最近ではアネックスへの渡り廊下からでも堪能できるわけでして、むしろ美術品にとっては遮光が望ましい。併せて四つの面を壁面として生かすことによって、展示面積を増やしたいということで、磯崎氏とやりとりがあり、彼としてはこの部分については、非常に執着があったんですが、私の主張を押し通しました。

――改修については逐一磯崎さんと。…

谷　ええ、磯崎事務所と相談しなければなりません。やはり、原設計者ですから。
でも、設計者としてのこだわりは当然あると思いますが、施設を運営するものの考え方も優先してもらわなければ困るということで、大体こちらの思うようなことで納得してくれました。

――そもそも、磯崎さんとの出会いを演出された、谷口先生と磯崎氏との関係についてはご存知ですか。

谷　お二人の関係ですが、以前から特に昵懇だったということはないように思います。ただ、谷口氏が銀行の支店などの作品に注目されたというだけで、個人的にどうということではなかったようです。

――昭和43年頃、私が大学院生のときに、谷口先生の研究室にお伺いした折のディスカッションの中で、先生が「いまどきの建築家は新しがりやで困る。」といわれるので、「いや、そんなことはありません。」と反発した記憶がありますが、今日のお話で美術館の設計にさいして、先生が磯崎さんを推薦されたと聞いて、ある意味で当時の学生の考え方の影響もあったのではと思いましたが。
勿論、谷口先生の美意識によるかもしれませんが。

谷　あるいはそういうこともあったかもしれませんが。
すくなくとも、お二人の交友関係はほとんどなく、あくまで設計者としての資質による推薦だったと思っています。

――おわりに、ほぼ無名に近いころの磯崎さんに、つづけて市の大型施設を依頼されましたが、当時、磯崎さんが世界的にも著名な建築家のおひとりになると思われましたか。

谷　うーん、世界的とまでは思いませんでしたが、当時、日本の建築のレベルがいまみたいに世界から評価されて、磯崎さんや、黒川さんが、海外へ進出して、外国の賞をとるというようになるとは、予測できませんでした。でも、当時から彼は外国へいくようになって、北九州市はメディチ家であるように彼が言うものですから北九州市に建てられた建築作品が海外でも広く知られ、彼にとっての記念碑的な作品になり、同時に当市のイメージアップにもなってこれはいいことだなあと思っております。

――どうもありがとうございました。

福岡シティ銀行頭取

四島　司氏に聞く

—磯崎　新と二人のメセーヌ(2)—

聞き手｜広川大八（1995ユニバーシアード福岡大会組織委員会競技課課長補佐）
江口正利（アトリエGEN代表取締役）

——九州の持っている建築というか、建築を生み出す特徴の一つとして菊竹清訓さんとブリヂストンの石橋さんのつながりをはじめ、人（建築家）と人（企業家・自治体の首長）とのつながりのなかから、建物が生まれてきた風土的なものが非常につよいと思います。

そこで、九州出身で、著名な建築家である磯崎　新氏について、四島さんと谷さんがそれぞれ民間と公共の分野でパトロネージュされてきた経緯をお伺いしたいということで、この企画をいたしました。

銀行の常識を破った内部空間

——まず、最初にお伺いしたいのは、四島さんと磯崎さんとの出会いと、設計を依頼された経緯についてですが。

四島　あれわね、当行（福岡シティ銀行）大分支店の取引先で、大分の岩田学園の理事長であった岩田さんから、自分のよく知っている磯崎　新という将来性のある建築家がいるが、一度会ってくれと言われて、確か1965年ごろでしたか、で、会ったんです。

まだ、磯崎さんが東大の大学院で丹下健三事務所にいたころですね、1時間位、話をしましたか、非常に人柄もいいし、この人は将来伸びるなと思ったことと、併せて面白いキャラクターを持っているなと感じました。

ちょうどそのころ、大分支店を新しく建てようという時で、すでに、設計は決まっていたんですが、急遽その設計をとりやめまして、磯崎さんに「あんた、やってみないか。」と言ったら、喜びまして、「やらせていただきます。」ということで、設計を始めたわけです。

それまでの実績といえば大分県の図書館と医師会館位でしたか、ほとんど無名に近かったと思いますが、この人ならできるだろうということで、設計を依頼したわけです。

提出された設計案を見たときの印象は、非常に面白いし、特に内部の色の使い方がユニークだった、大蔵省の人からは「きみ、こんなのは銀行じゃあない、真っ赤な色を天井に使ったりして、銀行の常識を破っている。」と文句を言われましたが、まあ、いいじゃないかということで、原案に沿ってすすめました。

出来上がったら、これが評判になりまして、磯崎さんはこの年の文部省の芸術選奨新人賞をこれで取ったんです。また、アメリカの雑誌「フォーチュン」が、たしかアメリカから二つ、アジアとヨーロッパから各一つ取り上げたと思いますが、アジアからの一つとして当行大分支店が取り上げられ、一躍磯崎さんを有名にしたんです。

1967年に大分支店が竣工、つづいて4年後の1971年この本店が出き上がったんです、その間、福岡市内の数個所の支店を手がけてもらいましたが、いずれも小規模なもので、大きなものは本店が始めてでした。これについては、内部で随分反対がありまして、大丈夫かという意見もありましたが、まあ、いいものが出来るという期待もあって決めました。

また、磯崎事務所も、当時スタッフが4、5人しかいなかったと思いますが、全員、この本店設計のために福岡に移転して専念してくれることになりました。

当時、銀行はオンラインが初まったばかりのときで、普通、銀行のシステムとしては、まず、オフライン、それに慣れてからオンラインというのが、一般的でそれもコンピューター・センターは、別の建物でというのが常識でした。

私としては、初めからオンラインで、それもコンピューター・システムは本店の店舗の中へ組み込むという考えでスタートしました。各階の配置にしても、オンライン部門、事務部門も一か所に集めて効率よく、一階が営業室等、それぞれ広いスペースを確保しました。

まあ、従来の銀行からいうと、ちょっと型破りなものになりました、これは私の考えですが、一番機能的な構築物は軍艦ではないかと思っています、機能面を追求した配置があの形になっているのではないかと。で、この建物も結果的には軍艦を彷彿させるような形になったんですが、出来あがってみると、ちょっと大胆すぎる、行き過ぎではないかという意見と、いやいやなかなか面白いじゃないかという声、毀誉褒貶相半ばでした。

その後、年月を重ね外装石材のインド砂岩が風化して、特有のくすんだ赤い色に落ち着きが出てきて、渋さというか、重みが加わり、博多駅前の景観にとけこみました。

まあ、磯崎さんの建築は一言で言えば常にクリエイティブなんですね。他の建築家は、言いにくいことですが、ある形の建築で成功すると、若干の変化を加味した程度でおおむねその形をつづける。それと、外観のデザインには非常に凝るけれど、内部については、例えば、コンピューターのことなどは、全く分かってくれない、銀




福岡シティ銀行本店(左)大分支店(右)

行建築はビジネスの場所であり、最近の銀行業務はコンピューターが主役ですから、機能第一で、次が外観のデザインだと思うんです。

その点、磯崎さんは許容範囲が広いというか、柔軟さがあります、同じパターンのものは造らない、絶えず新しいことに挑戦している。

〝ネクサスワールド〟へと発展

――四島さんは現代美術のコレクターとしても有名ですが、磯崎さんも現代美術には造詣がおありだとうかがっております、このあたりの、お二人の美にたいする一致点が、建築デザインに現れているのでしょうか。

四島　実は、おもしろい試みをしました。
それは、6階の役員専用階の一隅に応接用の小部屋を五つもつくりました、それも遊びごころを加えて、5人の芸術家に各ひと部屋づつお願いしたんです。
まず、郷土代表として西島伊三雄さん（画家）に絵をかけるだけでなく部屋の色彩から緞帳、椅子、テーブルまで、室内の調度品全てをおまかせして、デザインしていただきました、焼物もご自身で焼いたものです。他には、斉藤義重さん、野見山暁治さん、高松次郎さん、磯崎さんにもひと部屋お願いしました。

――磯崎さんは、それをうまく生かして、〝ネクサスワールド〟で応用されたんじゃあないですか。

四島　そうです、これには榎本君（福岡地所・社長）が非常に興味をもちまして、香椎（福岡市）に、福岡の文化・芸術の発進基地になるような環境をつくろうということで、磯崎さんに相談したんです。結果、海外からもレム・クールハースを含め5人位と思いますが、参加して建てられたんです。
なお、レム・クールハースはこの〝ネクサスワールド〟で外国人としては、初めて建築学会賞に選ばれたんです。

彼等は日本の建築家と発想が違いますね、特に空間の切り方がすごい、仕事としての取組みの姿勢が違う。

また、全部自分でやりますね、内部のインテリアや家具まで、絵も自分で選んできます。建築の設計とは建物をトータルで考え設計するという認識で臨んでいると思う、だから、出来た作品がすばらしいんですね。

――そうですね。〝ネクサスワールド〟も時間が積み重ねられて、10年位先にどうなっているか、楽しみですね。

四島　福岡は、そういう意味では文化・環境づくりの実験場としては、非常に適していると思うんです。都市の規模としても適当だし、東京のような大都市では採算面や制約があって出来ないことも、遊びの面もふくめて推進出来る、そんな余裕のある町だからこそ、設計者にとっても興味があるんではないでしょうか。

――今のお話の福岡の実験場論ですが、先日、この企画の中で北九州市の谷さん（前・市長）から伺ったばかりですが、四島さんのお口添えもあって、公共建築の大型プロジェクトに磯崎さんを起用して、北九州市の公共建築物の骨組みをつくられ、その後の町並み形成につなげる基を手がけられた。

つぎに、磯崎さんとの仕事をはなれた、個人的なお付き合いについてですが、お話いただければと思います。

四島　昭和49年ですか、一緒にシルクロードを旅しました。磯崎さんは奥さんを連れて、私も娘と一緒にパキスタン、アフガニスタン、イランなど、一帯を3週間ぐらいかけて回りました。

――他に、お二人で美術品、特に絵画の展覧会にいらしたとか。

四島　あります、ニューヨークにも行きました。
磯崎さんは、コンテンポラリーでも、どちらかというと先端のほうに、興味があるんですね。抽象画だとかにね。
展覧会といえば、この前磯崎さんの建築模型の作品展がありました。

――MOCA（ロスアンゼルス現代美術館）でしたね。

四島　そうです、そのときも磯崎さんと一緒に行きました。
展覧会場に行って驚いたんですが、凄い人気でして、10万人も入ったそうです。

絵の展覧会よりも高い評価で、磯崎さんを見つけるとサインぜめでした、館長も非常に喜んでおられました。

この磯崎さんの建築模型展は日本でもおこなわれその後パリのポンピドゥーセンターに行って、最後は福岡地所におさまります。福岡地所のコレクションにして散逸を防ぐことにしています。

――今まで、お話を伺っていて、日本の建築家と海外の建築家との大きな違いとか、磯崎さんが海外の建築家以上に、より外国的な資質をもっているとか、建築家のあるべきすがたに対するご意見を、日本の建築教育を含めて伺いたいんですが。


大分県医師会館

四島　そうですね、なんか教育の基本のところが違うような気がしますね。

たとえば、これは磯崎さんが、海外で最初に造って評価された作品のMOCAのときですが、彼はもうノイローゼ状態になっていました、いわゆる文化の差にぶつかりましてね。

大体向こうでは、美術館をつくるといったら、お金持ちが寄付するんです。したがって、寄付した人の発言力が強い、設計についても自分達の気に入った建築家を推薦するわけです。

ところが、館長やキューレーターは磯崎さんを推薦しました。そこで人選をめぐっての争いになった。最後はニューヨークタイムズの記者がこの争いを知って、寄付をした人がそういう発言をするのは間違っている、美術館は美術館の立場で設計者を選ぶべきではないかということで磯崎さんに決まったんですが、当時、アメリカでのジャーナリズム論争になったんです。

日本ではあまり考えられないことですね。

また、日本の設計者はおおむね、設計したらそれまで、あとは建築業者がやるものだと、分業みたいにね、

建築は建築業者、インテリアはインテリア業者、家具は買ってきてそろえる、統一性がみられないと思うんです、施主も設計者もそこまで要求しないことが多いんではないでしょうか。

――最初に、磯崎さんに依頼されたときは、やはり四島さんがそのようなことを意識されて、トータルに依頼されたんですか、あるいはごく自然に磯崎さんがそこまでされたんでしょうか。

四島　私はまかせるほうです。まかせて絵を描いてもらってから自分の意見を添える程度です、あんまり言うといいところを殺すんですよ、ただ、機能面についてはこちらの希望を聞いてもらいますが、形はまかせる、そのほうがいいものが出来ます。

――谷さんも同じことを言われていました。機能面は言うが、デザインについてあまり言わない、ただ、公共建築ということで、市民のためにも、シンボリックなものであって欲しいという程度のことしか言わなかったそうです。

四島　なるほど、同じような考えですね。そうしないと、いいものはできないですね、あまり干渉するとね。

作風の変化も才能のひとつ

――磯崎さんの地元九州での活発な創作活動のあと、海外への飛躍も含めて、その後の一連の作品についてはいかがですか。

四島　彼は10年ごとぐらいに変わっているんです。私は、10年ごとに変化できるというのも、才能だと思うんです。

例えば、画家でも、10年ごとに変われるのはごく僅かです、思い切った変化のできる芸術家というのは、数えるほどしかいない。

大体共通しているのは、一つの作風で有名になると、それを追求することが多い、追求するのはいいけれど、だんだん悪くなる、迎合を始めるんです。売れる作風の要領がわかってくるんです。売れるけどここで終わりですね。

才能の伸びで、それを破って変化するというのは、よほど意思が強くて、貪欲な人でないと出来ないんではないでしょうか。

磯崎さんが、それを出来るというのも、彼は海外で勝負している。数々のプロジェクトに参画して勝ち残っている、非常に厳しい競争社会を生き抜いているからです、日本の建築家では少ない存在です。

――最近、特に作風が変わってきたといいますか、ポストモダン…もともとそういうことには関係なく脱モダンだったと思うんですが、また少し変わってきましたね。

四島　ポストモダンといっても、明確なフィロソフィーがある訳ではないんでしょう。現代の建築に飽きたらなくなって、ちょっと古いものをとりいれた形でしょう。

彼は、それよりも、もっと古い原点に近いものにいいものがあるんではないかと模索を始めてますね。

――古典ですね。

四島　そうです、古典の意義と現代との調和というか、そんなことを模索しているんではないでしょうか。

これは、芸術の今後の方向の一つですが、ドイツのキーファーという作家が、アメリカで展覧会をしたときに、アメリカの画家が大変なショックを受けたんですね、全く次元の違う、古典にもどったような、現代から古典を見るというか、古典から現代を見るというか、そういう作風なんです。

磯崎さんの思考にも似たところがあるように思います。



大分県立中央図書館

私共とシルクロードへ行ったのも、旅をしたら、何か見つかるんではないかという期待があってのものだったんではないかと思います。

変わったと言えば、マイケル・グレーブスにハイアット・ホテルの設計を依頼したんですが、当時もう老大家だと思っていたんですが、作品を見てある意味で殻を破って、若返ってきた、もうひと仕事するんじゃないかという気がします。

――マイケル・グレーブスは、プランニングが面白いですね、配置とかよく出来ていますね。
海外の建築家が、福岡でやるとなったら、頑張るようですね。

四島　そういうことは、都市にとって非常に貴重な風土的財産ではないでしょうか。例えば、マイケル・ジャクソンが、福岡ドームだけで公演して、そのあとモスクワに行ったり、マドンナも来ますし、福岡が東京や大阪にひけをとらない日本のイベントの発進基地の一つとして注目されるようになるでしょう。

定着した九州の大型プロジェクト

――福岡ドームを初め最近の九州の大型プロジェクトは建築にやる気をおこさせますね。この現象については如何でしょう。

四島　やっぱり、やるからにはあのくらい画期的にやれば成功するんです。中途半端では失敗します、最近全国各地でリゾート計画とか、テーマパークの構想が目立ちますが、定着しているのはディズニーランド、ハウステンボス、フェニックスリゾート「シーガイア」、そして、福岡ドームなどですが、その多くは九州ですね。
いずれも、大胆な発想で、思い切った投資をした結果です。

――つぎに、この企画にご登場願ったお二人、四島さんと谷さんとのつながりをつけられた谷口鉄雄（九大名誉教授）さんですが、美学がご専門でどちらかというと古典派ですが、そんな方が当時の磯崎さんを薦められたというのも意外ですが。

四島　本物を見る目のある人は、古典でも、現代でも、美術でも、また、建築についても同じ目で見る、本質を見ますから。

――当時、30歳位の磯崎さんに本店の設計をまかされた、四島さんも勇気のいる決断をされましたね。

四島　磯崎さんにひかれるものがあったからですよ。

先程の「MOCA」の設計も、ロスアンゼルス市の幹部や専門家チームが来て、この建物を含め彼の作品を見て、その上で磯崎さんに決めたんです。

〝ネクサスワールド〟を企画したフランスのクリスティアン・ポルザンパルクとの話の中で、この建物は、時と共に評価が高くなると言ったら、建築というのは時代を超越している建物でなければならない、いつの時代にも新鮮に見えるものがいいものだというんですね。それが本当の建築だとも言うんです。

――一つさびしいのは、大分の図書館ですが、取り壊しが決まりましたが。

四島　あれは残したいですね。彼の初期の作品でもあり、記念塔のようなものですし、磯崎さんの原型がありますよね。

――先ほどよりのお話を聞いていると、パトロネージュという見地でいくと、九州にはすごい蓄積があると思うんです。
この先、こういう方々が出てくるんだろうか、ちょっと心配ですが。東京、大阪のような大都市だと「人」というより政治・経済の力学が複雑にからみあって、公平・公正の平均値のようなところに落ち着きますが地方都市では、パトロネージュというか、いい意味でのある種の力で、人を育てていく土壌が必要ではないかと思いますが。

四島　日本の場合は、行政とか、外郭団体とかにそういう「人」が出てくると、変わってくるんですね。特に建築はね、大きな支出を伴いますから、熊本県知事時代の細川さん、北九州市長時代の谷さんにしてもそうですね。

――最後に、建築家について、望まれることを苦言も含めてお伺いしておわりたいと思います。

四島　建築については、日本は相当のレベルに達していると思う。ただ、設計とかデザインの面は国際的レベルと言える人はまだ少ない。もう少しトータル的に設計できるような、勉強をしてほしい、これは日本の教育のシステムの違いだと思うんですが、そのへんのことを検討する時期に来ているんじゃないかと、だから、出てくる人も、非常に個性的な安藤忠雄とか、クリエィティブな磯崎新とか、いることはいるんですが、非常に数が少ない。
画家にしても、学校教育の段階で個性を伸ばす教育が出来ていない建築も同じで、たまたまそういう才能を持った人だけが、なにかのきっかけでとつぜん現れるというのが現状でしょうね。

――それでは、このへんでどうもありがとうございました。

構造の頁　225

建築物へのＦＲ鋼の様々な利用事例

作本好文　さくもと　よしふみ　　渡辺　博　わたなべ　ひろし
新日本製鐵株式会社建材開発技術部部長代理、工学博士　同、大阪支店部長代理

建築構造用鋼材に要求される性能は、強度特性、耐久性および耐火性があげられる。従来、鋼材はこれらの性能を満足する安価な構造材として広く使用されており、不足する部分は、例えば塗装や耐火被覆（以下、被覆）で補ってきた。

しかしながら、近年、超高層ビルや大空間（アトリウム・スポーツ施設）などのスケールが大きくなり、また、鉄骨フレームを意匠的に表現するなど設計の多様化により、さらに優れた性能の鋼材が要求されることとなった。

このようなニーズに対応して特定の性能を高めるよう新たに開発された鋼材、すなわち機能鋼としては、高張力鋼（60、70、80キロ鋼）、極軟鋼、外法一定H形鋼、構造用ステンレス鋼などがある。耐火鋼（ＦＲ鋼：Fire Resistant Steel）もそのひとつで、耐熱性を高める合金（モリブデン・クロムなど）を添加することで、従来の建築構造用鋼材（以下、一般鋼）に比べて高温強度（耐火性）を高め、被覆の軽減や無被覆を可能とした新しい鋼材である。

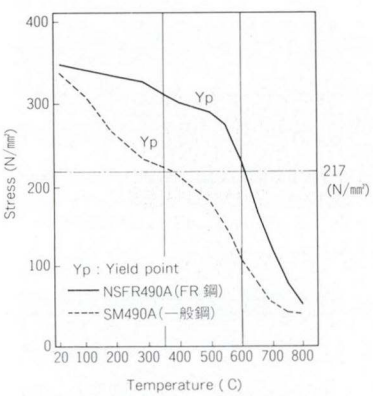


図１　鋼材の高温強度（降伏点）

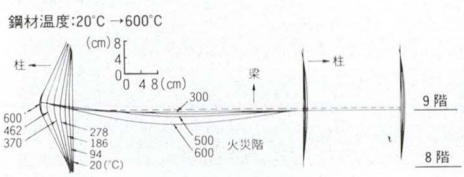


図２　骨組の熱変形解析例

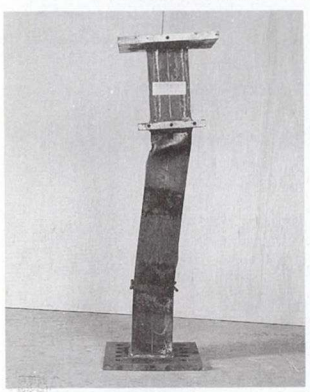


写真１
ＦＲ鋼柱の
高温ビーム
コラム試験

ＦＲ鋼の特徴

ＦＲ鋼の特徴[1]は以下の３点である。

(1)　高温強度が、一般鋼と比べて著しく高い。ＦＲ鋼の高温強度（降伏点）を、SM490鋼を例に一般鋼との比較で**図１**に示す。一般鋼は350℃近辺で常温規格値（325N/mm²）の２/３まで低下するが、ＦＲ鋼は600℃までこの値を保証する。常温規格値の２/３とは、長期許容応力度に相当する。火災と地震は同時に考慮しないことから、長期荷重を支持できる強度が火災時の必要強度である。

(2)　常温時性能は、溶接構造用圧延鋼材（JIS G 3106）の規格に合致する。すなわち、常温時の設計は一般鋼と同じである。

(3)　一般鋼と同じ溶接性を有する。

ＦＲ鋼を使用した建物の耐火設計手法

鉄骨骨組の耐火安全性は、一般的に、火災外力（火災により加熱された鉄骨の温度：θcal）と耐力（骨組の高温時の安定性が保たれる限界温度：θcr）を比較し、式(1)で評価される。

$$\theta cal < \theta cr \quad \cdots\cdots(1)$$

θcrは、骨組の熱変形解析などから、

①骨組の倒壊防止

②骨組の過度の変形防止

を満足する鉄骨温度である。ＦＲ鋼では、θcrを600℃とした。これは、ＦＲ鋼が600℃でその降伏点が常温規格値の２/３以上を保証することから、600℃以下であれば、どのような荷重条件でも骨組の倒壊の恐れがないからである。

しかしながら、骨組は高温時に大きく変形する（**図２**）。特に、柱は、梁の熱膨張により外側に大きく押し出され、「く」の字状に変形する。ＦＲ鋼は、一般鋼と比べてより高温となりこの変形が大きくなることから、高温時のビームコラム試験[2]を実施して、その荷重支持能力と変形性能を検証した（**写真１**）。

また、このような試験および既往の研究[3]から、骨組の許容変形量を式(2)、(3)で規定した。

柱：$h/50$　　……(2)



写真２　徳島駅クレメント駐車場
（設計:弾建築設計事務所・四国開発建設、施工:徳島ターミナルビル新築工事 JV 大林組・西松建設・錢高組・新日鐵）



写真３　同上、内部風景



写真４　信濃町駅ビル
（設計:ＪＲ東日本、施工:飛島建設ほか）

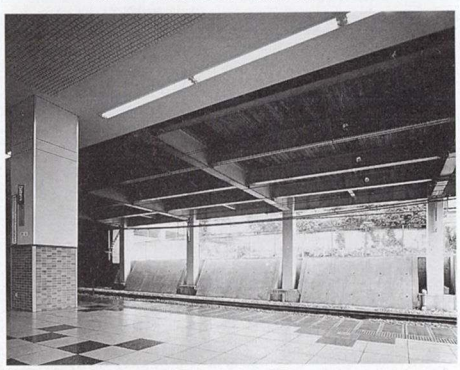


写真５　同上、線路およびプラットホーム回り

梁：$L^2/800H$ ……(3)

ここで、h：階高、L：梁スパン、H：高さである。

ＦＲ鋼の使い方

ＦＲ鋼を使用しても、可燃物が多く火災時に鉄骨温度が600℃を超える建物、例えば事務所・倉庫・物販・共同住宅などでは無被覆は困難で、耐火塗料などとの組み合わせが必要となる。一方、可燃物の少ない建物、例えば駐車場・駅ビル・スポーツ施設・アトリウム・美術館・博物館・展示場・ペントハウスなどでは、一般的に無被覆となる。また、鉄骨を建物の外部に露出して使用する建物（外部鉄骨建物）でも、鉄骨が直接室内の加熱を受けないことから、無被覆となるケースが多い。

以下に、無被覆の実施例を示す。

実施例

駐車場　**写真２、３**に、ショッピングセンターの駐車場にＦＲ鋼が使用された例を示す。このような商業施設に付随する駐車場では、被覆をなくすことで、明るく清潔な空間が実現できること、鉄骨に直接塗装できることで、各階の色分けや方向指示などを鉄骨に表示することができるなどのメリットがある。

駅ビル　**写真４、５**に、駅ビルの線路およびプラットホーム回り（１階）の柱・梁にＦＲ鋼が使用された例を示す。

近年、この駅ビルのように、線路上空を事務所や物販などとして多目的に使用した建物が建設されているが、従来の駅舎と異なり、柱・梁は耐火構造とすることが要求される。しかしながら、線路上の鉄骨を被覆することは、列車の振動による被覆の脱落やメンテナンスの困難さなどから、無被覆とすることが求められ、ＦＲ鋼が採用された。

スポーツ施設　明治神宮外苑テニスクラブにオープンした室内テニスコート（**写真６**）では、軸組と小屋組の一部にＦＲ鋼が使用されている。また、延焼を受ける部分は火災解析により鉄骨温度が600℃を超えたことから、イギリス製の耐火塗料（Nullifire社）が塗布された。**写真７**は、発泡層をスプレー施工している状況である。

このように、ＦＲ鋼を使用しても被覆が必要となる部分には、耐火塗料の使用が有効である。

アトリウム　**写真８**は、ブレースに耐火鋼を使用した事務所ビルのアトリウムである。ブレースは、十字型の芯材（ＦＲ鋼）と座屈止め用の鋼管（一般鋼）の間にコンクリートを充填したアンボンドブレース（**写真９**）で、座屈止めの鋼管が無被覆となっている。

外部鉄骨建物　ＪＲ東日本の荻窪駅前に建設された事務所ビル（**写真10**）では、建物の前面に屋外に露出した鉄骨のフレームを設け、空調機スペースとして有効に利用するとともに、鉄骨フレームそのものが建物のファサードのデザインとして活用されている。無被覆とすることで、アルミカバーで化粧した後も、スレンダーでハイテクな外観が実現されている。

その他　横浜市に建設された倉庫（**写真11**）では、外周のトラック用のランプウェイの鉄骨フレームにＦＲ鋼が使用された。無被覆としたことで、カラフルで軽快な鉄骨デザインが実現されている。

まとめ

以上、ＦＲ鋼の概要とその使い方を紹介した。

ＦＲ鋼は、鉄そのものの耐熱性を改善することで、被覆の軽減や無被覆を実現した新しい建築用鋼材である。

従来、鉄骨の耐火仕様は一律に法令で規定されていたが、新しい耐火設計手法が提案されたことで、材料の性能が定量的に骨組の耐火安全性に評価されることとなり、新しい材料や工法が次々に開発されている。今後は、この設計手法が簡便に設計に生かされるよう、早期に法令化されることを期待する。

参考文献

1）作本ほか、建築構造用鋼材の高温強度特性、日本建築学会論文報告集、第427号、1991．9
2）染谷ほか、耐火鋼を用いたH形・箱形断面柱の高温時耐力、構造工学論文集、Vol. 39B、1993．3
3）ECCS；Design Manual on the European Recommendations for Fire Safety of Steel Structures, 1985



写真６
明治神宮外苑テニスクラブ室内コート
（設計:日建設計、施工:間組）



写真７　同左、耐火塗料吹付風景

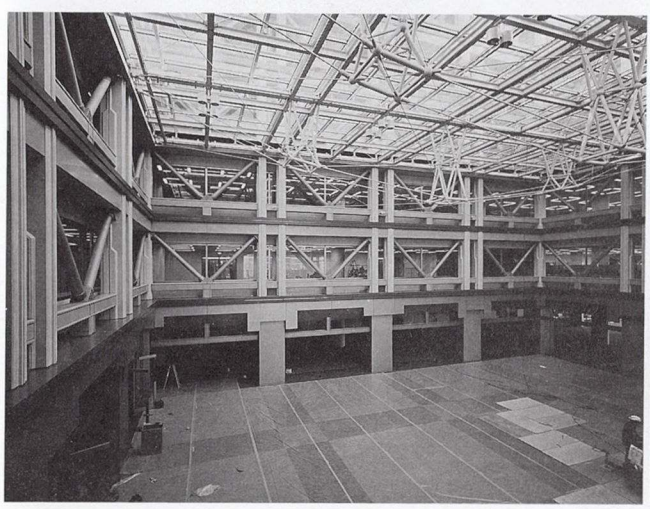


写真８
アイ・ケイ・ビル
（設計:日建設計、施工:大林組ほか）



写真９　同左、アンボンドブレース



写真10　インテグラルタワー大林（設計・施工:大林組）



写真11　ケイヒン大黒倉庫　写真提供：井上博設計事務所
（設計:井上博設計事務所、施工:大成建設）

新洗浄方式腰掛便器

植松政敏　うえまつ　まさとし
東陶機器株式会社商品技術部商品技術第一課

日本の住宅トイレも、水洗化・洋式化を経て、ようやく不快でなく衛生的な場所となってきた。さらに、温水洗浄便座の普及や脱臭機能によるにおいの解消など、より居住性の高い生活空間への変貌を続けている。そして今後は、心地よさ、やすらぎなどさらに高次元の快適性と個性化がトイレに求められるようになると言える。

一方、地球環境という観点から、生活の中の水まわり機器については、社会的要請として「節水」が大きなテーマとなってきており、節水機器の開発はメーカーの使命となりつつある。

以上のような、新たなトイレ空間の創造と節水化という二つのニーズに応えて、新洗浄方式の腰掛便器「ネオレストＥＸ」が開発された。



写真１　ネオレストＥＸ（サイホンゼット式）

ネオレストＥＸは、新開発の洗浄方式「シーケンシャルバルブ方式」の採用により、これまでの節水形サイホンゼット便器の洗浄水量に比べ40％の節水が図れる。また、一般住宅でも給水管直結で洗浄できるので、これまで腰掛便器にセットされていたタンクが必要なく、ローシルエットのすっきりしたデザインが実現した。（写真１）

シーケンシャルバルブ方式の採用

シーケンシャルバルブ方式は、東陶機器が蓄積してきたアクアエレクトロニクス技術と、コンピューターシミュレーションによる流体解析により開発された洗浄方式である。この洗浄方式は、便器洗浄を最も効率よく行うために、便器の洗浄水噴出箇所を自動的に変え、段階的に洗浄（ステップ洗浄）するもの（図１）である。各ステップでの最適な給水、および便器の通水路形状の研究で大幅な節水が実現できた。

これまでの便器洗浄には、瞬間に大流量の洗浄水を必要としていた。そのため、ビルなどのトイレにみられるフラッシュバルブ方式のトイレでは大流量を確保するため太い給水配管を必要としていた。一方、住宅トイレでは、給水配管を太くできないため、いったんタンクに水を貯めることで瞬間流量を確保するロータンク方式が主流となっている。今回開発されたシーケンシャルバルブ方式では、低流量での洗浄が可能なため、特別な配管や、タンクが不要となる。

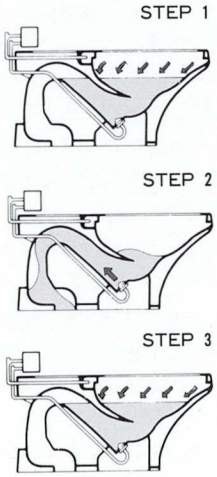


図１　シーケンシャルバルブ方式

ネオレストＥＸの洗浄水量は、１回あたり、大洗浄なら８ℓ、小洗浄（女性小洗浄含む）なら６ℓで、これまでの節水形（節水静音便器）のサイホンゼット便器13ℓに比べ、40％の節水となり（表１）、試算では、標準的な家族で年間27.7m³(風呂約150杯分）の大幅節水が可能になる。

表１　腰掛便器洗浄水量

洗浄方式	従来形便器	節水形便器（節水静音便器）	ネオレストEX（サイホンゼット式）
サイホンボルテックス	16ℓ	—	
サイホンゼット	20ℓ	13ℓ	大8ℓ小6ℓ
サイホン	16ℓ	13ℓ	
洗い落とし	12ℓ	8ℓ	

※試算条件
家族４人でトイレ使用を、大１日１回/人、小１日２回/人と設定。
節水形サイホンゼット便器の洗浄水量は大、小ともに13ℓ/回。
ネオレストＥＸの洗浄水量は大8ℓ/回、小6ℓ/回。

便器のローシルエット化

ネオレストＥＸは、従来、便器に載せる形でセットされていたタンクを不要にすることで、ローシルエットを実現させた（図２）。具体的には、密結形ロータンク便器と比べ、約25cmのローシルエット化を図っている。



図２　便器形態の流れ

ローシルエットは、トイレプランニング上の制約をなくし、より自由なトイレ空間デザインを可能にする。また、トイレの悩みとして一番に挙げられる「狭い」という問題も、便器自体に圧迫感を持たせないことで軽減する。

トイレまわりの機能の装備

ウォシュレット機能　ウォシュレット機能を搭載。機能部分はすべて内蔵されているので、脇への出っ張りなどはない（図３）。おしり洗浄・ビデ洗浄・マッサージ洗浄・ムーブ洗浄・乾燥・着座スイッチ・暖房便座の機能を持つ。

オゾン脱臭　便器内のにおいを吸い取り、オゾンの働きで、97％分解する。使用中におわないのはもちろん、立ち上がった後も１分間自動運転するので、においを残さない。部品の交換なども一切要らないメンテナンスフリーの脱臭である。

連続使用可能　シーケンシャルバルブ方式は給水管直結で洗浄するので、次の洗浄を、タンクに水が貯まるまで待つ必要がない。連続して洗浄できるので、朝のトイレのラッシュ時に便利である。

タンク給水音をなくす　給水管直結で洗浄するので、気になるタンクへの給水音が静かになった。夜間も気兼ねなく使用できる。

防露構造　梅雨時や冬の暖房時には、便器表面に結露することがある。これは床にシミを作ったり、腐らせたりする原因になり、また掃除の手間もかかる。そこで、便器内部に断熱の空気層を設けて、便器表面に露が付くのを防いだ。

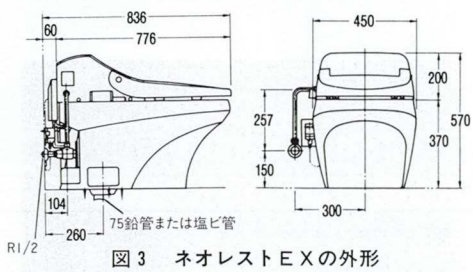


図３　ネオレストＥＸの外形

便器開発の今後の方向

ネオレストＥＸは、今後のトイレの方向を象徴する次世代便器と言える。当社では、今後開発する便器について「節水」を展開していくとともに、タンクレスの「ローシルエット」化、および付加機能を装備した便器を拡充していく予定である。

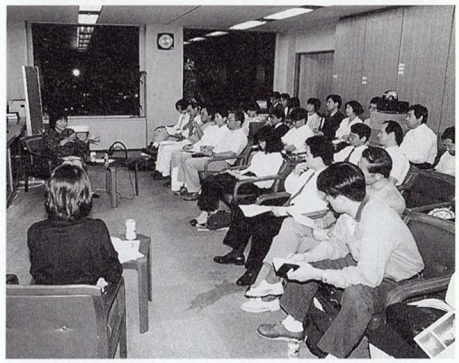
30's EYE～21世紀へのエスキス

三澤文子
人と木がつくる美しい家

廻はるよ

日本建築協会事業委員
東畑建築事務所

30's EYE—21世紀へのエスキス、そのシリーズ2回目の講師として、木造の可能性を探究した住宅にとりくむMs建築設計事務所の三澤文子氏をお招きした。「人と木がつくる美しい家」というテーマで近作などのスライドを交えた講演とディスカッションの集いには、大阪芸術大学での教育活動や新聞連載なども手懸けられるその幅広い活躍ぶりを反映し、建築業界の方に限らず、一般の方々にもお集まりいただき、盛況な講演会となった。



普通の家

“竣工した瞬間よりも、その後、時を経るごとに深みを増して美しくなる住宅”、木という生きた素材に挑戦していく中で三澤氏が確信している作品の様相だ。氏の作品は真壁づくりで、木の架構がすべて視覚的に顕にされている。木は呼吸しているので常に空気にふれるようにするのが自然であり、そして構造をシンプルに表現していくことで構築的な意匠美を得ることができると主張する。そうして創られた空間は、近作「遊山荘」などにも見られるように、非常に構成的かつ近代的でありながら、工業生産品が持ちえない情感的な心地よさを醸し出している。しかし敢えて氏は、これを「普通の家」と呼ぶ。それは住宅が住む人と共に成長していくことを見すえた、普通だがしかし難解な住宅本来のあり方を追求する建築観を表現しているのだと思われる。

木材直接購入システム

木材に対して徹底的にこだわる三澤氏は、徳島の木頭杉の林業家・和田氏との出会いを通じ、その質のよさを実感した「葉枯らし材」を使用している。木材の品質は等級と乾燥による。現在市場に流通する木材の多くは未乾燥材で、割れや仕口のスキが当然のようにおきる。「葉枯らし材」とは伐採した後、枝を残したまま3ヵ月間山に放置し、葉の蒸散作用を利用することで木を内部から乾燥させていく昔からの林業の手法なのだという。

こうして丁寧に乾燥された木材を使用するために、氏は施主に和田氏の木材を直接購入してもらい、それを工務店に支給するというシステムを採用している。そのためには設計図・構造図を描いた上で自ら木拾いを行い、発注しなければならない。それにまつわる業務、調整作業は複雑かつ膨大だ。しかしそうして得た「葉枯らし材」のしっとりとした味わいの良さと耐久力が空間の質につながるとして実践し続ける氏の木材に対する真摯な態度に、非常な感銘を受けた。

開放する住宅

木造住宅は、その架構を生かし、内と外のつながりをつけ、空間の広がりをつくることができる。内部空間としては大きな吹抜を中心に、流れるような空間を構成し、プライベート空間も吹抜を共有させることができるように考えるという。「遊山荘」がそれを端的に表現している。また「天美我堂の家」では、子供部屋にも仕切りはなく、のびのびと開かれた空間が息づいていた。こうしたつながりは、家族の開かれたつながりをも導いているようだ。また、通風が非常に優れており、住宅の性能の良さを支えるつくり方でもある。

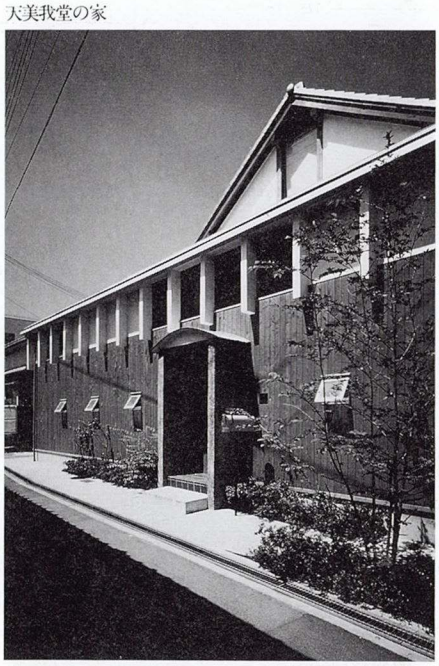
内と外のつながりは、三澤氏にとって、住宅と街のつながりでもある。自然環境に対し開くことは当然だが、密集した都市でも、その場所には必ず自然のよい所が存在し、どこかに開放し、つなげるところがあるという。街並みに対しても常に何らかの関係性を持たせたいと考える。「天美我堂の家」に見られるへいと一体化した壁のあり方や本瓦の屋根、快いリブの連続感などは、周辺の環境を崩すことなく活性化させていると感じさせられる。常に環境に対しつながり、開いていくことや、住み手と共に成長する住宅を目指すことが、三澤氏の作品を、人にとって現実感（リアリティ）のある建築に収束させているように思われる。

現代の棟梁として

ディスカッションの中で多かった質問は、やはり木材および木造の実践的な技術に関するものだったが、他に木造をいかに勉強すればよいかというものが複数あった。三澤氏は、文献よりも現場で職人たちの仕事を見て、そのフィードバックの中で学んでいくべきだと考える。そして、現場と一体となるその延長線上で木の可能性を追求し続ける三澤氏の究極の目標は、現代の棟梁となることだという。様々な知識・技術に精通した上で現代の生活をとらえた空間を設計し、職人と共作していくことが木造住宅のこれからのあり方と考えるからである。木造という一つの形式を極め、手の跡の残る現実感（リアリティ）ある建築がこれからどのような広がりを見せ展開していくかは、棟梁の腕の見せどころとなるのだろう。

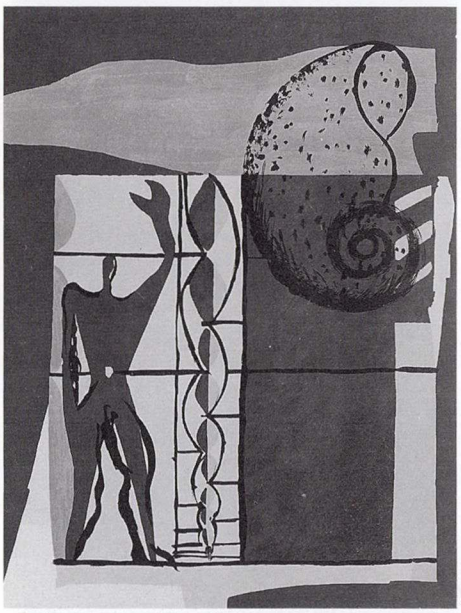
「千里N・S邸」などにある「集まって住む」という新たなテーマへの挑戦を含めて、その一層のご活躍を期待しながら、講演会30's EYE 第2回の報告としたい。

天美我堂の家



日　時　1993年9月22日（水）18：30～20：50
会　場　日本建築協会サロン
参加者　30人
主　催　日本建築協会若い会員の集い小委員会

LE POEME DE L'ANGLE DROIT



ギャルリー・タイセイでル・コルビュジエ『直角の詩』展が開かれている。

『直角の詩』は1947年～1953年にル・コルビュジエが制作し1955年に刊行された、リトグラフによる詩画集で、ユニテ、ロンシャンの礼拝堂、チャンディガールの一連のプロジェクトを手掛けていたころのもの。

太陽、海、貝殻、開いた手といった象徴的なキーワードをもとに、相反する要素の融合と調和による創造が語られているだけでなはく、自身の内面が吐露されており、ル・コルビュジエの表現活動の中でも特異な位置を占める作品となっている。入場無料。

本展では、この『直角の詩』の詩と挿絵の展示に、詩の翻訳・解説を加えて、分かりやすく展示されている。

会　期　1994年1月17日(月)～3月11日(金)
9：30～17：00　土日祝日は休廊

会　場　ギャルリー・タイセイ　TEL 03-5381-5510
東京都新宿区西新宿1-25-1

◁直角の詩B-2　精神　©FOUNDATION LE CORUBUSIER

「ミース・ファン・デル・ローエ：ウィル・オブ・エポック」展

ギャルリー・タイセイとデルファイ研究所の共催で、近代建築の巨匠ミース・ファン・デル・ローエの建築理念を切り口に展覧会が開かれる。入場無料。

■「MIES VAN DER ROHE:ウィル・オヴ・エポック」
—モダニズム建築の解読—

会　場　ギャルリー・タイセイ　TEL 03-5381-5510
新宿区西新宿1-25-1　新宿センタービル

会　期　1994年3月23日(水)～5月20日(金)
9：30～17：00
土日・4月29日～5月8日休廊

構　成　9つのキーワード（グリッド、構造、エレメントの独立、均一性、マテリアルとディテールとプロポーション、ユニバーサル・スペース、流れるスペース、古典性、工業化）別に整理して、オリジナルドローイング、スケッチ、模型、写真、映像などで40点余りを展示。

■「MIES VAN DER ROHE展開催記念シンポジウム」

日　時　3月25日(金)
18：30～20：30

会　場　安田生命ホール
新宿区西新宿1-9

定　員　400人（参加無料）

パネラ　高山正実氏(建築家)
岡部憲明氏(建築家)
植田　実氏（建築ジャーナリスト）

申　込　往復ハガキに住所・氏名・勤務先・電話番号・年齢・返信先住所を記入し、3月15日までにデルファイ研究所内「ミース展シンポジウム係」（〒102　東京都千代田区四番町8-13、TEL 03-3222-5031）へ申し込む。



Hedrich - Blessing photograph, courtesy Chicago Historical Society

NEG空間デザイン・コンペ

日本電気硝子㈱主催の、第1回NEG空間デザインコンペティションが2部門に分かれて行われる。

登録締切　1994年4月28日(木)までにハガキで「NEG空間デザインコンペ」の提案部門か作品例部門かを明記し登録すれば、資料等を送付。

応募締切　1994年6月3日(金)　-当日消印有効-

登録提出　㈱新建築社「NEG空間デザイン・コンペティション」係　TEL 03-3811-7101

審 査 員　岡田新一氏（岡田新一設計事務所）ほか6名

コーディネータ　馬場璋造氏（建築情報システム研究所）

賞　金　A〔提案部門〕
金賞1点100万円、銀賞1点50万円
銅賞1点30万円、佳作5点各10万円
B〔作品例部門〕
金賞1点50万円、銀賞1点30万円
銅賞1点20万円、入選20点各5万円

A〔提案部門〕—課題：公共空間の光と影—

今回の課題は、ガラスブロックを使用することによって、より豊かな時代と社会、そして人間の尊厳を表現するに相応しい「公共空間の光と影」を求めるものである。対象とする公共空間は応募者が自由に想定してよい。提示するものは建築全体の表現であっても、部分的空間の提案であってもよいが、実現可能な技術的見通しを必要とする。

提出図面　提案の意図を表現する図面と簡単な説明文。（模型写真を含む）縮尺・表現は自由。中判ケント紙あるいはそれに類する厚紙1枚（600×840mm）に図面を収める。

B〔作品例部門〕—ガラスブロックを用いた作品例—

デザイン性・機能性・快適性を追求し、感性豊かに表現した作品例を求めている。1991年4月1日～1994年3月31日に日本国内で竣工した建築物・構築物で〈ガラスブロック〉を使用したものに限る。応募は、設計した個人または組織に限る。

提出作品　応募用台紙に所定事項を記入し、作品の完成写真（カラー）を貼り、提出。

「ペイントショー'94」と「色彩シンポジウム」を幕張メッセで開催

「Painting Dynamism—塗料の創り出す可能性—」をテーマに、「ペイントショー'94」が開催される。メーカー、販売店、塗装店が一体となり塗料産業の未来の方向を示すこの展示会の出展者数は134社。

「かたちのいろからいろのかたちへ」というグランドコンセプトのもとに、会場デザインをイギリスの建築家リチャード・ロジャース氏がプロデュースするのも話題のひとつである。また、会期中の4月15日には「色彩シンポジウム」も予定されている。

■ペイントショー'94

会　期　1994年4月14日(木)、15日(金)、16日(土)
10：00～17：00

会　場　日本コンベンションセンター（幕張メッセ）

入場料　前売券800円、当日券1,000円

構　成　(1)テーマゾーン
「色の運動」をテーマにした建築デザイン、照明、ビデオアート、オブジェによるコラボレーションゾーン。
(2)インフォ・テインメントゾーン
塗料の持つ可能性をプレゼンテーション。
(3)出展ゾーン

■色彩シンポジウム

日　時　1994年4月15日(金)　13：30～16：30

会　場　日本コンベンションセンター国際会議室

●記念講演「Color in Society」
講演者／リチャード・ロジャース氏

●パネルディスカッション「色彩と街づくりを考える」
菊竹　清訓氏（建築家）
栄久庵憲司氏（工業デザイナー）
国吉　直行氏（横浜市都市デザイン室）
日原もとこ氏（東北芸術工科大学教授）
今枝　章平氏（日本ペイント）
コーディネーター／木村尚三郎氏

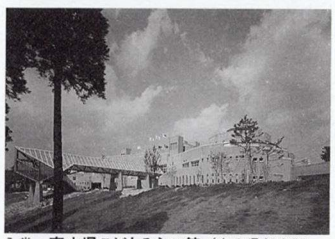
定　員　300人（先着順　入場料10,000円）

申込先　ペイントショー'94事務局「色彩シンポジウム係」（TEL 03-3478-3451）

平成5年度第25回中部建築賞表彰作品



入賞・**碧南哲学たいけん村無我苑　瞑想回廊**／愛知県碧南市
設計／若山滋、篠田川口建築事務所



入賞・**富山県こどもみらい館**／富山県射水郡
設計／仙田満+環境デザイン研究所



入賞・**空を孕む波　大府市いきいきプラザ**／愛知県大府市
設計／笠嶋淑恵、市浦都市開発建築コンサルタンツ



入賞・**太閤山ランド展望塔**／富山県射水郡
設計／葉デザイン事務所



入賞・**NBK 関工園事務棟・ホール棟**／岐阜県関市
設計／大野秀敏+アプル総合計画事務所



入賞・**志賀町立図書館**／滋賀県滋賀郡
設計／徳岡昌克建築設計事務所



入賞・**富山市庁舎**／富山市
設計／日本設計



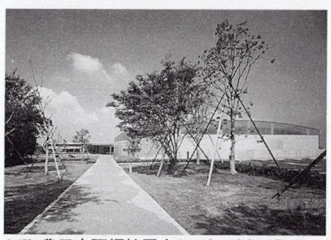
入賞・**足助町福祉センター「百年草」**／愛知県東加茂郡足助町
設計／浦辺設計



入賞・**愛知芸術文化センター**／名古屋市
設計／A＆T建築研究所



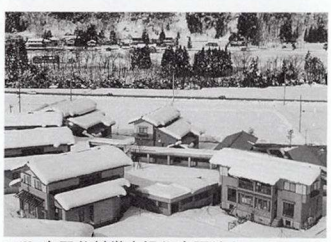
入賞・**VILLA CYPRESS II**（住宅部門）/静岡県御殿場市
設計／木村誠之助総合計画事務所



入選・**豊田中研福祉厚生センター**/愛知県豊田市
設計／竹中工務店名古屋支店



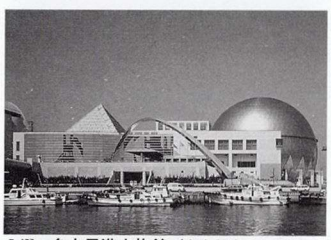
入選・**タラサ志摩**／三重県鳥羽市
設計／清水建設一級建築士事務所



入選・**吉野谷村営木滑住宅団地**/石川県石川郡
設計／水野一郎、金沢計画研究所



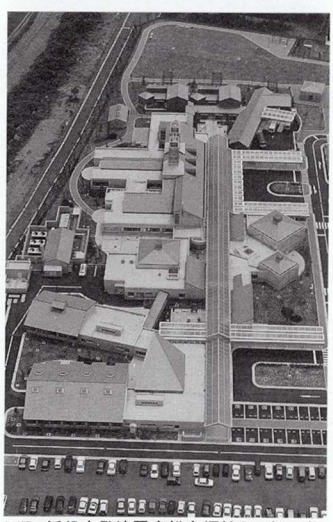
入選・**K's オフィス・窪江邸**（住宅部門）/岐阜市
設計／窪江建築設計事務所



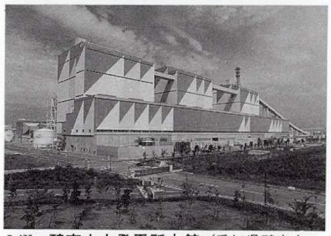
入選・**名古屋港水族館**／名古屋市
設計／大建設計名古屋事務所、名古屋港管理組合



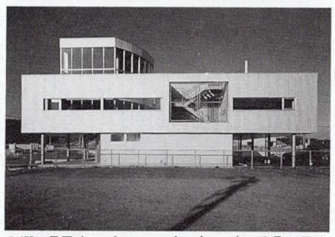
入選・**鈴鹿市立郡山小学校**／三重県鈴鹿市
設計／東畑建築事務所



入選・**浜松市発達医療総合福祉センター**／静岡県浜北市
設計／公共施設研究所



入選・**碧南火力発電所本館**／愛知県碧南市
設計／中部電力、若山滋



入選・**RF ヤマカワ・アネックス**／三重県久居市
設計／設計組織 ADH

中部建築賞の目的は、中部地域の地域社会の発展に寄与したと認められる作品を賞することにある。平成5年度は、平成5年3月31日までに中部圏で竣工した作品を対象に審査（委員長：高橋靹一氏）した結果、入賞10点、入選9点が決定した。

「今回応募の作品の中でも全国版として競えるほどの作品が少ないのはいささかさみしい。その中では愛知芸術文化センターはさすがにコンセプチカルな骨格と、チミツなディテールが群を抜いて完成度が高かった。又、太閤山ランド展望塔も、確かなプロポーションと考え抜かれた地形への配慮の中に設計者の心象がうかがえて気持ちのよい作品であった」（審査総評より）

日本建築協会

月間の動き

【平成5年12月分】

理事会

第7回定例理事会
14日・4時～4時15分・於太閤園
出席者　佐野会長ほか26名
議　事　(1)後援依頼承認の件
　　(2)入退会者承認の件
　　(3)報告事項その他

編集委員会

第9回作品作風小委員会
2日・6時半～8時半・於本会会議室
出席者　前川副委員長代行ほか3名
議　事　(1)作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
　　(2)作品の選定
　　(3)「Gallery」掲載報告・予定
　　(4)「SKETCH BOOK」掲載報告
第9回会員企画小委員会
7日・6時半～8時半・於本会会議室
出席者　佐伯副委員長代行ほか5名
議　事　シリーズものの報告と掲載予定

事業委員会

第8回若い会員の集い小委員会
7日・6時半～9時10分・於本会会議室
出席者　杉本副委員長ほか6名
議　事　(1)前回事業委員会の報告
　　(2)実施報告及び今後の企画について
　　(3)委員の時間

出版委員会

第9回「水にまつわるトラブルの事例・解決策<設備編>」小委員会
10日・2時～5時半・於本会会議室
出席者　川﨑小委員長ほか10名
議　題　最終校正のチェックバック
第8回出版委員会
20日・5時～6時・於本会会議室
出席者　須賀委員長ほか8名
議　事　(1)〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
　　(2)今後のテーマと執筆者選定について
　　(3)第11回「プロのノウハウ」講座について

教育委員会

第2回工高生教育小委員会
21日・5時半～8時15分・於本会会議室
出席者　和田副委員長ほか5名
議　題　(1)本年度・第39回工高生デザインコンクール実施報告
　　(2)次年度・第40回工高生デザインコンクール募集規定
　　(3)次年度の事業企画

見学会

大阪市立総合医療センター見学会
3日・1時半～4時半・参加者68名

建築クラブ

第250回朝食会
7日・8時半～10時・於大阪グランドホテル
演　題　「〝ご縁〟とは不思議なもの」
講　師　清水　公男氏（けいはんな常務取締役）
参加者　60名
第2回建築クラブ役員会
7日・12時～1時・於本会会議室
出席者　佐野代表ほか5名
議　題　(1)新年宴会開催について
　　(2)今後のスピーカーについて
　　(3)平成6年度の会費などについて

建築関係団体合同忘年懇親会

14日・6時～7時半・於太閤園
参加者　350名

12月の入会者（敬称略）

〔団体会員13社〕
旭硝子ビル建材エンジニアリング名古屋㈱
旭テック㈱
㈱安部工務店
㈱川島織物販売中部営業所
関西住建㈱
㈱高島屋名古屋営業所
日本板硝子㈱名古屋支店
千歳電気工業㈱中部支社
東洋シヤッター㈱名古屋支店
㈱間組名古屋支店
ホクセイ㈱
山武ハネウェル㈱名古屋支店
㈱ユニオン名古屋営業所

〔個人会員11名〕

伊藤　幸栄（間組名古屋支店）	木内　一徳（松村組）	小澤　幹雄（須賀工業名古屋支店）
木上　昭男（安井建築設計名古屋）	藤岡　貞幸（安井建築設計名古屋）	高戸　美幸
徳嶋　保昌（徳嶋建築計画事務所）	冨田　昌志（伊藤建築設計(事)）	武藤　謙人（日本設備工業）
村上　孝治（村上建設）	六條　均（IEF 環境問題研究会）	

〔準会員2名〕

角田　龍明（修成建専）	小林　敬子（修成建専）

〔訂正とお詫び〕

本誌平成6年1月号「広島の新しい街造りとアジア競技大会の会場巡り」特集中、99頁の「呉市営二河野球場」作品の施工名称「熊谷組・木之本建設共同企業体」となっているのを「熊谷組・大之木建設共同企業体」に訂正し、あわせて、108頁の「競技会場マップ」写真中「20、24、27」番の写真が説明と異なったものが掲載されているのを謹んでお詫びします。

（編集部）

INFORMATION

「スペースデザインの視点」
――スペースデザインスクールミニセミナー＆94年募集説明会
個としての建築を超えて、群の建築から都市へと連続性を手がかりにして空間デザインを考える。
日　時　1994年3月2日㈬
　　19：00～20：00　セミナー
　　20：00～20：30　説明会
会　場　大阪ガスインテリアデザインスクール
　　大阪市中央区備後町3-6-14
　　備後町オークビル
講　師　遠藤　剛生（建築家）
参加費　無料
申込先　大阪ガスインテリアデザインスクール
　　TEL06-262-4089
　　FAX06-262-7207

「建築と社会」誌

特集一覧● 1974～1994

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。昭和42年からは体裁をA4変形判に変え、特集と作品作風頁を二本柱に、シリーズものの頁を織り込み、その時々の社会を反映したテーマを選んで掲載してきた。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-348-0635, FAX 06-348-0634）まで。販売価格は980円（送料・消費税含）。なお、「建築と社会」創刊号～昭和30年12月号まで全87巻の復刻版が、1991年10月から順次発行（不二出版）・配本されているので、詳細は日本建築協会事務局へお問い合わせ願いたい。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1974 Vol. 55	●歴史的環境保全	●明日の建築はどうなるか＊	●保養所作品＊	●既成市街地の住宅地整備の方策	●北摂ニュータウン計画＊	●建築生産と流通機構の変容	●ビルの省エネルギー化	●高層プレハブ住宅の構造設計	●みどり＊	●屋根防水工事の失敗例とその対策＊	●第21回青年技術者＊	●ビル防災に関する12章
1975 Vol. 56	●図書館	●東海の新建築＊	●インテリア＊	●PC板を使用した工業化住宅	●社会・建築・法＊	●都市の景観と施設	●建築とプレストレストコンクリート構造	●生活排水処理施設のあり方	●人間環境としてのターミナル＊	●騒音対策と防音材料	●第22回青年技術者＊	●集合住宅の設備＊
1976 Vol. 57	●証言'76—建築デザインの動向＊	●建築基礎構造の問題点＊	●医療施設＊	●床工法と材料＊	●建築防災と法＊	●市街地整備＊	●工場建築の設備＊	●鉄骨構造のジョイント	●集住体のハードとソフト＊	●結露防止対策と断熱材料＊	●第23回青年技術者＊	●設備からみた建築の問題点
1977 Vol. 58	●デザインの動向—部分と全体＊	●兵庫県—その風土と建築・建築界	●日本建築協会60周年記念号 ●ニュータウンの管理	●コンクリートの品質管理と行政指導の方向	●日影規制と法＊	●身障者施設＊	●照明設備＊	●埋立地における構造問題—大阪南港と芦屋浜を例として	●日本住宅公団と建築作品	●ミニ乱開発から計画的ミニ開発へ＊	●建築における省エネルギー化	●第24回青年技術者＊
1978 Vol. 59	●デザインの動向—新旧のコントラスト	●水＊	●医療施設—病院建築と情報システム	●外壁塗装材料＊	●電波障害と建築＊	●組合方式による集合住宅計画	●住宅設備	●新しい耐震設計	●CAD—設計とコンピュータ	●一般号＊	●第25回青年技術者＊	●ビル環境
1979 Vol. 60	●転換期の再開発＊	●大阪南港ポートタウン	●商業空間	●コンクリートのひびわれ	●日影規制＊	●ホテル建築と情報システム	●農村施設の変貌＊	●建物の終局強度の検討＊	●庄内のまちづくり＊	●80年代のインテリア＊	●第26回青年技術者＊	●建設業の労務事情＊
1980 Vol. 61	●80年代の都市と建築—まちづくりの歴史と展望＊	●今後の省エネルギーの趨勢 ●建築金物＊	●最近の銀行建築 ●安井建築設計事務所作品集＊	●住宅の耐久性＊	●建築行政と法規＊	●最近の防水工法＊	●都市景観とアメニティ＊	●屋内体育施設の設備＊	●水ぎわのまちづくり	●今後の外装吹付仕上材＊	●第27回青年技術者 ●転機にたつマンション集合住宅＊	●これからの建築設計と新耐震設計法＊
1981 Vol. 62	●職能論＊	●中国の論文—北京の都市計画＊	●ポートピア'81＊	●台所まわりの計画と設備＊	●シーリング材の知識＊	●災害と法—安全な環境をめざして＊	●都市住宅—住まい手からの発想＊	●建築物と風—デザイナーのために ●日建設計作品集＊	●住宅・都市整備公団—関西における都市整備を中心とした新公団の役割＊	●間仕切壁の性能評価＊	●第28回青年技術者＊	●障害者の暮らしやすい環境と設備
1982 Vol. 63	●新たな商業空間の展開＊	●省エネルギーと開口部＊	●医療施設—地域医療と設備計画＊	●近畿の地盤と地質＊	●都市景観—まちなみ美観への誘い＊	●大阪市庁舎（第一期）＊	●ホール建築と音＊	●大スパン構造＊	●昭和設計作品集＊	●絵本にみるすまいとまちづくり ●オー・エム・ホテル 日航ビル	●第29回青年技術者 ●地方の庁舎建築＊	●風土・空気と人間＊
1983 Vol. 64	●関西の建築文化を考える	●マイコンの建築への利用	●多様化する運動施設＊	●建築と品質管理	●計画におけるコミュニケーションとプレゼンテーション	●大阪駅とターミナルビル	●維持管理と設備更新	●東海の将来と文化を考える	●オフィス・インテリアの変革	●プレストレスト・鉄筋・コンクリート構造	●第30回青年技術者 ●大阪城国際文化スポーツホール＊	●集合住宅と生活音
1984 Vol. 65	●21世紀への関西—魅力あるまちづくりを問う	●関西の超高層ビル	●ビルのリフレッシュ—内外装補修技術の現状と発展—	●建設産業とロボット開発	●住環境と法制度	●まちの活性化と商業空間 ●京都駅南口再開発ビル＊	●消防設備のポイント	●みどりとそれをとりまく人々	●高齢化社会と生活空間	●床の構工法	●第31回青年技術者 ●ディテールの思想	●光応用システムと建築
1985 Vol. 66	●大阪湾物語＊	●東海の現在と近未来	●自由様式への道—建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	●情報化をめぐる建築・都市事情	●ホール—それが生みだす文化—	●建物の表情—最近の外壁材料	●大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	●都市と健康・スポーツ	●接合—人体と建築にみる— ●日建設計作品	●村野藤吾の一断章 ●伊勢湾をめぐる東海	●第32回青年技術者
1986 Vol. 67	●これからの住空間—都市型集合住宅にみる	●屋根—そのデザインと素材	●現代デザイン—ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築・設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住居と設備	●開発—その創造的仕掛けの鍵をもとめて— ●ツイン21	●CAD—その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 Vol. 68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚のまちづくり	●建物と街並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 Vol. 69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統—東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明	●制振	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営繕	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 Vol. 70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備Ⅰ	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備Ⅱ ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 Vol. 71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識—中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化—設計の多様化をめざして—＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営繕の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感—建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 Vol. 72	●新しい都市空間づくり—Ⅰ—	●オフィス・オプレジャー ●新しい都市空間づくり—Ⅱ— ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識—複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木技術の世界— ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 Vol. 73	●夢物語—人がかわる、まちがかわる—	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン—東海支部—	●建築家のための設備知識—集合高層住宅の設備システム—	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り—住宅・都市整備公団関西支社10周年—	●木構造を使ってみませんか—集成材による構造—	●接着—建築分野への限りなき可能性	●中国地方の街並みと建築家の「語り、夢、作品」	●屋台—仮設の魅力に学ぶ— ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているのか	●京のかたちと色
1993 Vol. 74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営繕	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境—限りある自然とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生—構造技術の役割— ●大阪市営繕	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境—人にやさしい空間創造をめざして
1994 Vol. 75	●コピー文化の新時代 ●広島の街造りとアジア競技大会											

＊印は欠号

室谷

内装不燃材

室谷商事株式会社

本社　神戸市中央区三宮町3−7−6(神戸フクトクビル5階)
電話　神戸(331) 0881〜3
支店　大阪市北区西天満2丁目6番8号(堂ビル5階)
電話　大阪(364) 2031〜4
倉庫　神戸市東灘区御影石町4丁目（電話811-3610)

OM

テトカッパー防水層

カッパー防水帯 ——— コーパータイト　オクロン防水帯

資料をご請求下さい。

奥山化工業株式会社

本　社 東京都中央区銀座8-4-9 奥山ビル　TEL03(3571)2703㈹ FAX03(3571)0264
大阪事務所TEL06(391)1081〜2FAX 06(395)2109　名古屋出張所TEL052(811)3660
横浜営業所TEL045(320)4832　FAX045(320)4765　厚木出張所TEL0462(21)1761FAX0462(23)1341
埼玉営業所TEL048(774)2845　茨城出張所TEL0292(28)0878FAX0292(28)2614

新しい時代の、新しい扉をひらきたい。

TOYO Shutter

東洋シヤッター株式会社

本　社　〒540 大阪市中央区南新町1−2−10(TSビル)
TEL(06)943−6571(代)
■東京/横浜/盛岡/仙台/水戸/静岡/岡崎/名古屋/富山/大津/京都/神戸/広島/高松/福岡/他全国主要都市

学校建築のトータルアドバイザー

二葉工業株式会社

黒　板・掲示板・家　具
電動黒板装置・サイン・スクリーン

〒547 大阪市平野区加美北3−4−5
TEL06(792)5858　FAX06(792)2810

＊奉仕感謝の店

タイル及び規格石一式施工

株式会社 川岸窯業商店

本　社　大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06−532−0461(代表)
FAX.06−535−5181
天理営業所　天理市丹波市新町49

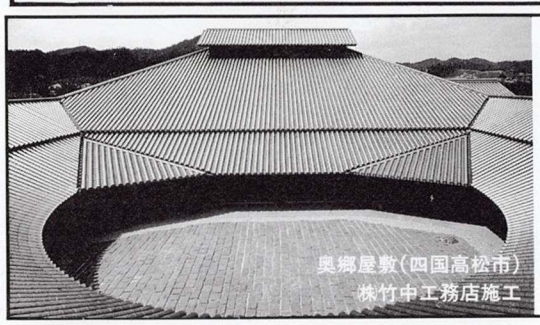
新鮮

情報処理／編集・企画／印刷・製本

ハード&ソフト…プリンティングの先端を拓きます。

ND
日本電植株式会社

本社 〒530 大阪市北区天満1丁目11番8号 TEL06(352)7502 FAX06(352)7486
別館 〒530 大阪市北区天満1丁目7番21号 TEL06(357)1803 FAX06(357)4950



奥郷屋敷(四国高松市)
株竹中工務店施工

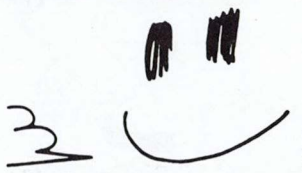
〒556 大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
ナニワ瓦株式会社
あらゆる屋根工事の相談は、
TEL 五六一〜七四五四
ファックス 五六一〜七四一六

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03－3344－1851(大代)　大阪本社☎06－448－3603(代)
大阪支社 ☎06－448－5851(代)　名古屋支店 ☎052－211－1535(代)　中国支店 ☎082－247－5541
九州支店 ☎092－431－2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒650 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)441-8231
東京本社　〒102 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

空気調和　搬送機設備
給排水衛生　設計施工

人に優しい環境づくり

第一工業株式会社

大阪支店　〒530 大阪市北区西天満3丁目6番14号
電話　06－364－6661(代表)
本　　社　〒100 東京都千代田区丸の内3丁目3番1号
電話　03－3211－8511(代表)

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　白谷清二
大阪支店長　三田村嘉也

大阪支店　大阪市中央区北浜2－2－21　電話06(202)3071(代表)
本　　店　東京都千代田区有楽町1-4-1　電話03(3502)6111(大代)
支　　店　名古屋・九州・北海道・中国・東北・北陸・四国

ガス設備の設計・施工のご相談は
大阪ガス指定工事会社・大阪ガス住設機器特約店

大晃設備株式会社

本　　社
大阪営業所　大阪市此花区西九条2丁目13番28号　電 06－466－2268
枚方営業所　枚方市甲斐田東町9－3　電0720－49－2128

空気調和設備
衛生設備設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町3番5号　電話（352）1131代
本　　社　東京都中央区日本橋蠣殻町2－22　電話(3667)3431(大代)
支　　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

給・排水・衛生・消火・空調設備

株式会社 西原衛生工業所大阪店

大阪市北区中津6丁目8番4号　電話大阪(458)3628番
支店・営業所　福岡・京都・天理・川西・神戸

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社　三晃空調

本　　社　大阪市中央区城見2丁目1番61号ツイン21MIDタワー　電話 06－949－1371
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03－3344－1911
大阪本店　大阪市北区西天満4丁目6番18号　電話 06－363－1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡
営業所　札幌・松江
出張所　青森・秋田・盛岡・大宮・千葉・川崎・富山・福井・和歌山・鳥取・岡山・高松・下関・熊本・鹿児島・沖縄

空調・衛生・防災設備　設計並施工

日本管工業株式会社

本社及京都支店　京都市南区西九条豊田町20番地の1
電話(681)5101～5・夜間専用(691)1045
大阪支店　大阪市北区天満1-5-20　電話（06)352-3501代
三重支店　津市栄町2－111　電話(0592)26-3610代
四日市営業所　四日市市西末広町　電話(0593)53-7431代
滋賀営業所　大津市中央2丁目4-28　電話(0775)22-9738代

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　　社　大阪市中央区瓦屋町2丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
郵便番号542　電話 大阪（06）768－5031　代表
メンテナンス部　電　話　大阪（06）　768－　1651　代表
東京支店　東京都文京区小石川1丁目12番14号（日本生命小石川ビル7階）
郵便番号112　電話（03）5689－2351代表

OKUJU
スペース クリエイター

建築に革命をもたらした技術がある
「大規模天井無足場工法」

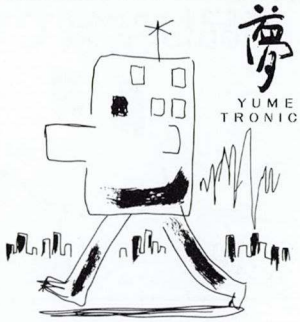
内外装創作パネル・システム天井・間仕切

株式会社オクジュー

本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号 〒530
TEL(06)312-4131　FAX(06)312-7998
東京・九州・横浜・名古屋・仙台・宮崎・京都

さわやかに心豊かな生活空間つくり。

夢 YUME TRONICS



— 電気・計装・空調・土木 —

K栗原工業株式会社

本社／〒530 大阪市北区角田町1番1号(東阪急ビル)
TEL.06(313)1101 FAX.06(315)0050
東京・東関東・横浜・名古屋・大阪南・神戸・広島・四国・九州・シンガポール

Carrier 冷暖房はCARRIER キャリア

東洋キヤリア工業㈱デストビューター関西地区

日本冷熱工産株式会社

本社及大阪営業所 吹田市豊津町40番38号
電話 大阪 (384) 1201～7

電気工事設計施工

株式会社 三興社

代表取締役 土井敏裕

本 社 大阪市北区西天満2丁目6－8(堂ビル5階)
電 話 06(361)3671(代)
支 店 東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電 話 03(3666)1478(代)
営業所 堺・泉州・泉南・滋賀

人と都市の快適な環境をつくります

営業種目 設計・施工・監理

- ●電気設備
  - 受変電・幹線
  - 動力・制御装置
  - 電話、放送、インターホン
  - 防犯、防災
  - 中央監視制御
  - システム計装
- ●空調・給排水・衛生設備
  - 空気調和
  - 工場配管
  - 水処理
  - コージェネレーション
  - クリーンルーム
- ●プラント
  - プラント計装
  - システムエンジニアリング
- ●情報通信設備
  - 情報通信ネットワーク
  - 情報処理
  - 通信システム
  - 放送システム
- ●電力流通設備
  - 受変電
  - 架空送配電
  - 地中送配電

まだ見ぬ力にあふれるクリエイティブカンパニーをめざす。

住友電設株式会社 大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06) 537-3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 ☎(03)3454-7311

電気設備・計装制御設備・空調設備・クリーンルーム設備・プラント設備
給排水衛生設備・エネルギー集中監視システム…設計施工

三宝電機株式会社

取締役社長 嘉納秀一

本 社	〒530 大阪市北区西天満2-6-8(堂ビル)	TEL 06(364)1471・FAX 06(364)5533
東京支社	〒105 東京都港区新橋2-16(ニュー新橋ビル)	TEL03(3504)0231・FAX 03(504)0268
名古屋支店	〒462 名古屋市北区金城3-12-14	TEL052(991)5131・FAX052(914)7535
神戸支店	〒657 神戸市灘区岩屋中町1-2-9(エビスビル)	TEL078(881)5571・FAX078(871)6261
堺研究所	〒590 大阪府堺市三宝町七丁369	TEL0722(27)8408・FAX0722(27)1424

電気設備 ㊋ 設計施工

朝陽電気株式会社

代表取締役 山本貴士

本 社 大阪市北区中之島3－2－4 朝日ビル TEL 大阪06(385)1361(代)
大阪営業所 TEL 大阪06(385)1361(代) 京都営業所 TEL 京都075(311)1185(代)
東京営業所 TEL 東京03(3574)0665 福岡出張所 TEL 福岡092(771)6168

特殊壁装材製造販売 和室に最適

●聚楽壁紙●ホクシノン(無機質壁紙)

(株)ホクシンクロス

〒583 大阪府羽曳野市島泉8－173－1
TEL(0729)39－3610

工場 〒580 大阪府松原市三宅中8丁目1番9号
第一 〒639-11奈良県大和郡山市小泉町2744
第二 〒597 大阪府貝塚市王子501

電気設備工事設計施工

東光電気工事株式会社

関西支社

支社長 馬田栄

大阪市中央区高麗橋4丁目3番7号 電話 大阪(202)0325～9番
本 社 東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支 社 北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・中部・九州

省エネルギー時代の断熱用シート防水材

日立バイナリーシートP

日立バイナリーシートPは，日立防水シートに発泡ポリエチレンを独自の貼り合わせ技術で積層した，二重構造の断熱兼用二重防水シートです。

日立電線株式會社 本社 東京都千代田区丸の内2丁目1番2号(千代田ビル)

Construction chemistry for the future.

コンクリート用混和剤／コンクリート用補修材
高性能無収縮材／コンクリート用高性能床材

Master Builders Technologies

株式会社 エヌエムビー
株式会社 ポゾリス物産

本 社：東京都港区六本木3－16－26
大阪支店：大阪市中央区北浜3-2-23(信愛ビル)
TEL06-202-3294

技術と信頼で人と企業に貢献する

青葉印刷株式会社

代表取締役社長 依藤孝行

〒534 大阪市都島区中野町2丁目10番11号 TEL(06)351－5428(代)
FAX(06)351－5299

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）	コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）	鉄骨ベース、逆打部の充塡モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）	コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）	地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）	コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・網野（07727）2−2220
舞鶴（0773）76−0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）332−6861
TEL 東京（03）3272−8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）443−6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）252−6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83−2381
TEL 大阪（06）877−1581

プロのノウハウ　四六判・224頁　定価1700円

上村 武（(財)日本住宅・木材技術センター顧問）著

木づくりの常識非常識

主な目次

Ⅰ木造住宅の住みごこち
木は調湿の主役/木は熱を伝えにくい/木の床はダニにきらわれる/木の家の結露/人にやさしい木の感触/建物と放射線　他

Ⅱ木造住宅の強さ
木造住宅と地震/木材を他の材料とくらべると/背高木造/住宅の性能を保証する　他

Ⅲ木造住宅は長持ちするか
建築材料の老化のしくみ/木造住宅の寿命/火に強い木造/鉄やアルミが燃える/鉄を木で保護する/虫に食われる/シロアリの話　他

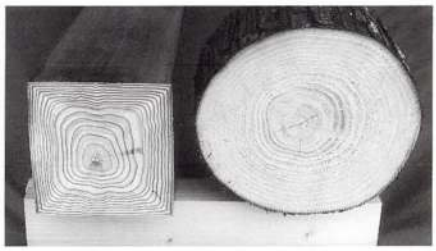
Ⅳ新しい木材
集成材LVL/新しい板材料/木の粘土細工/狂わない腐らない木材　他

Ⅴ木は生きている
赤ちゃん木材/木の伸び縮み/木のかおりの薬効/熱帯雨林の消失/「木を切るな」は誤り/木はかけがえのない栽培資源　他

木と木材を愛する人々へ　木づくりの蘊蓄50話

知っているようで知らない木の特性や木づくりのあり方を，木材のもつ長所の生かし方，短所の補い方と共に情熱を込めて紹介．特に木と木づくりについての誤解や偏見を，多くの実例をあげることによって解消することを試みた．さらに，林業と環境問題，地球の温暖化問題に対する木の役割などまで，わかりやすく蘊蓄を込めて言及した．





企画／日本建築協会

〒600　京都市下京区木津屋橋通西洞院東入
☎ 075-343-0811　振替/京都0-26789

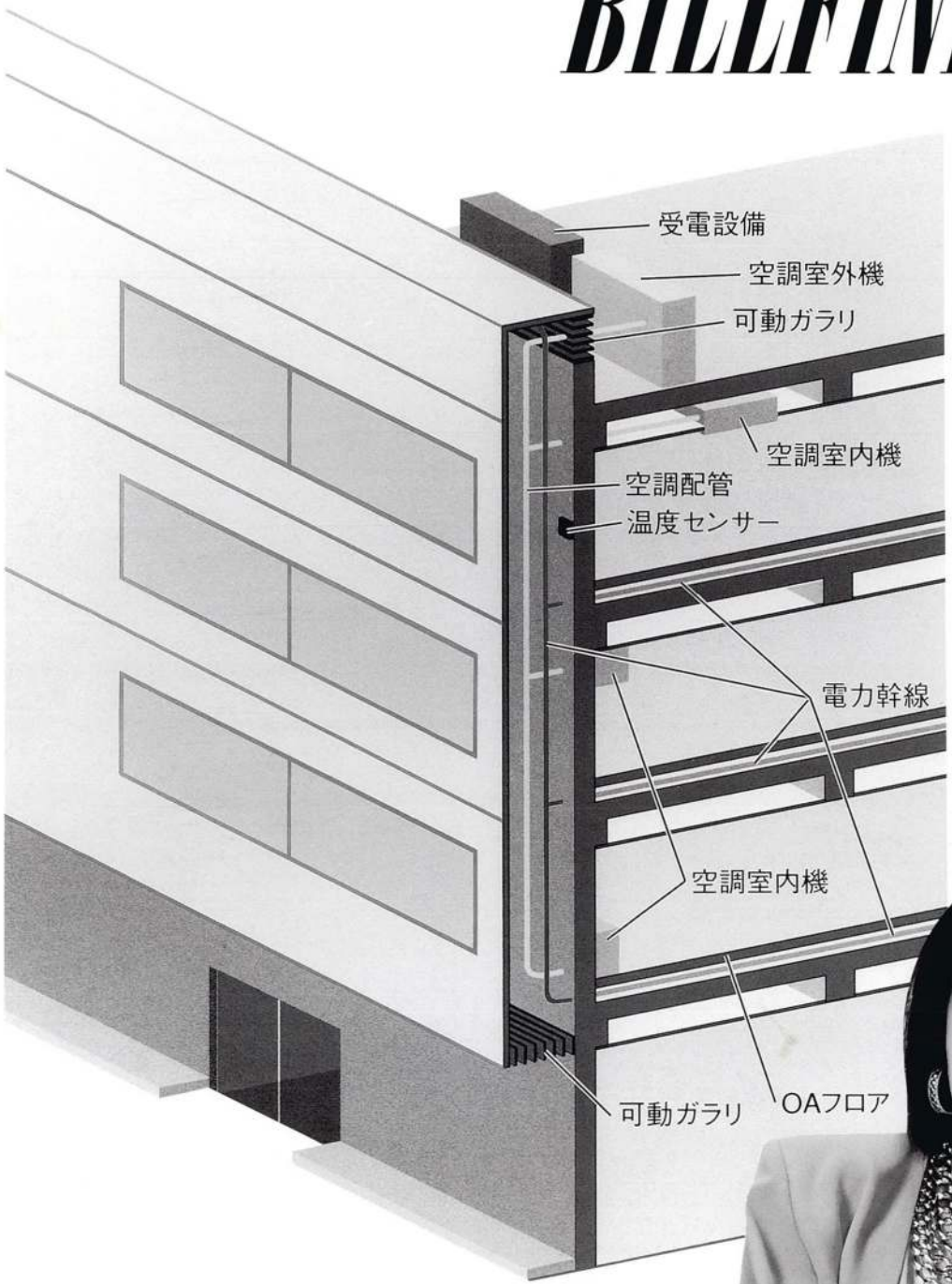
(株)学芸出版社

新しい時代の、新しい扉をひらきたい。
TOYO Shutter

省エネ外装改修システム
BILLFINE®

ビルが呼吸を始めた……

ビルの省エネ対策、インテリジェント化を実現するビルファイン。





ビルファインは、温度センサーが働き、快適なビル環境を維持する省エネビル外装改修システム。春夏秋冬の気温にあわせ、内壁と新壁との空気の流れを調節し、ビル全体の省エネルギー化を実現します。また、電信電話や光ファイバー、電力幹線等の新設や増設に対応。インテリジェントビル化にも適応した次代のリファインシステムです。

東洋シヤッター株式会社

本　社 〒540 大阪市中央区南新町1-2-10 TSビル ☎06(943)6571
東京本社 〒106 東京都港区六本木6-3-18 第一地所麻布ビル ☎03(3479)2911

社団法人 日本建築協会 〒530 大阪市北区梅田1の1の3の2100 電話大阪06(348)0635 FAX06(348)0634
振替口座 大阪一三九九七五番
正会員の購読料は会費に含めて徴収
定価980円（本体951円 送料共 消費税29円）